1節 放送番組の編成

国内放送番組編集の基本計画

「平成23年度（2011年度）国内放送番組編集の基本計画」は，放送総局内で議論を重ねたうえ，編成局で原案を作成した。この原案を理事会で決定し，12月，中央番組審議会に諮問，答申を得たうえ経営委員会で決定した。

以下はその原文である。年表示は西暦にし，記号などは本書の方式に合わせた。

Ⅰ．編集の基本方針

政権交代後も安定しない政治状況や長引く経済の停滞など，日本はさまざまな課題を抱えています。加えて，少子高齢化の進展や生き方・働き方の多様化により地域や家族のきずなが希薄になり，孤立感を深める人々も増えています。このような先行きが不透明な時代に，NHKは，心のよりどころとなり，将来への展望を示すような番組や情報を届け，公共放送への期待に応えていかなければなりません。

また，2011年７月には地上テレビ放送，衛星放送のアナログ放送が終了して，いよいよテレビは“フルデジタル時代”を迎えます。すべての視聴者が円滑にデジタル放送へ移行できるよう万全の態勢で臨むと同時に，衛星放送がハイビジョン２波となるのを機に，地上波もあわせたテレビ４波の役割を改めて明確にして，それぞれの役割にふさわしいコンテンツの開発・再配置と，それぞれの個性を発揮する番組編成を実施します。音声放送も，３波の特性を生かした番組編成を推進します。さらに，インターネットや携帯端末向けサービスも効果的に連携させて，総体としてサービスの充実を図り，視聴者の幅をさらに広げていくとともに，新たな放送文化の創造・発展に寄与します。加えて，取材･報道体制をいっそう強化して，緊急報道をはじめとする視聴者の“生命・財産を守る”ための正確で迅速な情報提供に努めます。

11年度国内放送番組の編集にあたっては，こうした考えのもと，限られた経営資源をより効率的･効果的に活用しながら，質の高い番組や情報をあまねく確実に届けます。

Ⅱ．編集の重点事項

１．衛星放送の２波化とテレビ４波の役割の明確化

11年７月のテレビのフルデジタル化に先立ち，衛星放送は，４月から高画質のハイビジョン２波に再構築し，２波の個性を打ち出した新しいサービスを開始します。BS1は，“国際情報・スポーツ情報”チャンネルとして，新たな国際情報番組の開発やスポーツ中継の拡充を，BSプレミアムは，“本物志向の教養・娯楽”チャンネルとして，テーマや演出にこだわった，個性的な番組やダイナミックな特集編成によって，生まれ変わったチャンネルの魅力を訴えます。さらに，地上波の総合テレビジョン・教育テレビジョンをあわせたテレビ４波について，既存の番組も含めたコンテンツのチャンネル間の再配置も行い，それぞれの個性・役割をさらに明確にして，４波全体で，より幅広い視聴者の関心と興味に応えます。

２．多彩なサービスによる接触者層のさらなる拡大

公共放送として，あらゆる世代の視聴者に親しまれる放送を実現するために，各波において多彩な番組を編成して，サービスの充実を図ります。

総合テレビジョンは，平日夜間の番組の内容を充実させるのをはじめ，土曜夜間をスケール感あふれる特集の時間として，家族そろって楽しめるエンターテインメント性豊かな番組，社会の中核を担う世代に向けた見ごたえのある番組を連続して編成します。また，教育テレビジョンは，“ティーンズ層”の話題となる番組を平日夕方に編成するなど，青少年へ向けたサービスの強化を図ります。

さらに，音声放送は，テーマを絞って特定のファン層の期待に徹底的に応える番組や，インターネットと連動した若い世代に向けた番組などで，聴取者層の拡大を目指します。

３．安心・安全を守り，暮らしに役立つ報道の強化

公共放送の重要な責務である正確で迅速な報道の実施に万全を期します。不安定な内外の政治状況や長引く経済の停滞による産業や雇用への影響，予想を超えた自然災害の発生，地球規模の環

境変化など，さまざまな問題が人々の暮らしを脅かす中，NHKは報道体制をいっそう強化し，人々の暮らしと安全を守る情報を的確に伝えます。

また，ニュースの背景をわかりやすく解説する情報番組や，世の中の流行から経済の動きを読み解く番組などにより，視聴者の関心に的確に応えます。さらに，データ放送では防災に役立つ情報を充実するなど，さまざまなメディアで，それぞれの特性を生かした情報を提供します。

地方自治のあり方に注目が高まる中，11年４月に予定される統一地方選挙にあたっては，開票速報など関連放送の実施に万全を期します。

４．質の高い“大型コンテンツ”の開発

フルデジタル時代の幕明けに，壮絶な地球環境の変化を生き抜いてきた，人類15万年の歩みを見つめるシリーズや，最新のデジタル映像技術により，これまで誰も見ることのできなかった宇宙の姿を体感する企画など，良質でスケール感のある大型コンテンツを積極的に編成し，存在感を示します。

このほか，09年度から，日本の近現代史を見つめなおしてきた「プロジェクトJAPAN」は，締めくくりとなる11年度に,「太平洋戦争開戦70年」「サンフランシスコ講和条約60年」の節目の年として，関連の大型企画を放送します。

５．“放送局のちから”を発揮した放送の充実

少子高齢化，医療や福祉，雇用など，地域社会は生活の基盤となる分野でさまざまな課題を抱えています。

全国の地域放送局は“地域を元気にする拠点”として，地域の人々に心から喜ばれ，役に立つ，きめ細かなサービスを展開します。また，地上波において，地域から全国へ向けた情報発信枠を強化して，地域の持つ多様な魅力や地域が抱える課題を伝えます。さらに，若い世代が参加できる公開番組の展開や，地域向けデータ放送のリニューアルなど，さまざまな取り組みで地域サービスを拡充します。

６．放送と放送以外のメディアを連携させた多様なサービスの展開

テレビのフルデジタル化により，さらに多くのテレビでデータ放送を見ることが可能になり，視聴者にとってより身近なメディアになります。これを機にデータ放送は，既存のコンテンツの見直しと新しいサービスの開発で，視聴者の利便性の向上と内容の充実を図ります。

また，放送・通信融合時代にあって，さまざまな年齢層の視聴者がNHKの情報・コンテンツに“いつでも，どこでも，もっと身近に”接触できる環境を実現するために，放送に加えて，パソコン，携帯端末等も活用したサービスに引き続き取り組みます。

７．テレビのフルデジタル化への円滑な移行に向けた取り組み

７月のテレビのアナログ放送終了・フルデジタル化に向けては，放送をあまねく届けることが公共放送の重要な責務との認識のもと，デジタル放送への円滑な移行のための情報の周知に努めます。

放送を通じて，デジタル放送受信のための基本的な知識や情報を提供するほか，個々の受信者の受信環境に応じた対策など，きめ細かな情報の提供に努めます。並行して，デジタル放送の魅力を最大限発揮した番組も積極的に編成して，視聴者のデジタル放送移行への意欲を高めます。

８．“人にやさしい放送”の充実

字幕放送・解説放送・手話など“人にやさしい放送”の充実を推進します。

字幕放送は，総合テレビジョンの生放送の情報番組に新たに字幕を付与するなど，今まで以上にサービスの拡充を図ります。また，解説放送については新たに長期計画を策定し，サービスの充実に努めます。

以上の重点項目の実施にあたっては，以下のような施策を中心に，創造的で活力に満ちた取材・制作体制を構築します。

○限られた経営資源を効率的・効果的に活用する制作体制を構築します。
○企画競争などを通して国内外の優れた制作者のざん新な発想や手法を積極的に取り入れ，番組の多様化を維新します。
○放送倫理やコンプライアンス意識の徹底，人材の育成に力を入れ，確かな情報と質の高い番組の提供に努めます。

Ⅲ．各波の編集方針

１．総合テレビジョン

総合サービス波として，国民生活に必要不可欠なニュース・情報番組や創造的な文化，教養，娯楽番組などの調和ある編成を行います。フルデジタル時代を迎える映像４波の基幹波として，各世代に共感される多彩な番組や，世代を超えて楽しみ，考える“NHKだからできる放送”のさらなる充実を図ります。また，地域放送について，全国への発信も含めていっそうの充実を図ります。ワンセグ放送では同じ内容の番組を同時放送することを基本とします。

〔放送時間〕

○１日24時間放送を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，報道番組20%以上，教育番組10%以上，教養番組20%以上，娯楽番組20%以上を編成します。

※７月までアナログ総合テレビジョンでは同じ内容を放送します。

２．教育テレビジョン

教育テレビジョン（Eテレ）は“未来を志向する”チャンネルとして，主に“未来を生きる子どもたち”“明日を担う若者”を対象とした番組を強化します。また，10年度に引き続き「大きく伸びろ！子どもたち」「ともに生きる社会」「心豊かな暮らし」を３本柱のテーマとして，より広い視聴者の期待と要望に応えるとともに，定時マルチ編成を実施します。ワンセグ放送では同じ内容を同時放送しつつ，昼休み・深夜・週末を中心に独自サービスの充実を図ります。

〔放送時間〕

○１日21時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教育番組75%以上，教養番組15%以上，報道番組若干を編成します。

※７月までアナログ教育テレビジョンでは同じ内容を放送します。

３．BS1

“いま”の国際情報，“ナマ”のスポーツを中心に，ライブ感あふれる波としての魅力を訴えます。スポーツについては，朝から午後にかけての時間帯をスポーツゾーンとして強化します。国際情報については，世界のニュースや多様な情報を伝える朝と夜のデイリー基幹番組を刷新するとともに，週末には最新の映像技術を駆使し，インターネットで世界を結ぶなど，デジタル化のメリットを視聴者が実感できるような番組を開発し，“世界のいま”を知ることができるチャンネルとして視聴者への浸透を目指します。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教育番組10%以上，教養番組20%以上を編成します。

※７月までアナログBS1では同じ内容を放送します。

４．BSプレミアム

“本物志向の教養・娯楽波”のBSプレミアムは，40～50代を中心とした視聴者に向け「紀行」「自然」「美術」「歴史」「宇宙」「音楽」「シアター」という７つの分野の良質な番組を核に，映画やドラマなども含めた多彩な番組で，新しいBS波への期待に応えます。また先進的な演出手法やテーマ，ダイナミックな編成に挑戦し，新たなテレビ文化創造に貢献します。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○特に定めない。

※７月までアナログBSプレミアムでは同じ内容を放送します。

５．ラジオ第１放送

ニュース・報道番組のいっそうの充実・強化に取り組み，災害など緊急時には機動的な編成を行うなど，「安心ラジオ」としての役割を果たします。また，身近な“生活情報波”として，インターネットや携帯端末を通して聴取者の声を取り入れた番組づくりで双方向化を進めるなど，いわゆる団塊世代を中心にさらに若い世代へと聴取者層の拡大を図ります。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，報道番組35%以上，教育・教養番組あわせて25%以上，娯楽番組20%以上を編成します。

６．ラジオ第２放送

11年４月に放送開始80周年を迎えるのを機に，

“生涯学習波”としてさらなる質の向上を図ります。中核となっている語学番組や文化・教養番組のさらなる充実を図り，聴取者との接点を増やします。また，語学番組を中心に，ストリーミングをはじめとしたクロスメディア展開を引き続き行い，聴取者が利用しやすい形での番組提供に努めます。

〔放送時間〕

○１日19時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，教育番組65%以上，報道番組10%以上，教養番組15%以上を編成します。

７．FM放送

“総合音楽波”として，優れた音質を生かした多彩な音楽番組や，幅広い聴取者が楽しめるさまざまな分野の長時間特集を編成し，音楽ファンの期待に応えます。また，災害など緊急時には，地域情報波としてラジオ第１放送と連携して機動的な編成を行うなど，きめ細かな情報を提供します。

〔放送時間〕

○１日24時間を基本とします。

〔放送番組の部門別編成比率〕

○定時番組について，報道番組10%以上，教育・教養番組あわせて40%以上，娯楽番組25%以上を編成します。

放送番組の改定

Ⅰ．４月の番組改定

１．総合テレビジョン

（１）土曜夜間を楽しく，魅力的に大幅刷新

土曜夜間に２つの75分の大型特集枠を新設した。夜７時30分開始のゾーンは，家族そろって楽しめるエンターテインメント性に富んだ『ごきげん歌謡笑劇団』『検索deゴー！とっておき世界遺産』などを，また，夜９時に始まるゾーンは，『NHKスペシャル』『土曜ドラマスペシャル』のほか，社会の課題に鋭く迫る『サンデル究極の選択』や『もしも明日…』などを，柔軟に編成した。

（２）土日午前にニュース解説・情報番組を新設

土曜朝８時台には１週間の出来事をコンパクトに振り返り，分かりやすく多角的に解説する『ニュース　深読み』を，続く10時台にはペットやガーデニングなど週末ライフを楽しむための情報番組『土曜マルシェ』を編成した。日曜朝には，世の中のトレンドを入り口に，経済の動きを掘り下げる新たな情報番組『サキどり』などを新設した。

（３）平日夜間のさらなるブラッシュアップ

幅広い世代を引き付ける編成を目指し，木曜午後８時台に『仕事ハッケン伝』『セカイでニホンGO！』を新設した。また夜10時台には，働き盛りの世代に向けた『ディープピープル』『アスリートの魂』『総合診療医ドクターG』をそれぞれ新設した。

（４）放送外メディアを駆使した週末の若年層向け娯楽番組

10代後半から30代の若い視聴者に向けて，デジタルツールや双方向機能などを駆使する番組を集中編成した。金曜深夜に衛星放送で多くの双方向参加を集めてきた『Shibuya Deep A』を移設した。また，若い世代の文化や流行を伝える『MAG・ネット』や，土曜夜間に『ケータイ小説ドラマ』などを新設した。

（５）午後の時間帯の強化

NHKの全国ネットワークを生かし，平日の午後３時台に全国の放送局が制作した番組や，地域向けに制作した番組を放送する『ろーかる直送便』を編成した。また，木・金曜の午後４時台には時代劇をアンコール編成したほか，土曜の夕方には『のんびりゆったり路線バスの旅』を新設した。

（６）大型番組のさらなる強化

３月11日におきた東日本大震災に関連するNHKスペシャルを多様な視点から放送した。また，09年度にスタートした『ホットスポット　最後の楽園』を継続するとともに，日曜夜９時の『NHKスペシャル』では，「ヒューマン」「宇宙の渚」など，長期取材による大型のシリーズ企画を積極的に展開した。

２．Eテレ

（１）“少年少女ゾーン”“ティーンズゾーン”の充実・強化

ローティーンからハイティーンにかけて視聴者層拡大を図るため，平日午後６～７時台を充実させた。

『大！天才てれびくん』は，全国の小学生たちがさまざまなかたちで番組にアクセスできる視聴者参加型番組に刷新した。あらゆるテーマのランキングをもとに，中高生たちの本音を引き出していく『Rの法則』，小学校対抗のパフォーマンスや，中高生とプロとの競演などを盛り込んだ公開番組『スクールLive Show』などを新設した。また，放送開始50年を迎える『中学生日記』を移設

するなど，“ティーンズ層”に向けた時間帯としての充実を図った。

（２）“幼児・子どもゾーン”の拡充・刷新

朝夕の“幼児・子どもゾーン”を拡大し，サービスの充実を図った。平日朝６時台に人形を使った子ども向けバラエティー『フックブックロー』を新設した。また『いないいないばあっ！』『おかあさんといっしょ』『みいつけた！』の内容を充実するとともに，３番組に連動した新しいアニメキャラクターを開発し，訴求力を高めた。さらに，土曜朝７時から，デザインについて楽しく思考する『デザイン　あ』を新設し，土・日曜朝のゾーンも強化した。

（３）“趣味・実用・教養ゾーン”の充実

夜９～10時台の“趣味・実用・教養ゾーン”は，時間帯が深まるにつれて視聴ターゲットが高齢層から若年層にシフトしていく編成とし，多彩な番組であらゆる世代の知的好奇心を満たしていく編成とした。夜９時台には，衛星放送から移設した『俳句王国』，夜10時台には現代を出発点に日本史を学び直す『さかのぼり日本史』，古今東西の“名著”のエッセンスを読み解く『100分de名著』，古典芸能の魅力を幅広く紹介する『にっぽんの芸能』を新設した。さらに，土曜夜９時台に最先端のフラワーデザインの極意を伝える『スーパーフラワーレッスン』を新設し，週末夜間の充実にも取り組んだ。

（４）若年層向け番組の充実

“若者ゾーン”は，月曜から木曜の深夜０時台に移設するとともに，資格取得を支援する『資格☆はばたく』を新設するなど，ゾーンの拡充を図った。さらに金曜夜11時～午前０時台も若者向けゾーンとして20～30代向けの健康番組『名作ホスピタル』などを新設した。土曜は，好評を得た『佐野元春のザ・ソングライターズ』の新シリーズや，２人の著名人が人生を音楽でつづる新番組『ミュージック・ポートレイト』などにより，ゾーンの存在感を一層明確にした。

また，日曜午後６時からは，大きな反響を呼んだ『ハーバード白熱教室』を引き継ぎ，国内外の大学の活気あふれる授業を伝える『白熱教室』を新設した。このほか，朝５時台は就業前の時間を自己研鑽に充てる“朝活ゾーン”とし，学習意欲の高い視聴者の要望に応える番組を編成した。

（５）学校放送番組の再構築

教室内の利用促進のため，学校放送番組の10分化を推進した。さらに，金曜深夜には録画利用を目的とした『学校放送ライブラリー』を新設した。

（６）“人にやさしい放送”の充実

聴覚障害者のための情報の充実を求める声に応えて，『ろうを生きる　難聴を生きる』の制作本数を増やした。このほか，在日外国人向けの日本語講座を視聴者の要望も踏まえ，さらに実用性の高い内容に刷新した。

３．BS1

（１）国際情報番組の充実・強化

国際情報波としての存在感を高めるため，番組を全面的に刷新した。午前６・７時台に『ワールドWaveモーニング』，夕方５時台に『ほっと@アジア』，夜間10時台には『ワールドWaveトゥナイト』，夜間11時台には『地球テレビ　エル・ムンド』を新設。最新の国際ニュースや刻々と動く経済情報をタイムリーに伝えるほか，インターネットを活用した高画質の海外中継を取り込むなど，番組内容の充実を図った。

また，これまで各国の放送局のニュースをそのまま放送していた時間帯は，『ワールドWave』『ワールドWave　アジア』に刷新，日中時間帯を中心に，キャスターによる案内を加えながら，よりライブ感をもって伝えた。

（２）ドキュメンタリー番組の充実・強化

国際情勢・経済・環境など，世界や日本がいま直面している課題について，身近で人の心に迫るジャーナルな視点で描く『ドキュメンタリーWAVE』を土曜の午前０時台に新設。『BS世界のドキュメンタリー』と合わせ，情報番組とは異なる視点から世界を見つめる番組編成を目指した。

（３）スポーツ番組の充実・強化

午前から午後にかけての時間帯をエキサイティングスポーツゾーンとして強化，メジャーリーグの２階建て編成を増強した。さらに，日曜夜11時台に『スポーツドミンゴ』を新設し，時間を15分延長した土曜夜11時台の『BSベストスポーツ』とあわせ，週末夜間のスポーツイメージの向上を図った。

（４）国際放送との連携

平日午後２時台に国際放送番組のショーウインドーゾーンを設け，在日外国人向けだけでなく，国内の視聴者にも幅広く見てもらうための編成を行った。

（５）週末夜間に放送と通信を融合させた番組

土曜夜間に，最新のデジタル映像技術を駆使し，インターネットで世界の人々を結ぶ『地球テレビ100』を新設。継続番組の『地球アゴラ』とあわせ，放送と通信を融合させる番組の可能性を追求

した。

４．BSプレミアム

（１）平日ゴールデンタイムに，７つの分野の基幹番組を編成

テレビを見る人が最も多いゴールデンタイムに，BSプレミアムが掲げる７つの分野の基幹番組を編成した。平日夜８～９時台には，『旅のチカラ』や『コズミック　フロント～発見！驚異の大宇宙』などの60分番組を新設した。また，夜７時台には，連続ドキュメント『にっぽん縦断　こころ旅』や，その週の主な番組を紹介する『BSコンシェルジュ』などを新設した。バラエティーに富んだ番組で視聴者が途切れることなく楽しめる編成を目指した。

（２）週末に訴求力のある大型番組を編成

働き盛りの40～50代のテレビ視聴が増える週末に，“ゆったり”“たっぷり”楽しめる番組を編成した。『BS時代劇』や『ショータイム』を新設したほか，『ハイビジョン特集』を土曜夜間に移設し，視聴者層のさらなる拡大を目指した。

（３）平日朝７時台に，視聴習慣の定着を目指したデイリー番組を編成

平日朝７時台は，視聴習慣が定着している『連続テレビ小説』の先行放送の前後に，「音楽」「紀行」「美術」など，さまざまな分野をテンポある構成でコンパクトに見せるデイリー番組を新設した。時間に追われる朝の生活実態に即した新しい編成を目指した。

（４）夜10～11時台には，映画や海外連続ドラマ，アニメなどを編成

映画ファンの期待に応え，夜10時台の『BSシネマ』を拡充した。海外連続ドラマは，金曜夜10～11時台に『glee』『デスパレートな妻たち６』を，日曜夜９時台に『宮廷女官チャングムの誓い』『イ・サン』のイ・ビョンフン監督最新作『トンイ』を新設するなど，話題作を積極的に取り上げた。このほか，大人向けアニメ『へうげもの』を新設した。

（５）その他

アーカイブス番組として『もうひとつのシルクロード』を新設したほか，『BSアーカイブス』は午前中に移設し，放送枠も拡充した。

『プレミアムシアター』は，土曜夜11時台に移設し，クラシックをはじめ国内外の超一流の舞台芸術を長時間にわたってたっぷりとお届けした。BSプレミアムは，夜間以外の時間帯でも多彩な番組を編成し，40～50代を中心に，これまで以上に幅広い視聴者の獲得を目指した。

５．ラジオ第１放送

（１）土・日夜間に若年層向けの番組

土曜夜に，パソコンで作った歌を紹介する『エレうた！』と，人気アニメの魅力を語る『渋谷アニメランド』を編成した。日曜夜は，７時台に『AKB48の私たちの物語』と『上地雄輔のラジ音！』（ともに本放送はFM）を新たに編成。午後８～10時台の『渋マガZ』と合わせ，若者向けの時間帯として充実させた。

（２）土曜午前に10代向けの番組を新設

土曜朝９・10時台に，思春期の悩みに答えながらエールを送る『カケダセ！』と，身近な科学の疑問に答える『みんなで科学　ラボラジオ』を新設。10代の中高生への浸透を図った。

（３）平日夜間に30～40代向けの番組を新設

平日夜８～９時台は，30～40代に楽しんでもらえる番組を編成。脚本家と俳優がドラマや音楽について語り合う『岡田惠和　今宵，ロックバーで～ドラマな人々の音楽談義』，スポーツ名場面の舞台裏に迫る『渋谷スポーツカフェ』，大人になってからの学び直し『オトナの補習授業』など，多彩な分野の番組を新設した。

６．ラジオ第２放送

（１）文化・教養番組の充実と再放送枠の新設

放送開始80周年を機に，ラジオ第２放送の柱の一つである文化・教養番組の充実を図った。著名な文豪や知識人の肉声を現代によみがえらせる『NHKラジオ・アーカイブス』や『詩歌を楽しむ』など，『カルチャーラジオ』の内容を一部刷新すると同時に，『朗読』については“日本人論”をテーマにした大型シリーズを放送した。さらに，『文化講演会』『日曜カルチャー』『朗読』については，再放送枠を新たに設け，サービスの充実を図った。

（２）語学講座番組の充実

英語とポルトガル語の講座番組については，より実用本位の内容に刷新した。また，平日午後０時台を英語講座のゾーンとし，要望の高い番組を編成した。

（３）国際放送と連動した番組の充実

英語で文化情報を発信する『Friends around the world』や中国語番組『中文日本百科』の再放送枠の増設など，国際放送番組の活用により，国内の聴取者や在日外国人に向けたサービスの向上を図った。

７．FM放送

（１）コアな音楽ファンに向けた深夜の音楽番組

月曜から金曜の深夜０時台に，一つのテーマやアーティストに徹底的にこだわる音楽番組『とことん○○』を新設。コアな音楽ファンも楽しめる多彩なテーマで伝えた。

（２）週末夜間に若者向け番組を新設

金曜夜10時台に，AKB48がラジオドラマに挑戦する『AKB48の私たちの物語』，俳優・上地雄輔がパーソナリティーをつとめる『上地雄輔のラジ音！』を新設。若いリスナー層の拡大を図った。

（３）一流アーティストによる個性的な音楽番組

金曜夜９時台に，ミュージカル俳優が舞台音楽を紹介する『石丸幹二のシアターへようこそ』，ダンサーがバレエ音楽を案内する『熊川哲也のバレエ音楽スタジオ』を新たに編成。一流アーティストならではの視点で，音楽の楽しみ方を提案した。

Ⅱ．年度途中の新設番組など

１．総合テレビジョン

（１）新設番組

10月の改定では，木曜夜間に，親子で楽しめる世界紀行番組『地球イチバン』（10月27日～），火曜夜間に，30～40代の女性層をターゲットにした『よる☆ドラ』（10月18日～），土曜夜間についても，夜９時台を特集編成枠とし，見応えのある長時間特集をタイムリーに編成した。

（２）ドラマの新シリーズ

『連続テレビ小説』では「カーネーション」(10月３日～)，『大河ドラマ』では「平清盛」（１月８日～）を放送した。また，司馬遼太郎原作の『スペシャルドラマ～坂の上の雲』については，09年に引き続き，３年間にわたる完結シリーズとして，全13回のうちの10～13回を放送した。

２．Eテレ

10月の改定では，趣味・実用枠の『スーパーフラワーレッスン』の後続として『グレーテルのかまど』を新設した。海外ドラマでは，『新ビバリーヒルズ青春白書２』に引き続いて，第３シリーズを放送した。若者向け番組の新シリーズとしては，『スコラ　坂本龍一　音楽の学校』(10～12月）と『アンジェラ・アキのSONG BOOK in English』（１～３月）を放送した。

アニメについては，土･日夕方の編成を見直し，土曜午後５時30分から『バクマン。（第２シリーズ)』，日曜午後５時30分から『ファイ・ブレイン～神のパズル』を放送した。さらに『ファイ・ブレイン～神のパズル』の関連番組として，ミニ番組『もっと²神のパズル』を続けて放送し，各話の内容とパズルに即した実写ミニコーナーなどで，番組の魅力を掘り下げた。また，１月からは，民放ですでに人気のあった『アニメ　日常』を放送し，反響を呼んだ。

３．BS1

よりホットな海外ニュースを伝えるため，欧米の冬時間スタートに伴い『ワールドWaveモーニング』を，午前６～７時台から７～８時台に移設した。また，東京証券取引所の取引時間変更に合わせ，『東京マーケット情報』を12時スタートに変更。月～金の午後11時に放送している『地球テレビ　エル･ムンド』を見逃した視聴者のために，１週間分をコンパクトにまとめてお伝えする『地球テレビ　エル・ムンドPLUS』を毎週日曜午前０時に新設した。

４．BSプレミアム

10月の改定では，平日の夜間に魅力的な番組を新設した。地球の鼓動や極限の地ならではの驚異の自然現象を，圧倒的な臨場感で届ける大型自然番組『体感！グレートネイチャー』の中から特選映像を29分に凝縮した『驚き！地球！グレートネイチャー』（10月11日～）。これまで放送してきた総合テレビの『SONGS』（水　後10:55～11:24）の中から，選りすぐりの回を57分で再構成して届ける『SONGSプレミアム』（10月６日～）。「海」「祭り」「塔」といったテーマ別に，世界中に広がる世界遺産を訪ねて新撮，NHKがこれまで撮り続けてきた珠玉のアーカイブス映像と立体的に組み合わせて，世界遺産の魅力とそこに生きてきた人たちの息づかいを，時空を超え，あますことなく伝える『世界遺産　時を刻む』(10月７日～)。スタンダールの名作「赤と黒」を下敷きに，美貌と悪魔のような心で女たちを次々に虜（とりこ）にし，富と権力をつかもうとのし上がっていく主人公の欲望と陰謀渦巻く人間模様を，現代の韓国を舞台に描く『日韓共同制作ドラマ「赤と黒」』（10月７日～)。妻として母として家族を支えてきたアラフォー元弁護士のアリシアが，州検事の夫が公金横領とセックス・スキャンダルで逮捕されたのをきっかけに，10数年ぶりに弁護士に復帰，持ち前のバイタリティーと推理力で困難な裁判に挑むシリ

ーズの第２シーズン『グッド・ワイフ２』（10月７日～）。

また，平日の午前に，視聴者が選んだ全国の魅力的な里山から毎回１か所を取り上げ，“その土地ならでは絶景”を描き出し，風景に秘められた“自然を上手に利用する人の暮らしや知恵”，そこに“共生する生きものの営み”を，自然番組独自の生態映像や特撮を交えながら紹介する『ニッポンの里山　ふるさとの絶景に出会う旅』（12月19日～）を新設した。

５．ラジオ第１放送

プロ野球ナイトゲームの終了に伴い，木・金曜の午後８～９時台の編成を刷新した。木曜は，桐島かれんさんが多彩なゲストとライフスタイルを語る『かれんスタイル』を放送。金曜は，昨年度に続き『いとしのオールディーズ』を編成し，洋楽ファンの要望に応えた。

国内放送番組審議会

放送番組審議会は，放送事業者に対して放送法で設置が義務付けられている法定の審議機関である。NHKは国内放送に関わる「中央放送番組審議会」と８つの「地方放送番組審議会」，国際放送に関わる「国際放送番組審議会」を設置している。

番組審議会は，放送番組の適正を図るための自律措置として設けられているものであることから，委員の人選にあたっては学識経験者などの中から，社会動向や属性など全体の調和を考え，視聴者の意向が的確に反映されるよう，幅広い観点から委嘱を行っている。委員数は，12年３月現在で中央審議会は16人，地方審議会は９～12人で組織している。会議は，毎月１回の定例開催日に議題を設けて実施している（８月は休会）。会長の諮問に応じて全国向けの「国内放送番組編集の基本計画」と各地域向けの「地域放送番組編集計画」について審議し，答申したほか，番組全般について意見交換を行った。

１．中央放送番組審議会

中央放送番組審議会は，11年度中に11回開催し，会長の諮問により，「平成24年度国内放送番組編集の基本計画」について審議し答申したほか，広く国内放送番組全般について活発な意見交換を行い，放送番組への反映を図った。

また，放送法の改正に伴い，５月に「放送番組の種別の基準」（案）を諮問し，11月には７～９月の国内放送番組の種別の実績，種別ごとの放送時間を報告した。

11年度中の主な議題は次のとおり。

４月　東日本大震災関連の放送，平成23年度の新番組・新編成を中心に，放送番組一般について

５月　「国内放送番組の種別の基準」（案）について－諮問－
『Amazing Voice　驚異の歌声　アジアの島々（１）アトランタに響いた歌声』について

６月　平成23年度国内放送番組の番組の種別，種別ごとの放送時間（計画値）について
『週刊 ニュース深読み』について

７月　『スクールLive Show forTEENS　高校吹奏楽選手権in大阪（１），（２）』について

９月　平成23年度後半期の国内放送番組の編成について
平成24年度の番組改定について（意見聴取）

10月　『地球テレビ　エル・ムンド』について

11月　国内放送番組の種別の実績，種別ごとの放送時間について
「平成24年度国内放送番組編集の基本計画」（案）について

12月　「平成24年度国内放送番組編集の基本計画（案）について－諮問－

１月　『地球イチバン・スペシャル　地球でイチバンのアスリートの町』について

２月　「平成24年度国内放送番組編成計画」について

３月　『連続テレビ小説～梅ちゃん先生』について

番組審議会の活動内容の公開については，各番組審議会の議事概要を毎月，放送やインターネットなどで公表しているほか，各放送局で議事概要の備え置きを実施するなど積極的に行っている。

２．地方放送番組審議会

全国８つの地方ごとに「地方放送番組審議会」が設けられ，各地方の放送番組の基本方針を審議している。

11年度中に各地方とも11～12回開催し，会長の諮問に応じて「平成24年度各地方向け地域放送番組編集計画」について審議し答申したほか，番組全般について意見交換し，その適正化を図った。

２節 放送番組の制作

報道・スポーツ番組

Ⅰ．取材・制作・放送システム

東日本大震災以降継続している大規模な余震や９月に襲来した台風12号・15号など大きな被害をもたらした自然災害等にあたり，NHKで開発・整備してきた国内外のさまざまなシステムや設備が，ニュース・緊急報道を支え，視聴者の負託に応える大きな力となった。また，地上テレビ放送の完全デジタル化に合わせて津波情報などの画面レイアウトを見直すなど，災害情報等の確実な提供に努めた。

１．ニュース取材・制作設備

インターネットのニュースサイトを「NHK NEWS WEB」の名称で６月にリニューアル，同時に最新の情報を提供する「LIVE NEWS」(2012年３月には「JUST IN」に改称）や記者の署名記事を中心とした「WEB特集」といったコンテンツを展開し，スピードと読み物としてのNEWS WEBの展開を図った。また，災害発生時や注目の事件・事故などの際には随時「特設ページ」を設けて関連したニュースをまとめて掲載し，視聴者の便宜を図った。

ニュース映像素材の制作・送出をテープレス化し，より迅速なニュース・報道対応を実現するため，本部ニュースセンターに報道情報システムと連携した大規模なハイビジョンビデオサーバーシステムの導入を進めている。10月には，BSニュースセンターで本システムの運用を開始し，現在，その運用状況を踏まえ，ニュースセンター全体への導入・運用開始に向けた整備を継続している。

３月には，本部ニュースセンターでテロップや字幕スーパーなどを送出していたGTV静止画ファイル装置を更新し，静止画に加えアニメーションなどの動画送出も可能なアート送出サーバーを導入した。

海外総支局の設備整備として，11年度は，老朽化が進んだ可搬型テレビジョン方式変換装置，HDコーデック，ソウル支局のスタジオカメラの更新を行い，信頼性に加え運用性の向上を図った。また，「米日専用回線」の更新に合わせてアメリカ総支局とヨーロッパ総局の回線MTX装置の強化やマルチビューワを利用したモニター環境の充実を実施した。これらの整備により，海外総支局における機材・設備の安定運用を確保するとともに，国際情報の発信力強化などにつなげることができた。

２．緊急報道設備

東日本大震災の影響で東北・関東では夏に向けて電力需給が逼迫（ひっ）するおそれが予想されたため，電力の需給状況を作画するシステムを開発し，６月からニュースやデータ放送，インターネットのホームページを通じて，視聴者へ電力需給情報を分かりやすく提供した。

津波地図ノルマル・スーパーの大津波警報発表区域の表示色を従来の赤白二重線から紫色に変更するとともに，大津波警報，津波警報・注意報の色を民放各社と統一する設備改修を実施した。あわせて，視覚障害者にも分かりやすい表示となるよう地図を含め画面の配色を改善し，７月から運用を開始した。

７月24日の地上テレビ放送の完全デジタル化を受けて，津波到達予想・観測画面を左側に，津波地図スーパーを右側に移動し，それぞれの情報が画面上で重ならない画面レイアウトとなるよう作画装置を改修した。この画面レイアウトについては，完全デジタル化が12年３月末となった東北３県の放送局における送出設備対応が完了した11月から運用を開始した。

東日本大震災の報道を検証し，地震・津波発生時に気象庁の発表データにより自動的にアナウンサーが読む原稿を表示する原稿支援システムの避難呼びかけ文を見直し，より具体的な避難行動を促す表現に変更。12月から運用を開始した。

３．報道情報システム

報道情報システムは，ニュース原稿の作成から制作，送出までを担うNHKの報道を支える基幹システムである。多くのホストコンピューターとサーバー群を中核とした大規模なネットワークシステムである。

海外から原稿を送るための新たな接続システムを整備し，接続の安定性を高めるとともに，通信のセキュリティを大幅に向上させた。

Ⅱ．緊急報道

11年度は東日本大震災の余震が相次ぎ，記録的な豪雨による災害が，新潟県や福島県，紀伊半島

などで起きた。海外ではタイの洪水で日系企業が大きな被害を受けた。NHKは，いずれの災害に対しても公共放送として国民の生命・財産を守る立場から被害の軽減や復旧に役立つ放送に組織を挙げて取り組み,「正確」「迅速」「分かりやすさ」を基本に緊急報道を展開した。

１．自然災害

（１）東日本大震災の余震

東日本大震災の後，震源域やその周辺で地震活動が活発になり，11年３月11日から12年３月末までに震度５弱以上を観測した余震は49回，津波警報や注意報が出た地震は７回発生した。地震活動は次第に低下したが，本震発生前より活発な状況が続いた。NHKは，大震災のあと，東北の沿岸部などに臨時の取材拠点やロボットカメラを設置するなどして取材体制を強化し，頻発する余震についても迅速，的確に伝えた。

（２）新潟・福島豪雨

７月27日から30日にかけて，新潟県と福島県の県境付近で記録的な豪雨となった。停滞した前線に向かって非常に湿った空気が流れ込み続け，総雨量は福島県只見町で711.5ミリ，新潟県加茂市の宮寄上で626.5ミリ。いずれも７月の平年の月間降水量の２倍以上だった。１時間雨量は，新潟県十日町市で29日午後８時51分までに121ミリと，観測史上１位を記録した。

増水した川に流される人が相次ぎ，死者・行方不明者は６人。各地で堤防が崩れるなどして浸水被害も相次ぎ，総務省消防庁によると，新潟・福島の両県で，全壊が73棟，半壊が998棟だった。

NHKは，大雨や被害の最新情報，今後の見通しを，気象予報士の解説を入れて，特設ニュースで詳しく伝えた。

（３）紀伊半島で記録的な豪雨

９月３日，台風12号が高知県に上陸した。その後，四国から中国地方を北上し，日本海に達した。台風は大型で動きが遅かったため，広い範囲で大雨となった。

特に，南から湿った空気が流れ込み続けた紀伊半島で雨雲が発達し，記録的な豪雨となった。

奈良県上北山村では９月６日までの８日間の総雨量が1,814.5ミリと，年間の雨量の60％にあたる雨が降った。気象庁のレーダーによる解析雨量では2,000ミリを超えたとみられる所もあった。奈良県，和歌山県，三重県で土砂災害や浸水，河川の氾濫が相次ぎ，総務省消防庁によると，死者・行方不明者は，全国で98人にのぼった。

NHKは，紀伊半島での記録的な豪雨の原因や今後の見通しについて詳しく伝えた。

今回の豪雨災害では，自治体による避難の情報が，住民に十分伝わらず，避難を巡って課題が残った。

（４）台風15号が首都圏を直撃

９月21日午後２時頃，台風15号が静岡県に上陸した。強い勢力を保ったまま，東海から関東，東北に進み，広い範囲で暴風が吹いた。21日の最大風速は東京・江戸川区で30.5メートル，神奈川県藤沢市辻堂で25.8メートルなど，各地で観測史上１位を更新。降り始めからの総雨量は，九州や四国で1,000ミリを超えた。

総務省消防庁によると，死者・行方不明者は，愛知県や静岡県，神奈川県などで合わせて19人。首都圏では，暴風の影響で，交通機関に大きな影響が出た。夕方の帰宅時間とも重なり，影響が拡大した。

NHKは，21日，通常番組を取り止めて，ほぼ終日，台風関連の特設ニュースを放送した。

気象庁が，台風の接近前から首都圏で暴風に対する警戒を呼びかけたことを受けて，放送では，特に,暴風に対する警戒を,繰り返し呼びかけた。

（５）猛暑と節電

夏の平均気温は全国的に高かった。総務省消防庁によると，７月から９月までに熱中症で救急搬送された人は３万9,489人。記録的な猛暑だった10年よりは少なかったが，09年の３倍だった。早くから震災の影響による電力不足が懸念され，毎日，電力の使用率が発表された。職場や家庭では節電が求められた。

７月，気象庁は，新たに「高温注意情報」の発表を始めた。北海道と沖縄を除く地域を対象に，35℃以上の気温が予想される場合に熱中症への注意を呼びかけた。

NHKは,「高温注意情報」をニュースや気象情報で伝え,熱中症への注意を繰り返し呼びかけた。

（６）タイの洪水

50年に一度といわれる記録的な大雨で，７月以降,タイの各地で大規模な洪水が発生した。死者・不明者は818人，被災者は1,300万人を超えた。また，首都バンコクを中心に，およそ460社の日系企業の工場が水に浸かるなど，進出企業の活動や在留邦人の生活にも大きな影響が出た。NHKは，アジア総局を中心に緊急報道を展開し，『ニュース』や『クローズアップ現代』で，被害の現状および経済への影響について詳しく伝えた。

２．映像取材体制

（１）航空取材の基地・機体の体制

11年度は，札幌，仙台，東京，静岡，名古屋，大阪，福岡の７基地で中型機を，新潟，広島，高松，鹿児島，沖縄の５基地で小型機を運用した。これに全国支援と，機体の検査や整備を行うときにバックアップをする予備機を加えた12基地14機体制で全国の事件・事故や災害など，緊急報道に対応した。なお，仙台基地は津波で被災したため，現在は花巻空港で運用している。

（２）東日本大震災への対応

初動で70クルーとCSK22台を展開させたほか，新･中型ヘリを投入し，被害の全貌把握に努めた。仙台の中型ヘリは，仙台平野を襲う大津波を捉え世界へ生中継で伝えた。原発事故の福島を含めた被災地へのカメラマン応援は震災１年間で，およそ１万1,500人日に上った。

（３）首都直下地震等大災害に備える

大震災を教訓に，揺れ・津波など狙いを定めた新たなロボカメの設置を進めた。また，本部機能喪失時のヘリ運用については，大阪局で複数機の取材指揮が行えるよう，基地局の整備や連絡手段の充実を図っている。東南海･南海地震対策では，高知県南部に新・中型ヘリの離着陸や燃料補給が可能な場外離着陸場を確保した。

Ⅲ．選挙システム

選挙システムは，ホストコンピューターと全国のサーバー・端末などをネットワークで結んで出口調査や最新の開票データなどを集計し，当選確実の判定や，放送・インターネットなどの開票速報画面の作成などを行うものである。

４月の統一地方選挙では，前半戦・後半戦ともに候補者情報を一元管理する候補者データベースを稼動させ，選挙システムと一体運用した。投開票日の総合テレビでは，注目選挙の当選確実や得票状況だけでなく道府県議会での各政党の趨勢（すう）といった情報についても，システムと連動したディスプレー装置を使ってリアルタイムに伝えた。また，BS1・R1・データ放送・インターネット・携帯コンテンツ等もシステムと結んで開票速報を実施。特にインターネットは，統一地方選挙で実施された全ての選挙の開票状況を掲載したほか，後半戦では一度に開ける選挙区数の拡充を実現し，閲覧性を向上させた。

Ⅳ．国際回線による映像伝送

海外からの中継や映像の伝送は，主に通信衛星や光ケーブルなどを使って行われている。

NHKでは，世界で起きた紛争や災害，国際情勢などを伝えるため，膨大な量の映像を24時間体制で世界中から受信している。

１．随時伝送と定時伝送

海外からの映像伝送は，事件・事故，国際会議などのニュースおよび国際的なスポーツイベントなどの際，そのつど，海外と回線をつなぐ「随時伝送」と，海外の放送局が制作したニュース番組を決まった曜日と時間に受信する「定時伝送」とに大別される。

NHK海外総支局の取材体制強化やMLB，PGA，サッカーなど，海外からのスポーツ映像の増加などを背景に，伝送量は年々増加している。

11年度は「随時伝送」と「定時伝送」を合わせた総件数は，３万4,669件。10年度に比べて，７％の増加となった。総伝送時間は，３万5,704時間で，10年度に比べ９％増えた。

このうち「随時伝送」は，10年度と比べて約８％増加し，１万8,833件であった。増加の理由としては，アメリカ大統領予備選挙，ロシア大統領選挙など，世界的に関心の高い政治イベントが相次いだことや，カダフィ大佐が殺害されたリビア内戦をはじめ，チュニジア，エジプトなど，アラブ世界で起きた大規模な反政府運動に関連して，中東・アフリカ地域から大量の映像が送られてきたことなどがあげられる。また，日本が優勝したFIFA女子ワールドカップ・ドイツ大会など，国際スポーツイベントが目白押しであったことも伝送増加の要因となっている。「定時伝送」では，アメリカのABCやCNN，イギリスのBBC，フランスのF2などが制作した欧米のニュース番組をはじめ，中国やフィリピン，ベトナムなど，アジア各国のニュース番組も受信している。

特に重要な海外番組の受信としては，北朝鮮の国営放送・朝鮮中央テレビをはじめ，イラク問題など，中東情勢を伝える上で欠かせない情報源として，カタールの放送局「アルジャジーラ」の24時間受信を行っている。

06年度からは，世界最大のイスラム国家・インドネシアのニュース番組も受信を開始したほか，07年度から南米ブラジルの放送局のニュース，11年度からは，インドのニュース番組も加わり，N

HKの国際回線ネットワークで定時伝送している番組は，世界20の国と地域，28の放送機関となった。

「定時伝送」は，２万1,093時間で，総伝送時間の69％を占めており，１日当たりの平均受信時間は57.3時間となっている。

２．緊急報道

「随時伝送」の中でも最も重要なのが，緊急報道への対応である。

NHKの海外特派員や報道局の取材・中継チームは，世界各地で起きる紛争や事件・災害の現場に展開する。こうした緊急報道では，現場と日本との間を，どのようにつなぐのかが課題となる。周辺の放送機関や映像通信社に協力を求めて衛星の伝送施設を借用したり，複数の衛星を組み合わせるなどして，地域の通信事情を考慮しながら，そのつど，伝送路を確保しなければならない。映像信号や映像圧縮装置の違いなどが回線接続を困難にすることが日常的にあり，海外からの映像伝送を専門とするチームが，24時間体制で，難易度の高い回線接続にも対応し，現場の記者やカメラマンを支援している。

既存の通信基盤がない過疎地域が現場になる時は「フライ・アウェー」と呼ばれる小型の衛星通信地球局を航空機で持ち込むことがある。また，周辺の地域や国から，衛星通信アンテナを積んだ「SNG（SATELLITE NEWS GATHERING）トラック」と呼ばれる車載型地球局を現地へ走らせることもある。06年に発生したジャワ島中部の地震，津波被害や08年５月の中国・四川大地震，それに，11年のニュージーランド地震では，ハイビジョン映像が伝送できる「フライ・アウェー」を現地へ持ち込んで，迅速に回線を接続し，被災地の状況を鮮明な映像で世界に伝えた。10年10月12日，チリの鉱山事故で作業員が地下から救出された際は，現地に持ち込んだ小型の「フライ・アウェー」が，救出の瞬間をリアルタイムで日本へ伝えた。

３．国際専用ハイビジョン回線

NHKは，膨大な量の映像伝送を円滑かつ確実に行うため，地球を一周する24時間接続のハイビジョン専用回線を有している。

アメリカと日本を結ぶ光ファイバーの「米日専用回線」は，総延長およそ２万キロ。ハイビジョンの映像を４本同時に伝送できるもので，ニューヨークのアメリカ総局，ワシントン支局，ロサンゼルス支局から，どの回線にも接続できる。

回線構成は，米国内，太平洋の海底区間とも異なる経路で二重化されており，片側の回線が何らかの理由で切断されても，もう一方の回線に，瞬時に切り替わる高い機能が備わっている。アメリカ総局には，全米各地，中南米からの映像を24時間体制で中継している「回線センター」がある。

日本人選手が活躍するMLBの映像も，全米各地の球場からアメリカ総局に集められ，「米日専用回線」で日本へ送られている。

「欧日専用回線」は，インド洋上の衛星を介し，ユーラシア大陸を横断する形でパリのヨーロッパ総局と放送センターの間が24時間接続されており，同時にハイビジョン２回線の伝送が可能となっている。

また，パリとアメリカをハイビジョンで結ぶ「欧米専用回線」が１回線あり，パリからの映像をロサンゼルスで，４回線ある「米日専用回線」のどの回線にも接続できるようになっている。

欧州地域の映像は，「欧日専用回線」の東回りルート，欧米専用線経由の米国縦断，西回りルートのどちらでも送ることができるようになっており，高い運用性と安全性を確保している。

さらに，ロンドン，モスクワ，ベルリン，エルサレムの各支局は，パリとハイビジョン専用回線で24時間接続されているほか，パリのヨーロッパ総局は，衛星の電波を受信するアンテナ10基を備えた「テレポート」を有しており，欧州・中東・アフリカ地域からの映像を中継して，「欧日専用回線」や「欧米専用回線」「米日専用回線」経由で東京の放送センターとを結ぶ分岐点，いわゆる「ハブ」の役割を果たしている。

このほか，アジア地域では，北京の中国総局，上海支局，バンコクのアジア総局，ソウル支局，マニラ支局，台北支局，ニューデリー支局，イスラマバード支局，シンガポール支局，シドニー支局からなどからもハイビジョン伝送が可能になっている。

４．海外からのIP伝送（DNG／Digital News Gathering）

近年，国際映像伝送は，デジタル技術の進展を背景に新しい時代に入っている。

ブロードバンドサービスの高速化や映像圧縮技術の発達によって，パソコンに映像を取り込み，インターネット等，IP回線を利用して，デジタルファイルや，リアルタイムのストリーミングで映像を送る「DNG」が，海外からの伝送手段とし

て盛んに活用されている。

このような伝送手段は，紛争地域などの取材現場で，小型の衛星通信ターミナルのインマルサットBGANと組み合わせて使われたのをきっかけに，世界中の放送メディアで普及が進んだ。現在の高速インターネットでは，ハイビジョン映像をリアルタイムに送ることも可能となったほか，市街のあちこちに設置された公衆無線LANスポットからも容易に映像が送れるようになるなど，ニュース映像収集の機動力強化に革命をもたらしている。

11年度，ファイルやストリーミングで伝送された映像は，前年に比べ44％増の3,980件にのぼった。

５．国際間の映像素材交換

NHKは，国際回線を使って内外のニュース映像を海外の放送機関にも提供している。

このうち「アジアビジョン」は，ABU（アジア太平洋放送連合）傘下の22の国と地域，23の放送機関（12年４月現在）が，毎日２回，衛星を使った送受信に参加しているほか，一部メンバーはインターネットを使ったファイル素材として提供している。

11年度に交換したニュースは，8,508項目。このうちNHKは1,075項目のニュース映像を提供した。東日本大震災では，発生１時間後にフラッシュニュースとして現地の映像を伝えたほか，その後も被災状況や原発事故の様子を克明に発信し，加盟放送機関から高い評価を得た。

アジアビジョンに提供された映像は，ジュネーブのEBU（欧州放送連合）本部へも，衛星伝送とインターネットを経由したファイルで送られ，欧州域内の放送機関に配信されている。

Ⅴ．ニュース

政治では，４月，統一地方選挙で民主党が敗北。８月，菅直人首相が退陣し，９月，野田内閣が発足した。１月に野田改造内閣が発足したが，その後も衆参ねじれ国会が続き，３月末，14年ぶりとなる暫定予算が成立した。

経済では，震災により，電力供給問題や放射性物質による農産物への被害など，生産者・消費者ともに大きな影響が続いた。11月，TPP交渉参加表明。欧州経済が不安定な中，超円高が続き，10月末には戦後最高値を記録，日本経済の先行きは不透明なものになった。

国際では，民主化要求運動「アラブの春」が中東に広がり，チュニジア，エジプトに続いて，８月，リビアで独裁政権が崩壊した。７月，中国で高速鉄道事故が発生し，40人が死亡した。10月，タイで大規模な洪水で工場が水没するなどの大きな被害が出た。

東日本大震災については，復興の進まない状況と課題を一年を通して伝えた。一方で放射能漏れに陥った福島第一原発では，事故の分析，復旧の状況，放射性物質の影響，被災者医療など多岐にわたる解決困難な問題が継続した。

災害も相次ぎ，７月の新潟・福島豪雨，９月には台風上陸が続き紀伊半島などで大きな被害が出た。

スポーツでは，７月，サッカー女子W杯での「なでしこジャパン」優勝，ダルビッシュ有投手の大リーグ入り，サッカー・香川真司選手のドイツリーグでの活躍があった。

１．主なニュース番組

（１）総合テレビ

夜のメインニュースは『NHKニュース７』。その日の国内外の出来事を徹底分析し，現場からの生中継や大画面を使ったキャスター解説などを交え，分かりやすさにこだわって放送した。「正午ニュース」や日中毎正時の「定時ニュース」，『お元気ですか日本列島』『週刊ニュース深読み』『海外ネットワーク』なども担当し，幅広い視聴者層の関心に応えた。

緊急地震速報，台風の接近や大雨のおそれ，大きな事故などに際しては，放送枠の拡大や特設ニュースを組んで，被害をできるかぎり抑えるための放送を続けた。台風６号や12号による記録的豪雨，気象庁が最大級の警戒を呼び掛けた15号の接近時を含め，11年度の放送枠の拡大回数は332回・約70時間に及び，特設ニュースは177回・50時間近くに達した。

画面に文字で第１報を伝えるニュース速報は1,400回を超えた。全体の６割にのぼる地震情報をはじめ，災害や原発事故関連，菅首相の退陣表明，キム・ジョンイル総書記死去などの主要ニュースのほか，なでしこジャパン世界一などスポーツや話題性の高い情報を含めて視聴者に提供した。

東日本大震災に関する報道は，国内外のネットワークを生かし，復旧復興に向けた被災地や全国の動き，さまざまな課題を取り上げて多角的に伝えた。

（２）Eテレ

手話ニュースは，毎日伝える『NHK手話ニュース』と平日夜の『NHK手話ニュース845』，土曜の『週間手話ニュース』，日曜に子どもにニュースを伝える『こども手話ウィークリー』の４本の定時番組を放送。また，東日本大震災の被災地や原発事故の情報，台風は特設ニュースでも対応した。

（３）BS1

『BSニュース』は，毎日毎時50分から10分間を基本に24時間，国内外のニュースや各地の話題をコンパクトにまとめて伝えている。

『BS列島ニュース』は，平日の午後１時から１時49分までの49分間で，全国各地のNHKの放送局がその日の昼に伝えたニュースや地域放送で伝えたリポートをまとめて全国に発信している。

（４）R1・FM

ラジオニュースは，11年３月11日に発生した東日本大震災の災害報道に全力で取り組んだ。発生から４月15日までは，定時のニュース枠を拡大して，被災地の情報や全国各地の支援の動きをきめ細かく伝えた。その後も震災の記憶を風化させず，支援の輪が広がるよう，午後７時のニュースで「きょうの被災地」というコーナーを設けて，復旧・復興の動きを毎日伝えた。『私も一言！夕方ニュース』や『NHKジャーナル』などのニュース番組では，被災地が抱える課題や原発事故への対応を深く掘り下げ，その他の情報番組では被災した人たちが必要とする身近な生活情報を集中的に伝えた。

震災から１年が経過した３月11日には，「災害時のラジオの役割は」をテーマに，地震発生直後にラジオが大地震や大津波警報をどう伝えたのか検証し「命を守る情報」の伝え方を考えた。

通常のラジオ第１のニュースは，30分ごと（深夜～未明は１時間ごと）を基本に，国内・海外の動きをきめ細かく伝えた。午前７時，正午，午後７時，午後10時のニュースは，それまでの主なニュースをせき止めて伝えた。午後７時の『きょうのニュース』は１日のメインニュースで，地域局がリレー形式で伝える『列島リレーニュース』を含む１時間の枠を音声など効果的に生かして，その日の出来事や話題が分かるように伝えた。また，午後10時からの『NHKジャーナル』では，記者や専門家の解説，インタビューをふんだんに盛り込んでニュースの背景に切り込んだ。『列島リレーニュース』は，午前８時台と午後１時台にも設け，NHKのネットワークを生かして地域の情報を全国に発信した。

大きな災害や事件などの緊急報道は「安心ラジオ」の根幹であり，速報性・機動性に優れたラジオの特性をいかして最重点に取り組んだ。11年３月11日から12年３月31日までの間に緊急地震速報は105回出たが，いずれもR1－FMスルーで速やかに伝えた。

４月の統一地方選挙，10日の前半戦は12都道県の知事選と４政令市長選，それに41道府県議選などが行われた。午後７時55分から翌日の午前２時15分まで，９時台と10時台の東日本大震災の特番をはさんで４時間余りにわたって，当確速報や大阪維新の会など地域政党の議席獲得状況，今後の課題，それに国政への影響について伝えた。関東ローカルは，午前３時27分まで全国放送とは別に２波出しで東京，神奈川の知事選や県議選，政令市議選の当選者全員を紹介した。24日に行われた後半戦は，午後９時から午前０時まで，原発を抱える福井県の敦賀市長選や大阪維新の会の新人が当選した大阪府の吹田市長選など注目選挙を中心に選挙の構図や各地域の今後の課題などを丁寧に伝えた。

９月の野田内閣の発足，１月の内閣改造のニュースは，ニューセンターの特設スタジオから政治部記者の出演で日本の課題や将来についても展望した。

一方，FM放送は，朝･昼･夕方･夜の１日４回，ラジオ第１のニュースを同時放送した。

２．報道室

NHKの全国取材網には各地の放送局のほかに報道室がある。事件・事故・災害・選挙報道はもちろん，地域の暮らしに密着した取材の最前線として活動している。

〔北海道〕

東日本大震災後の１年を通じて，北海道内の各報道室は，道内に3,000人を超える東北（主に福島）からの避難者の状況など震災・防災関連ニュースを継続的に取り上げた。釧路局・根室報道室は，根室で再起を図る気仙沼の造船所の人たちを長期取材。東北の漁業基地が打撃を受けたことで，根室に水揚げが集中したサンマ漁の動きも継続的に発信した。室蘭局・苫小牧報道室は平らな土地が広がる苫小牧市での津波からの避難に高い建物が役立つこと，広大な土地を受け持つ旭川局・稚内報道室は，原発に代わるエネルギーとして国内最大級のメガソーラーや風力発電設置についての模索，世界自然遺産・知床を管内に持つ北見局・

網走報道室は，北海道の主力産業である観光への震災による影響を伝えた。また，泊原発を抱える札幌局・小樽報道室は，泊村長選挙への影響など原発事故の地元への波紋を発信し続けた。

北方領土取材の最前線である根室報道室は，返還交渉が進まない中，元島民たちが，タブーとされてきた四島との経済交流を模索するまでに至った苦悩を番組やニュース，企画リポートで伝えた。札幌局・岩見沢報道室管内の岩見沢市では２月，積雪が観測史上最高の２メートル８センチになり，雪の重みで美術館や多数の空き家屋，農業用ハウスが崩壊した。北海道の空の玄関・新千歳空港を受け持つ札幌局・千歳報道室は，道民の足・北海道エアシステムの定期便のプロペラ機が６月，パイロットが気づかないまま危うく地上に衝突という高度まで降下していた問題や経営悪化について掘り下げて伝えた。出没が相次いだヒグマについては，網走報道室が人との「すみ分け」の模索を紹介，広く全国に発信した。

〔東北〕

東日本大震災の巨大津波で大きな被害を受けた東北の太平洋沿岸。東北地方の支局や報道室の記者たちは，この１年間，被災地の現実や避難先での窮状を全国に発信してきた。

仙台局・石巻報道室の記者は，失業問題や難航する集団移転，漁港再編など復旧・復興に向けた被災地の深刻な課題を地域に密着しながら伝えた。盛岡局・釜石報道室の記者は，大津波の際に自ら撮影した38分間の映像に写っていた人々のその後を追跡取材し，３月放送の『NHKスペシャル　3.11　あの日から１年　38分間～巨大津波いのちの記録』を制作した。肉親を失った人々の深い苦悩や，復興が進まない地域の現実を描いた番組は大きな反響を呼んだ。盛岡局・宮古報道室の記者は，国内最大級の堤防が津波で壊された宮古市田老地区の高台移転に向けた動きを追い，制度のはざまで補助金がもらえず移転できない住民の不安を伝えた。

福島局・南相馬報道室の記者は，地震や津波によるがれきの処理が手つかずのままであるうえに除染が進んでいないことなど復興への道のりが厳しいことを全国放送で伝えた。山形局・米沢報道室の記者は，大震災と原発事故で福島県から避難してきた人たちの暮らしの課題を継続的に発信した。秋田局・大館報道室の記者は，国の基準を上回る放射性物質を含む首都圏の焼却灰が大館市小坂町の処分場に運び込まれていた問題で，住民の放射能への不安や受け入れ再開の是非をめぐる葛藤を取り上げ，『クローズアップ現代』などで発信した。

東北各地の報道室は，大雪の影響や地域の話題についても全国に発信した。

２月１日，青森県下北半島のむつ市から野辺地町にかけての国道で，吹雪のため約300台の車が40キロ近くにわたって立ち往生した。青森局・むつ報道室の記者は，この様子を映像取材し，翌朝の全国ニュースで放送した。秋田局・横手報道室の記者は，大雪で大きな被害を受けた果樹農家が懸命に畑を修復し，実りの季節を迎えるまでを丹念に追い，全国に発信した。

秋田局・能代報道室の記者は，能代商業高校が秋田県勢として14年ぶりに夏の甲子園初戦突破を果たし，活気づく地元の様子を生き生きと伝えた。13年の『大河ドラマ』が，会津出身の新島八重が主人公の「八重の桜」に決まったことを受けて，福島局・会津若松報道室の記者は八重ゆかりの資料やゆかりの人たちを丹念に取材し，放送を待ち望む地元の期待を全国に発信した。

〔関東甲信越〕

東日本大震災と原発事故による直接・間接の被害は関東甲信越各地で続いた。

５月，足柄茶で知られる神奈川県西部・中北部のお茶農家で放射性物質が相次いで検出された。横浜局・厚木報道室では，摘み取り間近の茶葉の収穫を断念せざるをえなかった農家の苦悩を取材，全国ニュースや『NHKスペシャル』で伝えた。

７月，千葉県柏市でごみの焼却灰から高濃度の放射性物質が検出された。原発事故で拡散した放射性物質がごみ焼却でいわば濃縮されてしまったもので，千葉局・東葛報道室が継続取材して全国ニュースで伝えるとともに，12月には『クローズアップ現代』で放送し，反響を呼んだ。

福島原発事故による電力不足で節電が行われる中，東京電力柏崎刈羽原発では，８月，１号機が定期検査のため運転停止したのに続き全ての原子炉が運転を停止した。一連の動きや地元の反応について新潟局・長岡報道室の記者が全国ニュースで伝えた。

11月，茨城県つくば市のベンチャー企業が，障害のある人向けに開発した「ロボットスーツ」を原発事故の過酷な作業現場でも使えるよう改良し注目された。水戸局・つくば報道室の記者は，独自ニュースとして放送し，この分野のロボット開発の可能性の高さを全国に伝えた。

12月，民主党政権になって建設か中止かが改め

てクローズアップされた群馬県の八ツ場ダムは，議論の末，建設する方向で12年度予算に盛り込まれた。前橋局・沼田報道室では，政治に振り回された挙句の決定に，複雑な地元の反応を多角的に伝えた。

さいたま局・春日部報道室は，原発事故の後，福島県双葉町から埼玉県加須市に役場ごと避難した人たちの暮らしや悩みを継続取材。12月には避難先で年を越す住民たちや厳しい環境にもめげずに受験勉強に取り組む中学生の姿を全国ニュース等で詳しく伝えた。

１月下旬から２月にかけて新潟県内は記録的な豪雪に見舞われ，津南町や妙高市で４メートル近い積雪となり，除雪中の事故などで26人が死亡した。高齢者が犠牲になるケースが目立ち，新潟局・上越報道室は『クローズアップ現代』で背景を詳しく伝え，警鐘を鳴らした。

２月，東京・立川市のマンションで母親と４歳の男児が死亡しているのが見つかったのに続き，３月には同じ立川市の都営アパートで90代と60代の親子が死亡しているのが見つかった。いずれも死後何日も経って見つかったもので，相次ぐ孤立死の背景や市の対応について多摩報道室の記者が取材，全国ニュースや地域向け番組で詳しく伝えた。

海外の格安航空会社の乗り入れが活発な中で，日本でも格安会社３社が12年からの本格営業を目指した。千葉局・成田報道室では，全日空がマレーシアの会社と設立した会社を取材し，３月，営業開始に向け必死でコスト削減のノウハウを学ぶ様子を全国ニュースで生き生きと伝えた。

３月，大雪が降った新潟県上越市で地滑りが発生。上越報道室は，避難を余儀なくされた住民たちの苦悩を全国ニュースで伝えた。

３月，埼玉県東松山市でマンション工事現場の足場が倒れ，保育園児が死亡した。さいたま局・所沢報道室の記者はいち早く現場取材し，足場は倒れないように建物に固定することが法律で義務付けられているのに固定されていなかったことなどを伝えた。

〔中部〕

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県釜石市に，同じ製鉄会社の製鉄所がある関係で姉妹都市となっている愛知県東海市が，いち早く救援物資を送り，独自に職員を派遣するなどの支援を行った。名古屋局・中部空港報道室は４月，「鉄の結束」で結びついた自治体間の支援として全国放送で伝えた。

４月27日，富山県砺波市の焼き肉チェーン店で，食中毒患者５人が出たことを富山県厚生部が発表。その後，北陸３県と神奈川県で患者数は181人にのぼり，このうち富山県で４人，福井県で１人が死亡。富山県警や警視庁などは合同捜査本部を設置して，業務上過失致死の疑いで金沢市にある店の経営会社や東京の肉の卸売業者などを捜索した。富山局・高岡報道室の記者は，高岡市にある店の捜索を取材。魚津報道室の記者は，家族２人を亡くした被害者などを取材して，全国放送でリポートした。

東日本大震災を受けて，政府は５月６日，東海地震の想定震源域にある静岡県御前崎市の浜岡原子力発電所の原子炉を全面停止するよう中部電力に要請。中部電力は受け入れ，５月14日までに運転中の４，５号機が停止した。静岡局・浜松支局，掛川報道室の記者は，浜岡原発停止による地元経済への影響，防波壁の建設など中部電力の津波対策や運転再開への課題を幅広く取材している。

８月17日，静岡県浜松市の天竜川で観光川下り舟が転覆。乗っていた23人が川に投げ出され，このうち５人が死亡する事故が起きた。浜松支局の記者は，静岡局・名古屋局・社会部などと協力しながら，原因究明に向けた国の運輸安全委員会の調査などについて詳しく伝えた。

９月の台風12号に伴う豪雨では，三重県内でも記録的な雨量を観測。２人が死亡，１人が行方不明となったほか，1,000棟余りの住宅が床上浸水するなど甚大な被害を受けた。津局・尾鷲報道室の記者は，被害が大きかった三重県南部で，救助の状況などを中継で伝えるなど速やかに緊急報道に対応した。

９月13日，石川県輪島市沖で脱北者が乗った小型船が発見された。金沢局は輪島報道室の記者と連携して沖合にいた小型船を発見した漁船と直接連絡をとり，電話インタビューを行ったほか，漁船から撮影した脱北者たちの写真を入手し，発見時の状況をつぶさに伝えた。

政府は１月27日，静岡県と山梨県にまたがる富士山について，世界遺産の登録を目指し，ユネスコに推薦書を提出した。静岡局・富士報道室の記者は，静岡・甲府局とも連携しながら，環境保全に向けた取り組みや観光振興への期待などを全国放送などで伝えた。

〔近畿〕

９月，台風12号による豪雨災害は，紀伊半島を中心に大きな被害をもたらした。和歌山県では死者56人（災害関連死６人を含む），行方不明者５

人にのぼった。新宮市では熊野川の氾濫で市街地が広範囲で水没し，那智勝浦町では那智川が氾濫し川沿いの住宅が押し流されたほか，JR紀勢線の鉄橋も被害を受けた。田辺市では「深層崩壊」と呼ばれる山崩れが起きて麓の住宅が土砂に埋もれたほか，川の上流に「せき止め湖」が出来たため下流に警戒区域が設定され，住民が避難生活を強いられるなどの影響が相次いだ。和歌山局・南紀新宮，南紀串本，南紀田辺の各報道室は，甚大な被害が出た被災地で迅速かつ的確な被害状況の取材を行い，その後も，ライフラインをはじめとした生活への影響や復興に向けた取り組みを継続取材している。

奈良県南部では死者14人，行方不明10人にのぼった。さらに，土砂崩れによる「せき止め湖」ができた下流では，災害対策基本法に基づく警戒区域が設定され，住民が避難生活を強いられた。奈良局・やまと路報道室は，災害発生当初から大規模な土砂崩れが起きた五條市大塔町や十津川村をはじめ各自治体の対応を長期にわたって取材した。

兵庫県では，台風12号の水害で１人が死亡した。姫路市は，市内を流れる「市川」流域の住民約10万人に避難勧告を出した。しかし実際に避難した住民は1,800人にとどまり，住民に危機感が伝わったのか課題を残した。神戸局・姫路支局では，避難勧告の課題を検証するリポートを含め最新の情報を伝えた。９月20日から21日にかけては，台風15号が兵庫県内に被害をもたらし，淡路島を中心に住宅の浸水被害などが相次いだ。神戸局・洲本報道室は，孤立した市内の集落を取材した。

東日本大震災・福島第一原発事故後，京都特産の宇治茶の輸出が打撃を受ける実態を京都局・学研都市報道室はいち早く報じ，新茶シーズンを前にした４月の安全宣言や世界の茶産地の国際会議への報告など苦境打開の動きを伝えた。

10月，国は原発の防災重点区域を原発から30km圏に広げる方針を示した。福井県に隣接する京都府舞鶴市は，ほぼ全域が圏内に入った。京都局・丹後舞鶴報道室は，舞鶴や周辺の原子力防災強化の動きと課題を報道，大飯原発で働く人が運転再開を巡り，抱える複雑な思いを全国に伝えた。

滋賀県北部では１月末から２月初旬にかけて大雪となり，滋賀県は32年ぶりに自衛隊に災害派遣を要請した。大津局・彦根報道室が取材の前線となり，被害の状況，交通への影響などをつぶさに伝えた。兵庫県の但馬地域も大雪に見舞われた。２月18日には豊岡市で28年ぶりに積雪が１メートルに達するなど記録的な大雪となり，神戸局・豊岡報道室は住民への影響などを伝えた。

関西空港を拠点とする新しい格安航空会社「ピーチ・アビエーション」が３月１日，運航を開始した。大阪局・関西空港報道室は，格安航空会社の経営戦略を取材，海外での事例などを含めて多角的に伝えた。

〔中国〕

東日本大震災は，牡蠣（かき）の生産量日本一の広島県にも大きな影響を与えた。首都圏への最大の供給源である宮城県の牡蠣生産業者が壊滅的な被害を受け，冬の味覚，牡蠣をどう確保していくのかに関心が集まる中，広島局・呉報道室の記者は，広島の牡蠣生産者の取材にあたった。牡蠣が品薄になり，牡蠣離れが起きるのではないかと心配した生産者が，これまで直接取引をしたことのない首都圏にも牡蠣の売り込みに走る姿や，損得度外視で宮城の生産者に「かきいかだ」を提供するなどの復興支援に奔走する姿を取材し，ローカル放送，全国ニュースで放送した。

岡山局・倉敷報道室は，瀬戸内海最大規模の水島コンビナートを抱える重要な取材拠点である。このコンビナートの海底トンネルの掘削工事現場で２月７日，一部が崩壊，大量の水が流れ込み，５人の作業員が行方不明になる事故が起きた。倉敷報道室の記者は東日本大震災を受け，コンビナートの防災問題を継続的に取材しており，事故発生をいち早く伝えた。安全だとされていたシールド工法では過去に例を見ない大規模な事故で，連日全国ニュースで状況を伝えた。

１月，島根県隠岐諸島の沖合で，北朝鮮から来た小型の木造船が見つかった。境海上保安部は，木造船に乗っていた３人を巡視船に移して鳥取県の美保湾まで移動，３人を北朝鮮に帰すまで巡視船内に留め置いた。３人はいわゆる脱北者ではなく，船のエンジンの故障による漂流だったとして北朝鮮への帰国を希望したことから，その取り扱いは外交交渉に委ねられた。鳥取局･米子支局は，３人の帰国に関する情報をいち早く入手して，帰国の動きを的確に伝えた。

12月22日未明，島根県浜田市沖で地元のまき網漁船が転覆し，乗っていた14人が海に投げ出された。このうち12人は救助されて無事だったが，２人が行方不明になった。松江局・浜田報道室では事故が起こった直後から浜田海上保安部や地元漁協の取材を開始し，事故や捜索の状況を全国放送で伝えた。夜のローカル放送では浜田報道室から

記者解説を行い，事故当時の船団の位置関係や関係者の証言などを伝えた。

山口県岩国市の米軍岩国基地には，在日米軍の再編で厚木基地から空母艦載機部隊が14年に移転してくることになっている。２月，アメリカがさらに沖縄の海兵隊の一部を岩国基地へ移転させることを日本政府に打診したことが明らかになった。地元からは基地の負担増につながるとして，反発の声が上がり，県は厚木基地から来る部隊向けの住宅建設予定地の売却を留保した。岩国報道室は山口局の県政担当の記者と連携して地元住民のほか，県や岩国市の対応を精力的に取材した。最終的に政府は沖縄海兵隊の岩国移転はないという考えを示したが，基地問題の深刻さを浮き彫りにすることとなった。

〔四国〕

東京電力・福島第一原子力発電所の事故の影響で，愛媛県伊方町にある四国電力・伊方原発でも定期検査に入った原発が運転を再開できない状態となった。運転再開を目指す四国電力は11月14日，全国２例目となる「ストレステスト」の結果を国に提出したが，再開のめどは立たないまま，１月14日には唯一運転を続けていた３つ目の原発も停止。松山局・八幡浜報道室では，原発に依存してきた住民が抱える不安や，原発のプラントの劣化を防ぐ特別な対策をとる四国電力の取り組みなどをリポートなどで伝えた。

国が原発から半径30キロを，防護措置を重点的に行なう地域「UPZ」と定めたことで，愛媛県内では伊方原発の周辺の７市町が該当することになった。これを受けて，２月16日，伊方町を中心に，住民や自治体職員，自衛隊など１万人が参加する大規模な避難訓練が全国に先駆けて行われた。八幡浜報道室では，事前に避難ルートの確保などの課題を洗い出し，訓練当日は，行政が指定した避難方法だけに頼らず，住民が協力して自力で避難する方法を模索する地区のリーダーに密着し，伝えた。

９月３日，台風12号の影響で，愛媛県西条市大保木地区では地区に通じる県道がおよそ40メートルにわたって崩落。１か月近くにわたって37世帯61人が孤立状態に陥った。松山局・新居浜報道室では，孤立状態となった被災状況をつぶさに取材したほか，住民に対して独自のアンケート調査を実施。「災害用の衛星電話が習熟の問題で使えなかったこと」や「停電を想定せず，ろうそくや電池を用意していなかったこと」を取り上げ，「孤立集落」の住民たちの防災面での課題を検証し，リポートなどで詳しく伝えた。

９月４日，徳島県美波町で，漁港に設置されていた灯台が根元から折れているのが見つかった。美波町では台風12号で観測記録最大となる24.3メートルの風速を観測。灯台は強風で折れたものと見られる。徳島局・阿南報道室の記者はいち早く現場に駆け付け，地元漁協関係者のインタビューをとり，台風被害の大きさを伝えた。

７月，台風６号が四国の南岸を西から東へ進み，高知県西部の四万十川が増水。住宅の浸水や沈下橋が流されるなど大きな被害が出た。また，収穫前の稲が倒れるなど農業被害も４億円に上った。高知局・くろしお報道室は，被害状況を全国に伝えた。

３月，南海トラフを震源とする巨大地震の新想定が公表され，高知県黒潮町は津波の高さが34.4メートルと全国最大になった。くろしお報道室は，住民のインタビューや役場の動き，それに震災以降，整備してきた避難場所の見直しが迫られていることを全国ニュースで伝えた。

〔九州・沖縄〕

鹿児島県霧島市では11年１月，新燃岳がおよそ300年ぶりに本格的にマグマ噴火した影響を受け，基幹産業の観光業が大きな打撃を受けた。鹿児島局・空港報道室は落ち込んだ観光客を呼び戻そうと活動する地元の動きや自主防災組織の取り組み，避難壕や大型サイレンの設置など，防災面の動きについても詳しく伝えた。

鹿児島県の川内原子力発電所では，２基の原子炉が９月までに運転を停止し，国内最大規模の３号機増設計画も事実上凍結された。鹿児島局・薩摩川内報道室は，電源確保などの安全対策や自治体の防災計画作成などの動きにとどまらず，立地自治体がいわゆる「原発マネー」に依存していった経過や背景を詳細に検証して伝えた。

５月15日，阿蘇中岳第１火口で，２年３か月ぶりに噴火が確認された。規模はごく小規模ではあったが，噴石が飛ぶ可能性もあり，気象台は翌日，噴火警戒レベルを平常の「１」から「２」に引き上げ，火口周辺への立ち入りが規制された。熊本局・阿蘇報道室では，火口へのロープウエーの発着場やみやげ物店などで，その影響を多面的伝えた。この規制は１か月余り続いたが，その間，気象台や京大火山研究センターの専門家などの動きをフォローし，発信した。

東京電力福島第一原子力発電所の事故のあと，定期検査に入っていた原発の運転再開に向けた動きが出てくる中，６月29日，佐賀県玄海町にある

九州電力玄海原子力発電所の２号機と３号機の運転再開を要請するため，当時の海江田経済産業大臣が佐賀県を訪問した。しかしその後，九州電力のメール問題の影響などで，運転再開のメドが立たない状況となった。12月には１号機と４号機も相次いで定期検査に入り，玄海原発のすべての原子炉が停止した。佐賀局・唐津報道室は，原発関連の動きに対応して地元の玄海町長や周辺自治体の反応などを細かく取材し伝えた。

一方，福島第一原発の事故を受けて全国的に節電が大きな課題となる中，福岡県東部に集積する自動車産業の多くは７月２日から土日操業を始めた。北九州局・行橋報道室は，土日が勤務となった家庭の子どもたちを小・中学校で預かる仕組みなど，多岐にわたった影響を掘り下げて伝えた。

宮崎を代表する観光地の一つ，串間市の都井岬で，天然記念物にもなっている野生の馬の一部が７月,「伝染病感染」を理由に処分された。宮崎局・日南報道室は，観光への影響を心配して「隔離」で済まそうとする地元の人たちと「隔離すれば『家畜』扱いになり，法律に基づく処分が必要だ」とする国の見解との間で揺れる串間市の対応を詳しくリポートした。

混迷が続くアメリカ軍普天間基地の移設問題では，沖縄県の仲井真知事をはじめ，多くの県民が県外移設を求める中，政府はアメリカとの合意通り，名護市辺野古への移設に向けた手続きを進めている。移設計画に伴う環境影響評価書の提出を巡って，反対する市民団体のメンバーらが書類の持ち込みを阻止しようと，県庁を取り囲んで抗議活動を行い，防衛省は仕事納めの12月28日午前４時という異例の時間に書類を持ち込んだ。この評価書に対する知事意見は，改めて「県外移設」を求めるもので，国にとって厳しい内容となった。２月に普天間基地のある宜野湾市で行われた市長選挙では，かつて名護市への移設を容認していた保守系の佐喜真淳氏が当選した。沖縄本島中北部を担当する沖縄局・沖縄報道室は，移設を巡る政府と地元のせめぎ合いを継続的に取材し，全国に発信した。

３．海外総支局

12年３月31日現在，４総局と25支局に計79人の特派員を配置している。

各総局のカバー地域は，アジア総局がアジア・オセアニア，中国総局が中国・台湾・モンゴル，ヨーロッパ総局が欧州・中東・アフリカ，そしてアメリカ総局が南北アメリカ大陸となっている。

アジア総局管内では，10月にタイで起きた大規模な洪水に伴う「サプライチェーン」への影響などを取材した。また，新しい政権となったミャンマーの民主化の動きについても継続的に取材した。

また北朝鮮については，キム・ジョンイル総書記死去に伴う体制移行，キム・ジョンウン第一書記の就任など朝鮮半島情勢に与える影響について，独自の情報や映像を交え，掘り下げて伝えた。

中国総局管内では，12年秋に最高指導部の交代が行われる見通しの中国で，胡錦涛政権最後の１年を継続的に取材している。また，中国は周辺の海域の領有権についての主張を強めており南シナ海でフィリピンなどとの対立を強めている。日中関係では尖閣諸島が引き続き懸案となっており，双方へのきめ細かい情報取材に基づき報道した。

ヨーロッパ総局管内では，11年１月以降はじまった「アラブの春」といわれる民主化の動きがリビアにも及び，独裁を続けていたカダフィ大佐が殺害され，政権が交代した。NHKでは，いち早く現地入りしこれまでの継続取材の成果を生かし，最新情勢や背景分析を，連日，企画や番組として放送した。またヨーロッパについては，ギリシャに端を発した信用不安の動きを，ニュースやリポートそれに大型番組などできめ細かく伝えた。

アメリカ総局管内では，12年11月に行われるアメリカ大統領選挙に向けた動きが12年の年明けから本格化した。再選を目指すオバマ大統領と争う共和党の候補選びについて，各州で行われる党員集会や予備選挙をきめ細かくフォローするとともに，今アメリカの国民は何を求めているのかについてもニュースやリポートで連日伝えている。

このほか，海外総支局では，国際放送の拡充に合わせて英語によるリポートにも力を入れ，NHKの海外発信力の強化に大きく貢献している。

このように，NHKは，充実した海外総支局のネットワークを生かし，グローバル化が進む世界の最新情勢やその分析，日本の再生に参考となるような海外の事例などを，正確，かつ迅速に視聴者に伝えるべく，日々，努めている。

NHKの海外総支局（12年３月31日現在）

■アジア総局（バンコク）：マニラ，ジャカルタ，ハノイ，クアラルンプール，ニューデリー，イスラマバード，シンガポール，シドニー，ソウル

■中国総局（北京）：上海，広州，台北

■ヨーロッパ総局（パリ）：ロンドン，ブリュッ

セル，ベルリン，ウィーン，カイロ，ドバイ，エルサレム，テヘラン，モスクワ，ウラジオストク

■アメリカ総局（ニューヨーク）：ワシントン，ロサンゼルス，サンパウロ

以上の計29総支局に，記者，制作記者，ディレクター，カメラマン，技術，経理，あわせて79人の特派員を配置。このほか，サハリンの事務所にも出張ベースで記者やカメラマンを常駐させている。

Ⅵ．気象情報

11年度は，アナログ放送が終了し地上デジタル放送へ移行したのに合わせて，気象情報で放送している画面について，全面的な変更を行った。これまでの画面をワイド化するだけでなく，画面のサイズと情報量のバランスを検討して，より見やすい気象画面を作成した。

11年度の総合テレビの気象情報は，平日で１日33回，放送時間は，計１時間20分だった。土・日を含め，気象予報士の資格を持った12人の気象キャスターが，番組ごとに気象情報の解説を担当。台風や局地的な大雨の際には，24時間態勢で，特設ニュースの気象解説を行った。解説では，被害が起きる前に，住民に，注意・警戒・避難を呼びかける「減災報道」に力を入れた。

東日本大震災を受けての被災地の天気は，11年度も，引き続き伝えた。震災後の電力不足が懸念されるなか，夏は，職場や家庭で節電が求められた。気象情報では，熱中症の予防対策を具体的に伝え，注意・警戒を呼びかけた。

１．気象画面の地上デジタル放送対応

気象情報の画面は，これまで４対３のアナログ放送の画面サイズで作成していた。５月，アナログ放送の終了と地上デジタル放送への対応のため，スタジオの改修が行われ，大型モニターがすべて16対９に変更された。これにあわせて，気象情報の画面も，原則として，16対９にワイド化した。ワイド化に際しては，気象画面の見やすさと情報量のバランスに気を配った。「晴れ」や「曇り」「雨」などの天気マークを使った予報の画面は，日本列島のサイズを大きくしたり，天気マークを大きくしたりして，見やすくした。『ニュースウオッチ９』の週間天気と，関東甲信地方の週間天気予報は，気温の情報を追加し，より情報性の高い画面を作成した。

ワイド化にあわせて，「アメダス」と呼ばれる気象庁の気象観測システムの降水量のデータを，より詳しく気象画面に表示できるようにした。降水量の実況画面を，従来の１ミリ単位から，0.5ミリ単位のデータで作成。より詳しい雨の実況が伝えられるようになった。

11年度には，雨雲や寒気・暖気の予想を，動画で表示できるシステムについても改修した。最大で８日先までの予報を表示できるようにして，気象解説の機能強化に努めた。

２．東日本大震災の被災地の天気

11年度は，引き続き東日本大震災の被災地の天気を，番組や気象情報の中で伝えた。東北地方から関東地方の被災地では,「寒さ」「大雨」「暑さ」「大雪」など，ふだんと違う天気の際，避難生活への影響が懸念された。地盤が弱まっている地域では，梅雨や台風の大雨の際，土砂災害の発生が心配された。そのつど，被災地の天気や気温をきめ細かく伝えた。

Ⅶ．スポーツ

１．「ナデシコパ」
FIFA女子ワールドカップ&コパアメリカ
「世界を青く！」
ロンドン五輪男女アジア最終予選
W杯アジア３次予選

地上波デジタル完全移行を見据えて，BS1と総合テレビで，ドイツで開催された女子サッカーのワールドカップ，同時期に開催された南米一を決める大会コパアメリカのナマ放送展開を行った。

NHKでは初めてのサッカー女子ワールドカップ本大会の放送では，日本代表（なでしこジャパン）が出場，１次リーグ最初の試合からBS1で生放送した。「なでしこ」は順調な戦いぶりで決勝トーナメントに進出，宿敵アメリカを破り，悲願の初優勝を果たした。準決勝から，地上波ではフジTVが放送を開始したが，決勝ではBS1で史上初の10％を超える視聴率を記録した。コパアメリカでは,当初男子の日本代表が出場予定とあって，NHKの完全独占放送で臨んだが，東日本大震災の影響で，急きょ出場が取りやめとなり，男女の日本代表でアピールする当初案とは変化せざるをえない状況になった。大会そのものはアルゼンチン開催ということで地元のスーパースター，メッシの活躍に注目が集まったが，結果的には準々決

勝で敗退した。

決勝はウルグアイとパラグアイが対戦，ウルグアイの優勝で幕を閉じた。なでしこの活躍と世界最高峰の南米サッカーの相乗効果で７月の１か月間は「サッカーのNHK」を印象付けた。

その後，９月からは，サッカー女子の五輪アジア最終予選，サッカー男子の五輪アジア最終予選，14年W杯アジア３次予選の放送展開を，総合テレビ，BS1で行い，「世界を青く！」というキャッチコピーのもと，ミニ番組や特番，生中継，録画放送など放送し，「ナデシコパ」に続くキャンペーンとして営業，広報など，部局をまたいでの戦略が一定の効果をあげた。五輪アジア最終予選は，女子は11日間で５試合という強行スケジュールにも関わらず，トップでロンドン五輪行きを決めた。一方の男子はホームアンドアウェーの戦いを半年強に渡って展開，グループ首位でロンドンへの切符を手にした。またW杯アジア３次予選では22年ぶりの北朝鮮で開催されたアウェー戦など話題の多い大会になったが，最終的に日本代表はグループ２位での最終予選通過となった。

２．Jリーグ

Jリーグは開幕直後に東日本大震災の影響で約１か月半，リーグ戦を中断した。再開後は前年J2王者の柏レイソルが好調で，優勝争いを引っ張った。夏場に横浜F・マリノスや名古屋グランパスが首位に立つが，レアンドロ・ワグネルの両外国人選手を中心に，安定した攻撃力のレイソルが終盤突き放し，初優勝を手にした。また，震災の影響を大きく受けたベガルタ仙台はチーム史上最高の４位となり，復興を目指す地元に明るい話題となった。山形・福岡・甲府の３チームがJ2降格となる一方で，サガン鳥栖はJ2で２位に入り，来季の初昇格決定。JFLから松本山雅・町田ゼルビアの２チームがJ2に参入を決め，来季Jリーグは40チームと史上最大規模になる。

３．プロ野球

プロ野球は東日本大震災の影響で予定よりも２週間以上遅れた４月12日にようやく開幕した。

楽天は，仙台の本拠地球場が破損，オープン戦の中止や見直しを余儀なくされた。パリーグは開幕時期の延期を早々に決めたが，セ・リーグは巨人を中心に予定通りの３月25日の開幕を強く主張したため，計画停電区域での試合を行わないよう文部科学省などが要請する事態となった。結局，被災者に配慮し延期を求めた選手会や世論に押される形で日程の見直しを迫られて方針を転換，４月12日にセ・パ同時開幕を迎えることとなった。電力事情を考慮して，レギュラーシーズンは３時間30分を過ぎて新しい延長回に入らない，同点時は引き分け，とする特例措置を設けた。

「見せましょう，野球の底力を…ともにがんばろう東北」楽天の嶋捕手が４月２日に札幌で復興支援のために行われた慈善試合の前に行ったスピーチはプロ野球ファンだけでなく被災地の人々にも大きな感動を与えた。また，飛ばないと言われる統一球の導入でホームラン数が激減，犠打が増えるなど「投高打低」となり，得点差の少ない投手戦が多くなった。

セ・リーグは４月下旬に首位に立ったヤクルトが前半戦は首位を独走する展開となった。しかし，８月から故障者が続出したこともあり，追い上げてきた中日に逆転を許し２位に終わった。中日は不振の打撃陣を盤石の投手陣が支え８月以降の後半に強さを発揮。その最中落合監督の退任が発表されたが，逆にチームに勢いがついて10月18日に２年連続９回目のリーグ優勝を飾った。

クライマックスシリーズ・ファーストステージはヤクルトが総力戦で巨人を２勝１敗で下し，初のファイナルに進出した。ファイナルステージでもヤクルトは粘りを発揮，第５戦までも持ち込んだ。しかし，中日・吉見の好投もあり，中日が２年連続10回目の日本シリーズ進出を果たした。

パリーグは日本ハムとソフトバンクが前半戦から他の４球団を引き離した。特にソフトバンクはリーグトップのチーム打率，防御率を誇り，同一リーグのすべて球団に勝ち越しただけでなく，交流戦でもセ・リーグの全球団に勝ち越すなど，最後までその勢いは止まることなく10月１日に２年連続15回目の優勝を決めた。

クライマックスシリーズ・ファーストステージは終盤の勢いそのままに３位の西武が日本ハムに連勝してファイナルに進出，しかし，シーズン通りの強さをそのまま発揮したソフトバンクが一つも星を落とすことなく８年ぶり14回目の日本シリーズ進出を決めた。

日本シリーズは最終の第７戦にまでもつれ込む展開となり，激動の今季を締めくくるにふさわしい試合の連続となったが，ソフトバンクが８年ぶり５回目の日本一を完全優勝で飾った。

高校野球・春のセンバツは東日本大震災直後で開催するかどうかで大きく揺れたが，予定どおり実施された。神奈川の東海大相模が11年ぶり２回目の優勝。夏の選手権大会は西東京代表の日大三

が10年ぶり２回目の優勝を果たした。

全日本大学選手権は東洋大が連覇。社会人野球も東日本大震災の影響を受けて都市対抗が秋の開催となり日本選手権と兼ねて大阪で行われた。決勝はJR東日本がNTT東日本を破って頂点に立った。

プロ野球はシーズンオフに横浜をディ・エヌ・エーが買収，DeNAとして新たな歴史を刻むこととなった。また４球団で監督が交代，阪神･和田，中日・高木，DeNA・中畑，日本ハム・栗山監督の下で新たなシーズンのスタートを切ることになった。

４．大リーグ

大リーグで最も大きなニュースとなったのは，シアトル・マリナーズのイチロー選手のシーズン安打数が184に終わり，それまで10年連続で達成していた年間200本安打の記録が途切れてしまったことである。４月には39安打と快調なスタートを切ったイチロー，しかし５月は極度の不振に陥り，大リーグに移籍して以来最低となる月間打率２割１分を記録。それ以降も月間打率が３割を超えることなく，打率２割７分２厘，184安打でシーズンを終了した。これで「シーズン安打200本以上」のほか，「シーズン打率３割以上」「オールスターゲーム出場」の記録も10年連続でストップした。しかしそれでも打率は大リーグ全体で15位，シアトル・マリナーズでは１位の成績で，引き続き，大リーグでトップクラスの選手であることを証明した。

10年に１年間在籍したロサンゼルス・エンゼルスからオークランド・アスレティックスに移籍した松井秀喜選手は，11年シーズンに「日米通算2,500安打」「日米通算500本塁打」という節目の記録を樹立したものの，シーズンを通しての打率は２割５分１厘，本塁打は12本と低調な成績に終わった。

ボストン・レッドソックスの松坂大輔投手は５月中旬に故障者リスト入り。その後，肘の手術を受け，以降，試合に出場することはなかった。上原浩治投手はシーズン途中にボルティモア・オリオールズからテキサス・レンジャーズにトレードで移籍。セットアッパーとしてシーズンを通して安定した成績を挙げた。ミルウォーキー・ブルワーズの斎藤隆投手は，シーズン序盤に故障で苦しんだものの，７月以降はセットアッパーとして活躍，チームの地区優勝に貢献した。

５．大相撲

日本相撲協会は，八百長問題により春場所中止という事態に追い込まれた。本場所が中止されたのは，会場の改修のために開催できなかった昭和21年以来65年ぶり，今回は不祥事による開催中止という異常な状況となった。

４月，相撲協会は八百長に関わったとされる親方・力士に対し引退勧告・出場停止などの処分を行った。しかし５月の夏場所は，本場所としての開催ができず，技量審査場所として無料の一般公開で行われた。相撲協会は，再発防止へ向けた取り組みとして，八百長の連絡手段だった携帯電話の支度部屋への持ち込みを禁止。さらに監察の親方を支度部屋や土俵周りに配置して監視を強化した。

７月，半年ぶりに本場所が再開，名古屋場所が開催された。２場所連続で場所が開かれなかった影響は大きく空席が目立った。

しかし，土俵は盛り上がりを見せた。大関魁皇がそれまで横綱千代の富士が持つ最多勝記録1,045勝を更新，最終的に1,047勝まで記録を伸ばした。魁皇は多くの記録を残して名古屋場所で引退した。９月，秋場所では琴奨菊が３場所合計33勝を挙げて大関昇進を決めた。さらに11月，九州場所では稀勢の里が３場所合計32勝ながら，横綱白鵬との対戦成績など相撲内容が評価されて場所後の大関昇進を果たした。新大関への２場所連続昇進は，00年夏場所から秋場所にかけての武双山･雅山・魁皇の昇進以来のことだった。

１月，初場所はエストニア出身の大関把瑠都が初優勝。次の春場所で横綱昇進が期待されたが，２場所連続の優勝はならず昇進はかなわなかった。

日本相撲協会は，初場所後任期満了に伴う理事選挙を行い新体制となった。不祥事を受けて場所中止・力士の処分など対応に当たった放駒理事長が退任。後任には，08年不祥事の責任を取って理事長を辞任した北の湖親方が新理事長に再選された。過去辞任した理事長が復帰を果たしたのは，相撲協会史上初めてのことだった。新体制では貴乃花親方が大阪・春場所の担当部長に就任。前年中止のため２年ぶりの春場所だったが，人気回復を目指して積極的なプロモーションを行い，満員御礼の回数も増えて徐々に観客も戻ってきた。

３月，春場所ではモンゴル出身の鶴竜が優勝争いに絡む活躍で大関昇進を決めた。次の夏場所では，史上初めての６大関となる。優勝は横綱白鵬。

歴代５位，横綱貴乃花にならぶ22回目の優勝だった。

一連の不祥事からの信頼回復を目指す日本相撲協会は，今後，公益財団法人への申請に向けて年寄名跡の管理など改革すべき問題を多く抱える。

６．ゴルフ

３月11日は高知で開催されていた女子ツアー第２戦の初日だった。大会はその日で中止にされ，女子ツアーはその後，４試合が中止となった。

４月，男子ツアー開幕直前に新たな若手の台頭が大きな話題となった。松山英樹（東北福祉大）がアメリカツアーのマスターズトーナメントでアマチュア№1となり，表彰式でスピーチも行ったのだ。日本選手として初めての快挙だった。松山は11月にはプロツアーでアマチュアのまま初優勝を遂げ，大きな注目を集めた。

松山とは同じ年齢の石川遼は，プロ入り４年目で初めて優勝のないシーズンとなった。それでも２位３回，３位２回と優勝争いには絡み，賞金ランキングも３位。海外ではマスターズで初の決勝進出を果たし20位，WGCでは自己最高の４位に入り，存在感を示した。

男子ツアーの賞金王はベ・サンムン（韓国）。韓国勢が２年連続で賞金王を獲得するのは初めて。ベのプレーで光ったのは日本選手を上回るショットの力強さだった。日本オープン14番パー５の第２打。各選手がスコアメイクに苦しむ中，3Wでの渾（こん）身のショットで２オン。イーグルを奪い，優勝をたぐり寄せた。世界レベルのショットだった。

女子ツアーの賞金王は２年連続となるアン・ソンジュ（韓国）。270ヤードを超えるドライバーショット，正確無比なウエッジ，強気のパッティング。どれをとっても他に追随を許さない力を見せつけた。

シニアツアーでは８戦中２勝を挙げたキム・ジョンドク（韓国）が初の賞金王。

11年シーズンは男子・女子・シニア全てで韓国勢が賞金王を獲得した。

７．ロンドンオリンピック

12年夏に開かれるロンドンオリンピック。

ロンドンでは今回が３回目のオリンピック開催となる。中国が国の威信をかけて開催した前回の北京大会とは異なり，ロンドンでは，オリンピックを地域の再生につながるコンパクトな大会にしようという狙いがあり，メイン会場はロンドン東部の失業率の高い地域に造られた。大都市でのオリンピック開催のモデルケースになるか注目される。

そのオリンピックに向けた予選や代表選考は，佳境を迎えている。ワールドカップで初優勝したサッカー女子のなでしこジャパンが９月にアジア最終予選を１位で突破して３大会連続でのオリンピック出場を決めると，年が明けて３月には男子も５大会連続９回目の出場を決めた。

個人では，体操の内村航平選手が10月の世界選手権個人総合で史上初の３連覇を達成し，その実績から五輪代表に決まったほか，馬術では馬場馬術で71歳の法華津寛選手が，自らの持つ日本選手のオリンピック最年長出場記録を更新するなど続々と代表が決まった。

一方，男子マラソンの代表選考ではこれまでにない動きもあった。実業団に所属しないランナーの藤原新選手や川内優輝選手が選考レースで日本選手トップになったことは低迷する日本の男子マラソンを象徴するような出来事とも言えた。川内選手は代表選考では落選したが，次々とレースに出場し，レースそのものを練習の一環ととらえる練習方法は，代表に選ばれた藤原選手も取り入れるなど，今後の男子マラソンの強化に一石を投じた。

前回の北京大会で金メダル９個だった日本は，ロンドンでは15個以上の金メダル獲得を目標にしている。

JOC・日本オリンピック委員会では最終的に250人から300人の選手を派遣したいと話しているが，野球，ソフトボールと日本がメダルを期待できる２競技がオリンピック種目から外れた中，目標達成に向けてはさらなる努力が求められる。

番組制作の委託

１．関連団体等への番組制作委託

NHKは，質の高い放送番組の安定的確保を図るとともに，外部の専門的能力を効果的に活用することで，番組の一層の多様化を推進する視点から，関連団体へ番組制作委託を行っている。

2011年度も，NHKエンタープライズ・NHKエデュケーショナル・NHKグローバルメディアサービスに，大型企画をはじめ各分野の番組制作を委託，総合ビジョンにアニメ番組制作業務を，NHKサービスセンターに広報番組の制作を委託，NHKプラネットに全国および地方番組を，日本国際放送に国際番組の制作業務を委託した。

また，NHKでは，多様な番組を送り続けるために，関連団体を通じて番組制作会社への放送番組制作委託も行っており，外部のさまざまな制作パワーを効率的に活用している。

11年度の主な番組制作会社への制作委託

○地上波

総合では，『タイムスクープハンター』『クイズでGo！ローカル線の旅』，Eテレでは『ETV特集』『Eテレ0655・2355』などを制作・放送した。

○衛星波

BS1では，『ドキュメンタリーWAVE』，BSプレミアムでは，『旅のチカラ』『Amazing Voice 驚異の歌声』などを制作・放送した。

２．外部プロダクションへの直接委託（外部制作委託・本体）

外部制作プロダクションが，関連団体を経由することなく，直接編成部門に提案する窓口として，06年６月に編成局内にソフト開発センターが設立された。特集番組や新番組の提案について，NHK，NHKの関連団体，それに番組制作プロダクションの３者が，番組の企画提案や制作・演出手法を競い合うことで，より高品質，効率的，多様な放送番組を創造することを目的としている。

11年度は，「企画競争」として１年間で20回の募集を行った。参加した制作会社は延べ898社，寄せられた企画はNHK，NHK関連団体，制作会社合わせて2,097企画に上っている。11年度は『あなたが主役　50ボイス』（総合：金，22:55），『ドラマ10』「ラストマネー」「カレ、夫、男友達」（総合：火，22:00），『よる☆ドラ』「本日は大安なり」（総合：火，22:55），『総合診療医ドクターG』（総合：木，22:00）などを外部プロダクション制作の定時番組として放送した。

外部プロダクションとの委託契約などにあたっては，下請法に準拠した手続きをとっている。また，「番組制作委託取引に関する自主基準」に基づき，公共性・透明性を高めるとともに，「新放送ガイドライン」を周知し，公共放送としての質の確保に努めている。

情報番組

Ⅰ．経済・社会情報番組

経済・社会情報番組部は，11年度も，時代と人に向き合う番組を放送し続けてきた。

11年度は『クローズアップ現代』『サキどり↑』『週刊　ニュース深読み』『プロフェッショナル仕事の流儀』『ドラクロワ』（以上，他部局との共管番組含む）の５番組を定時番組として担当した。

また『NHKスペシャル』『ヒューマンドキュメンタリー』『追跡！真相ファイル』『ハイビジョン特集』をはじめとする特集番組も多数制作した。

（１）定時番組

『クローズアップ現代』は，「“いま”を切り取り“時代”を見つめる」を基本方針として19年目を迎えた。東日本大震災では発生直後から被災地に入り，壊滅的な打撃を受けた企業，地域の人々が肩を寄せ合う避難所など，被災地の状況をつぶさに伝えた。その後も，原発事故に直面し故郷帰還の見通しが立たない浪江町や，町の復興計画に取り組む釜石市を継続的に取材したほか，つらい体験を乗り越えようとする子どもたちの心情を作文を通じて伝える試み，県外での避難生活を続ける被災者を地域で支える市民活動，福島県内の農家が自ら放射性物質の測定や農地の除染に取り組む動きなど，震災関連では年間20本の番組を出した。

また，“なでしこブーム”で火がついた女性アスリート育成の最前線，不安定な社会の中で確かなものをつかみたいという風潮から，大人を中心に数学の本が売れる“数学ブーム”，コーチとの対話でリーダーシップを磨くために“コーチング”を導入する企業の取り組みなど，社会の閉塞（へいそく）感を打破しようと模索する動きを多面的に取り上げた。

さらに，10月に亡くなったIT企業のカリスマ

経営者スティーブ・ジョブズが残した次世代へのメッセージ，世界各国で音楽チャートのトップを記録した由紀さおりさんのヒットの秘密など注目の話題も取り上げた。

『プロフェッショナル　仕事の流儀』は，あらゆる分野で活躍する一流の“プロ”の仕事を徹底的に掘り下げるドキュメンタリー番組である。11年度は血液内科医，脚本家，数寄屋大工，宇宙飛行士，管理栄養士，旅客機パイロット，パン職人など，さまざまなプロフェッショナルを通して，“仕事”の奥深さと，働くことの醍醐味を伝えてきた。

新番組『サキどり↑』は，震災からの復興を目指す水産物販売業者がネット中継などを使って水産物を消費者に直接販売する新しい流通に取り組む姿や，被災した企業を市民が資金を出して支援する市民ファンド，地域の子育てを60歳以上の男性が支援する“イクジイ”，マスキングテープの工場が消費者の声を聞くことで生み出したヒット商品の秘密など，新しい時代の価値観やビジネスヒントを伝えた。

『ドラクロワ』は，仕事，結婚，子育てなど悩みが尽きない女性たちの応援番組として，運命の出会いや涙の結婚式，家族の絆など実際にあった“ドラマチックな苦労話”を通して，元気になるためのヒントを伝えた。

（２）特集番組

経済・社会情報番組部では，ジャーナリスティックな切り口で，多彩な特集番組を制作してきた。

11年度は『NHKスペシャル』５本，『ヒューマンドキュメンタリー』５本，『追跡！真相ファイル』１本のほか夏期特集『ファミリーヒストリー』『ハイビジョン特集』なども制作した。

『NHKスペシャル』の「虐待カウンセリング～作家　柳美里・500日の記録」では，増え続ける児童虐待の中で問題となっている“虐待の世代間連鎖”の実態を，世代間連鎖に悩む親と向き合ってきた東海学院大教授・長谷川博一さんの取り組みと，カウンセリングを受けている作家・柳美里さんへの密着取材を通して描き，解決の糸口を探った。

夏期特集『ファミリーヒストリー』は，俳優・浅野忠信さんの知られざる生い立ちと，アメリカ人の祖父が心に秘めていた家族への深い愛情を描いた「祖父はなぜ､アメリカへ帰ったのか」など，戦争に翻弄された家族がいかに絆をつなぎ，生き抜いてきたかを３本シリーズで伝えた。

定時番組からの特集展開としては，『NHKスペシャル』で「故郷か移住か～原発避難者たちの決断」，『ヒューマンドキュメンタリー』で「がんばっぺラジオ～密着・女川災害FM」（いずれも『クローズアップ現代』からの展開），『追跡！真相ファイル』で「プロ農家は農業を変えるか」（『サキどり↑』からの展開）などを放送した。

Ⅱ．生活・食料番組

生活・食料番組部は，現代社会のさまざまなテーマを「生活者の視点」から見つめ，視聴者の関心や疑問に答える情報番組やドキュメンタリーを制作した。

11年度は，月～金曜朝の『あさイチ』，日曜朝の『産地発！たべもの一直線』，月～木曜昼の新番組『ひるブラ』，そして『サラメシ』の４番組を定時番組として放送した。

（１）定時番組

『あさイチ』は，テレビを見てくださる方々が“一番欲しい”情報が詰まった，“市場”のような活気ある番組にしたいという思いが込められた大型情報番組。

主なターゲットは家庭を守る主婦。長引く不況やセーフティネットの綻びによるかつて無い不安な時代を賢く生きていくための「信頼できる情報」を全力を挙げて，いち早く家庭に届けてきた。社会問題，政治の話題から，エンタメ，生活実用情報まで，ニュースとはひと味違う「生活者の視点」から，掘り下げて伝えた。また，視聴者からの質問や意見をファックスやメールで受け付け，生放送の中で積極的に紹介。番組が身近な存在であることを目指すことで，確実な支持を得られるようになってきた。

『産地発！たべもの一直線』は本物のおいしさを届けようと，誇りを持って農業・漁業を営む全国の生産者を毎回紹介。食材の味の秘密を解き明かし，生産者のこだわりを伝えることで，消費者の“食”への理解を深めることを目指した。NHKの食料プロジェクトの柱として，各放送局のネットワークを生かし，全国各地の生産現場を現地のアナウンサーがリポート。各産地の現状も詳しく伝えた。

新番組『ひるブラ』は新しい生中継番組。「行ってみたい！」「見てみたい！」「食べてみたい！」四季折々の姿を見せる全国各地の“旬”な場所をブラりと訪ね，その地域の魅力を生中継でダイレクトに届けた。東京のスタジオ出演者が画面の小窓で常に登場する演出で，率直な質問や反

応を投げかけることで生中継番組の新しいスタイルを確立した。

『サラメシ』は「働く人のランチ」が番組の主役となっている新番組。サラリーマンの昼食（サラメシ）から，多彩な職業の人々のさまざまなランチまでつぶさに観察し，ランチに隠された仕事へのこだわりや感動のエピソードなどを紹介。働く人の今を楽しく鋭く見つめた。

（２）特集番組

『欽ちゃんのワースト脱出大作戦』『欽ちゃんのがんばる！日本大作戦』は10年３月まで放送された定時番組『難問解決！ご近所の底力』で高い評価を得た「テレビの力で，地域の問題の解決を図る」というコンセプトを受け継いだ「地域応援番組」。萩本欽一さんを司会に，空き巣被害がワーストの愛知県の人たちや，骨髄ドナー登録者数がワーストの群馬県の人たちが，番組を仲立ちとして専門家や全国のボランティアとプロジェクトを結成，汚名返上に挑んだ。また，東日本大震災後仮設住宅での暮らしを快適にする工夫や除染の悩みについても取材。番組はその姿を長期間にわたって追いかけ，そこに生まれる人間ドラマを年間４回にわたって放送した。

『もしも明日…』は「生活不安大国」といわれる日本で，ある日突然，予想もしなかった事がわが身に起きたら，一体どうすればいいのか？「本格ドラマ」と「生活情報番組」の融合という新しいスタイルで答える番組。「離婚」「子どもの虐待」「失業」をテーマに番組を制作。スタジオには，ドラマのモデルとなった本人も登場して視聴者が「自分ならどうするか」考える手がかりを提供した。

また，夜の時間帯の新しい情報番組制作に向けて，『夜なのにあさイチ』を制作。定時番組で取材した内容を発展させる形で『NHKスペシャル』の制作にも参加した。

Ⅲ．科学・環境番組

科学･環境番組部は,「科学」「医学」「生活科学」「自然・環境」の４つの分野を基本として，11年度も数多くの定時番組,特集番組を制作。複雑化,細分化していく各分野の最新情報を分かりやすく伝えた。特に，宇宙からの生中継や，環境問題を地球レベルから身近な観点までの幅広い視点で番組を制作するとともに，東日本大震災関連では，地震，津波のメカニズムや原発事故に科学的視点でアプローチした。

（１）定時番組

総合テレビの『ためしてガッテン』は生活科学番組として高い支持を受けている。『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』は親子で楽しめる自然番組として人気。Eテレの『サイエンスZERO』は，タイムリーな科学テーマを掘り下げ，『ITホワイトボックス』は，身の回りにあふれる情報技術のメカニズムを分かりやすく解き明かした。

①総合テレビ

『ためしてガッテン』では，「糖尿病」「腎臓」「熱中症」「子宮筋腫」など，最新の医学情報を分かりやすく伝えるとともに「毛穴」「ストレッチ」「たるみ」など女性を特に意識した情報も紹介し，視聴者のニーズに応えた。「計るだけダイエット」のポータルは,機能を充実させた。また,ホームページ自体をスマートフォン向けに最適化し，ネットへの親和性も高めた。

『ダーウィンが来た！生きもの新伝説』では，人工飼育されて巣立ったアホウドリがアリューシャンを経て小笠原に戻ってきた様子や，カワネズミ，エリマキトカゲ，西ローランドゴリラなど世界的にも貴重な映像から，ハヤブサ，トンボ，エゾシカなど身近な生きものの生態まで，自然の知られざる物語を伝えた。

②Eテレ

最先端の科学情報番組『サイエンスZERO』では，東日本大震災の地震・津波のメカニズムや，福島第一原発事故の原因とその影響について，最新科学の視点から独自に取材。また宇宙論や地球科学，さらには「シリーズ細胞の世界」で生命科学の最前線を伝えた。

『ITホワイトボックス』では，話題のスマートフォンやタブレットといった生活に浸透しているIT機器はもとより，インターネットセキュリティやソーシャルネットワークによる防災など，ますます生活に密着しつつある情報技術ITを分かりやすく解明した。

（２）特集番組

『NHKスペシャル』などで存在感のある特集番組を制作した。

『NHKスペシャル』は16番組を制作し，特に東日本大震災関連で11本を制作。「“いのち”をどうつなぐのか～医療現場からの報告」では，被災者が命の危機にある中，震災で十分な治療が行えない医療現場の深刻な実情を紹介。巨大津波シリーズでは，国内観測史上最大の巨大地震と巨大津波は人々をどう襲ったのか，そのとき人々は何を考えどう行動したのか，あの日記録されていた膨

大な映像と証言から見つめ直し，次への教訓を探った。「シリーズ原発危機　メルトダウン～福島第一原発　あのとき何が」では，冷却機能を失った原子炉の中で何が起きていたのか，放射能汚染はどこまで深刻化しているのかなどを徹底的な取材と独自調査から浮かび上がらせた。

「あなたの寿命は延ばせる～発見！長寿遺伝子」では，最新科学が解き明かした長寿の秘密に迫り，誰もが持つ長寿遺伝子にどうすればスイッチを入れることができるのかを紹介した。

「深海大探査～生命誕生の謎に迫る」では，生命はどのように誕生したのかという壮大な謎を解き明かす世界初の深海の大探査に密着。熱水噴出孔の掘削調査から見えてきた生命の起源を紹介。

「緊急報告　記録的豪雨の衝撃」では，９月に紀伊半島を襲った集中豪雨が引き起こした災害を緊急報道。記録的な大雨はなぜ降り，山が至る所で大規模に深層崩壊したのかを検証した。

「世界初中継　宇宙の渚」では，国際宇宙ステーションにNHKが独自に開発した超高感度カメラを持ち込み，古川聡宇宙飛行士が地上から400キロの宇宙の渚からオーロラや謎の発光現象スプライトなどを世界初の生中継で紹介した。

「ここまで来た！うつ病治療」では，脳科学の進歩が変え始めたうつ病の診断と治療の現場に密着。最新の磁気刺激による治療で患者が劇的に改善していく様子を脳内メカニズムも交え紹介した。

夏の特集『ちょっと変だぞ日本の自然』では，雑木林に出現した謎の小型のカブトムシや世界自然遺産の島・小笠原で巨大化するヤドカリなど，各地で急増している新型生物を大調査。人の生活が自然にどれほどの影響を与えているのか，見つめ直した。

土曜の夜の特集『五感の迷宮』では，ヒトの視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の５つの感覚の世界を大解剖。脳が作り出す謎に満ちた感覚の世界をさまざまな錯覚実験を交え分かりやすくひもといた。

特集『ミラクルセンスを磨け』では，一流のサッカー選手やソムリエなど人並み外れた感覚の持ち主に密着。彼らはどのようにして特別な能力を手に入れたのか，最新の脳科学から徹底解明。私たちに秘められた豊かな可能性を見つめた。

ABUアジア・太平洋ロボコンは，８月にタイ・バンコクで開催。３台のロボットでバラバラになっている灯籠の模型を組み立てる競技で，タイのトゥラキット・バンディット大学が優勝。大会のもようは９月に放送した。また，高専ロボコンは11月20日，両国･国技館で全国大会が開催された。アメリカンフットボールの要領で，ボールを人とロボットがパスするスピードを競った。12月に放送した。

教育番組

Ⅰ．青少年・教育番組

青少年・教育番組部は，幼児から青少年までの若い世代に向けて，楽しみながら豊かな情操を育むことのできる教育番組や学校放送番組，ファミリー向け番組を制作した。

多メディア時代を迎える今日では，「３スクリーンズ」としてテレビ・パソコン・モバイルを連動させた番組開発に積極的に取り組み，デジタル時代にふさわしいサービスを提供している。

11年度は，幼児や小中学生という視聴ターゲットに加え，高校生を対象としたウィークリーの新番組『Rの法則』をスタートさせた。放送だけでなく，ホームページ（HP）へのアクセスも増加し，番組が募った会員数はおよそ１万人になっている。

また，家族に向けたニュース解説番組『週刊ニュース　深読み』は番組開始から２年目を迎え，世の中の一番の関心事を分かりやすく深く読み解いている。

（１）幼児向け番組

11年度は前年度から進めてきた朝の編成をさらに発展させ，対象年齢の高い順に並べた『みいつけた！』『おかあさんといっしょ』『いないいないばあっ！』をゾーン編成としてとらえ，さらにアニメ『パッコロリン』を新設，登場するキャラクターは，３番組を横断して活躍させることで，幼児向け番組の核としての訴求力を高めた。また『デザインあ』を新設，身の回りに当たり前にあるモノや空間をデザインの観点から見つめ直すことでデザインの面白さをこどもたちに発見してもらうことを目指す番組とするなど，幼児こども番組の刷新と強化を行った。

（２）こども番組

小学生を対象とした番組『ビットワールド』『大！天才てれびくん』では，データ放送を利用した視聴者参加型番組を企画し，視聴者との新しい双方向スタイルの番組を提示した。家庭にあるTVリモコンの４色ボタンを押すだけで回答できるという手軽さで，多いときには４万人を超える

視聴者が番組に参加した。番組ホームページもより楽しいものへと改良を重ね，アクセス数を伸ばしている。テレビの放送だけに限らない，現代の子どもたちのメディア環境にマッチしたエンターテインメントを提供している。

（３）若者番組

09年度スタートし，ウェブ上で10代と20代の若者が議論を交わす『青春リアル』。タイトル通り，今の若者の悩みや疑問がリアルに語り合われるこの番組は，ウェブと連動した新しいスタイルの番組として10代・20代の若者に支持されている。

11年度は，東日本大震災後「福島を見ているＴＶ」という番組特別企画を月に１回のペースで放送。原発事故後に苦しむ福島県の若者の置かれている現状などに迫り，切実な思いに耳を傾けた。

４月から半年にわたって放送した『ディープピープル』は，同じ道を極めた３人のプロフェッショナルが一堂に会し，台本なし，司会なしで「己の技と心の内」を本気で語り合った。「スーパー指揮者」「イルカトレーナー」「人型ロボット開発者」など，各界をリードする実力者たちが，一般の人たちがうかがい知ることのできない世界についての深いトークを繰り広げた。

（４）特集番組

東日本大震災直後から福島県南相馬市にある小学校の６年生に密着したドキュメンタリー番組『21人の輪』。原発事故で一変した子どもたちの日常を１年間，10回にわたって放送した。長期間，ひとつのクラスをカメラで追うことで，被災した子どもたちの心の動きを丁寧に伝えた。

青少年をターゲットとした特集としては，７月，人気モデルのきゃりーぱみゅぱみゅが司会を務め，ゲストが10代のときに影響を受けた本を紹介する『コレヤバっ』を放送した。10月には，人気コンビ・ナインティーナインがMCのバラエティー番組『いっちょまえ』を制作し，大人になるにはどんなことが必要かを考えた。

ファミリー向けの番組としては，ニュースを分かりやすく解説した番組『イチからQ』を放送し，原発事故，経済問題，中東諸国に広がる民主化などを一からひもといた。

この他にも定時番組では，『大！天才てれびくん』や『ビットワールド』『みんなのうた』『Rの法則』が放送時間を拡大するなどして特集番組を制作した。いつもの番組をさらにパワーアップし，番組ファンに届けた。

Ⅱ．学校教育番組

11年度は，学校へのデジタルテレビや電子黒板の導入，校内LANの整備がさらに進んだ。こうした教室環境の変化に合わせて，NHKデジタル教材をさらに充実させた。学校教育番組の中からは31番組を，またクリップは理科分野を中心に約800本を新たに制作し，約4,000本をインターネット経由で提供した。また，電子黒板に対応した新たなウェブ教材の開発にも着手した。

（１）定時番組

学校教育番組および関連番組として40番組（小学校向けテレビ29，同ラジオ２，中学校・高等学校向けテレビ９）を放送した。

新番組としては，小学校３～６年生それぞれに向けた理科番組『ふしぎがいっぱい』，小学生向けの英語番組『プレキソ英語』，小学校３・４年生向けの社会科番組『知っトク地図帳』，小学校３～６年生向けの社会科番組『どきどきこどもふどき』，小学校５年生向けの社会科番組『社会のトビラ』を放送した。また，過去の学校放送番組をアンコール放送する『学校放送ライブラリー』も新設した。

（２）特集番組

NHK全国学校音楽コンクール関連として，『発表！Nコン2011課題曲』『課題曲を歌おう』『被災地再起への記録～また仲間たちと歌いたい』『続・また仲間たちと歌いたい』を放送し，10月に行われる全国大会の多面的な展開を図った。

また，「NHK杯全国放送コンテスト」関連として，『ティーンズビデオ』『ティーンズラジオ』で優秀作品を紹介し，放送教育研究会全国大会関連では，『デジタルテレビ新時代～わかる・伝えあう授業つくり』を放送した。

日本賞関連では，『まるごと紹介！2011年日本賞受賞作品』『2011年日本賞 Presents　世界のとっておきテレビ』を放送した。

また，春・夏・冬休みに放送するテレビクラブでは，『できた　できた　できた　夏の増刊号』『できた　できた　できた　入学準備号』『春期特集　おはなしのくに』などを放送した。

そのほか，小学生向けの道徳番組をベースにした特集番組の第２弾『時々おとなも迷々２』，同じく定時番組から発展した『スクールLive Show for KIDSスペシャル～なわとびかっとび王選手権』なども放送した。

（３）教育イベント関連

①「第62回放送教育研究会全国大会」（８月３日）は，東京都渋谷区・国立オリンピック記念青少年総合センターで開かれ，11年の地上デジタル完全移行や新指導要領の全面実施を受け，学校現場でどのように番組を視聴・活用していくかなどについて，活発な議論が展開された。

②「第78回NHK全国学校音楽コンクール」には，小・中・高合わせて2,596校が参加。NHKホールで行われた「全国コンクール」（10月８～10日）では，小学校，中学校，高校の部を生で放送した。

③「第58回NHK杯全国高校放送コンテスト」には地方予選を含め，全部門合わせて1,613校が参加した。

④「第28回NHK杯全国中学校放送コンテスト」には地方予選を含め，全部門合わせて626校が参加した。

⑤「先生のためのデジタルテレビ・ICT活用講座」は全国10か所で実施し，学校放送と，それに連動したデジタル教材の具体的な活用方法を学ぶ体験型の研究交流講座が開催された。

（４）学校教育関連委員会

①教育放送企画検討会議（ブロック）

全国８つのブロックで，放送を利用している教員と12年度の学校放送の方向性について意見交換を行った。

②教育放送企画検討全体会議

各ブロックからの意見を集約し，具体的な番組計画を立案した上で，学識経験者，全国放送教育研究会連盟役員，教員，教育行政関係者と，12年度の学校放送の制作方針および学校放送の将来の在り方について検討を行った。

③学校放送番組委員会

各番組の企画・制作にあたって，学識経験者，教員，教育行政関係者などと意見交換を行い，利用現場の意向や要望を反映させた。

Ⅲ．趣味・実用番組

（１）定時番組

平日を中心に暮らしのさまざまなノウハウを紹介する番組を並べた。月～木曜の午後９時からは家庭料理のノウハウを伝える『きょうの料理』と初心者や若い人に向けた料理の基本をやさしく伝える『きょうの料理ビギナーズ』。また９時55分からは５分で趣味実用情報を伝える『まる得マガジン』を放送した。

木曜にはさらに女性に向けた番組を連続で放送。午後９時30分からは手芸や洋裁など手作りの楽しみを伝える『すてきにハンドメイド』を，10時からはメイクやエクササイズなどの美容に関する情報を伝える『きれいの魔法』を，10時30分からは20～30代の女性に向けて第一線で活躍する女性のライフスタイルを紹介する『グラン・ジュテ』を放送した。

また，水曜の深夜（木曜午前０時）には若者向けの資格情報を紹介する『資格☆はばたく』を放送した。

夜の９時台・10時台にはさまざまなジャンルの趣味講座４番組を放送した。月曜10時台はスポーツなど体験型の趣味を紹介する『チャレンジ！ホビー』，火曜９時台は中高年に向けたパソコンのイロハを分かりやすく伝える『中高年のためのらくらくパソコン塾』を，10時台には日本の文化や芸術を趣味として学ぶ『直伝　和の極意』を放送。そして，水曜９時台には音楽や絵画などの趣味を学ぶ『あなたもアーティスト』を放送した。

日曜の午前８時台には野菜作りの楽しさを伝える『趣味の園芸　やさいの時間』，園芸初心者向けの『趣味の園芸ビギナーズ』，本格的園芸ファンに向けての『趣味の園芸』を３本連続して放送した。

囲碁・将棋ファン向けには，毎週日曜の昼にEテレで『将棋の時間』『囲碁の時間』『囲碁・将棋フォカース』を，BSPでは，囲碁・将棋のタイトル戦の中継など，さまざまな形で放送した。

（２）特集番組

囲碁・将棋ファンに向けて，『決定！こども囲碁名人』『決定！こども将棋名人』『全日本アマチュア将棋名人戦』『将棋界の一番長い日』『将棋の日』『テレビ囲碁アジア選手権』『新春お好み将棋・囲碁対局』などの特集番組を放送した。

実用番組では，夏の特集番組として８月に『きょうの料理』の有名講師が旅先で地元の人たちとふれあいながら料理を作る『きょうの料理スペシャル・りゅうたのメシタビin大分』を放送。また11月には料理自慢の視聴者が腕を競う『きょうの料理クッキングコンテスト2011』，12月にはレシピサイトの活用や双方向性を取り入れた新感覚の料理番組『わが家はネットごはん』を，それぞれ生放送した。

Ⅳ．外国語講座番組

（１）定時番組

Eテレでは19番組，ラジオ第２放送では26番組，ワンセグ２で１番組の合計46の定時番組を制作放送した。

①Eテレ

英語番組を再編成し，「子どもから大人まで」日本人の英語学習を総合的にサポートする“英語グランドデザインプロジェクト”を始動。その第一弾として小学生向け英語番組『プレキソ英語』を放送した。大人向けには総合テレビで人気を博した『英語でしゃべらナイト』を実践講座として復活。バラエティー豊かな雰囲気はそのままに，実際に英語と奮闘している企業人を取材した。また，３年目を迎える『ニュースで英会話』は，ウェブでの実力テストを新規に開発した。クロスメディアならではのサポートで確実に英語を身につける手段を提供。常にNHKサイト内のページビュートップ10に位置する人気デジタルコンテンツとなった。

独・仏・中・西・伊・ハングルの６言語の番組では，魅力的な講師陣と生徒役を配するとともに，それぞれの言語への理解を促す文化情報を充実させた。韓流ブームの追い風をうけて，『テレビでハングル講座』はテキストの実売130万部を記録。K-POPグループ超新星をレギュラーに迎え，日常会話を学ぶコーナーも話題を呼んだ。中国語はビジネスニーズに応え，中国でのビジネス，また日本にやってくる中国人観光客を迎えるための表現を充実させた。欧州４言語は「ユーロ24」の第２シリーズに突入。４つの言語で毎回共通のフレーズを取り上げ，それぞれの言語の特徴や違い，文化的な背景を比較することで他言語にも興味を持ってもらう演出を行った。番組を盛り上げたのは個性豊かな生徒役の面々。イタリア語は高橋克実，ドイツ語は内田恭子，フランス語は黒谷友香，スペイン語は今井翼がナビゲーターを務めた。

②ラジオ第２

大人向けの英語番組を充実させた。『攻略！英語リスニング』を新設し，同時通訳の手法を用いたトレーニング形式が好評を博した。また『入門ビジネス英語』も人気講師を迎えリニューアルした。ラジオ講座の『まいにち○○語』シリーズでは，映画や創作ドラマ，グルメなどさまざまな教材を使ってバラエティー豊かな番組ラインアップを展開した。

（２）特集番組

『ニュースで英会話』は10年度に引き続き，年末に生放送の双方向特集番組を制作。東日本大震災を受け，世界からのメッセージを紹介するとともに，世界へのメッセージを視聴者からウェブと携帯で募集した。ラジオでは『DearTOHOKU』と題し，東北の高校生の英語スピーチを特集。震災プロと連動し，ウェブ上にも世界からのメッセージを掲載した。また，英語グランドデザインの一環として，テレビ版の『基礎英語』を開発。夏休みに前編・後編を放送した。年度末にはラジオ『基礎英語１，２，３』合同でウェブ連動の特集番組を実施。放送を聞きながらホームページの解答用紙に入力すると即時に採点され，全国ランキングも表示された。テレビ・ラジオ・ウェブを通じて，『基礎英語』ブランドをアピールする第一歩となった。

年末年始には楽しみながら外国語に触れる特集番組を放送した。テレビでは前年に続き，リトル・チャロの歌を集めた『SING！SING！SING！』，ラジオでは『JAZZ in ENGLISH』，『新春特番！K-POPでハングル三昧』（２日連続）を１時間枠で放送した。各言語でもさまざまな特集番組を制作。海外で活躍する日本人アスリートの語学習得に焦点を当てた『語学コロシアム』（３夜連続），韓流スターを招いてのイベントを収録した『韓流！“語楽”ナイト2011』，総合テレビでも正月特番として『親子で一緒に！とっておき★K-POP』を放送した。また，年度末には，12年度の新番組『スーパープレゼンテーション』に向けて，番組の題材となるTEDカンファレンスの舞台裏を取材した特集番組『世界を変える言葉の力』を放送。多様なニーズに応え，語学をさまざまな形で楽しむ番組を提供した。

Ⅴ．文化・福祉番組

文化・福祉番組部では，教養・生涯学習への多様な要望に応える文化番組，子ども・障害者・高齢者の課題に取り組む福祉番組など，多彩で高品質な番組を制作してきた。

11年度は，従来通りの教養および知的エンターテインメント番組に加えて，３月に発生した東日本大震災に関連したテーマを扱う番組を，もうひとつの重要な柱として番組の制作に当たった。

特に，年度が変わる直前に起きた東日本大震災については，福祉番組や宗教番組，『ETV特集』などで，多くの番組を放送することとなった。被

害の実態はどんなものか。被災した人たちにとって何が必要なのか。また，復興に向けて何が求められるのか。など，それぞれの番組の枠内，また特集枠などで文化・福祉番組部ならではの蓄積や経験を発揮することとなった。

一方の知的エンターテインメントは，総合テレビの定時枠で『爆笑問題のニッポンの教養』『地球イチバン』『仕事ハッケン伝』の３本を，またEテレでは，夜10時台，旧『知る楽』の枠で『さかのぼり日本史』『100分de名著』『仕事学のすすめ』などを放送した。

（１）定時番組

総合テレビでは，５年目を迎えた『爆笑問題のニッポンの教養』が，ノーベル賞受賞者から世界的芸術家や国際舞台で活躍する医師まで，あらゆる分野の第一人者たちを相手に，それぞれの分野の本質に迫るトークを展開した。特に，11年度は研究室にとどまるだけでなく，刑務所や遊園地，水族館などを訪れ，現場での体験感を生かすことに努めた。

10年度まで続いた世界遺産の関連番組での世界各地での取材経験を生かしながら，11年度は『地球イチバン』という形に番組スタイルを変えての放送となった。毎回，地球でイチバンの場所をレポーターが訪ね，暮らしや習慣の中から，人々が受け継いできた伝統文化の豊かさや暮らしの知恵などを紹介。レポートをもとにスタジオで語り合うという演出で，幅広い視聴者層に世界各地の魅力を伝えた。

同じく新番組の『仕事ハッケン伝』は，“もし今と違う仕事についていたら，どんな人生を送っていたのだろう”という問いを出発点に，有名タレントが就いてみたかったという仕事の現場で働く姿を追ったドキュメンタリー。１週間から10日と期間は長くはないが，働く条件は一般社員と同じで，お客様扱いは一切なし。ともに働くからこそ見えてくる企業の経営哲学や仕事の流儀を発見。そしてタレント自身が“もしあの時違った選択をしていたら”あり得たかもしれない「もう一つの人生」を，疑似体験する。IT企業（博多華丸）やコンビニの商品開発（ピース又吉），アパレル業界（鈴木亜美）など若者にとって関心の高い業種に，人気タレントが挑んだ。その体験VTRを見ながら，それぞれの職場をスタジオ代わりに，ゲストや社員なども交えて仕事の極意を語り合った。一般視聴者からの反響は極めて大きく，特に若年層から大きな支持を得た。

Eテレでは，『ETV特集』が，震災直後から震災に関連するテーマと積極的に向き合い，数々の番組で高い評価を得た。「ネットワークで作る放射能汚染地図」のシリーズでは，原発事故の被害をさまざまな角度から検証し，視聴者の高い評価を得たほか，「アメリカから見た福島原発事故」「原発事故への道程（２回シリーズ）」「原発事故に立ち向かうコメ農家」など複層的に原発問題と向き合った。また，震災関連だけでなく従来の社会や文化にテーマを得た番組でも，イスラム世界の現状を描いた「シリーズ　イスラム激動の10年」，家族の物語をたどる中で戦争を問うた「おじいちゃんと鉄砲玉」，歌人夫婦の相聞歌から家族や夫婦の在り方を考えた「この世の息」，日本に残るオオカミ信仰にスポットを当てた「見狼記」，英国と日本を代表する作家のインタビューを中心に構成した「カズオ・イシグロをさがして」「生き残った日本人へ　高村薫　復興を問う」など，多彩な番組を放送した。

82年から続く『こころの時代』でも，「シリーズ 私にとっての３･11」と題して，宗教家や作家，医師などさまざまな分野で活躍する人たちのインタビュー構成を放送した。作家，哲学者，宗教学者，医師など，各界を代表する人たちのメッセージは，被災した人たちにも，被災地を遠くから見守る人たちにも深い共感を持って受け止められた。

10年度から様変わりしているEテレの旧『知る楽』シリーズは，11年度，『100分de名著』『さかのぼり日本史』『仕事学のすすめ』『極める！』の４つの番組となった。いずれも毎月，テーマを決めて，４本を放送した。

前年から継続の『仕事学のすすめ』は，経済評論家の勝間和代さんに加えて，明治大学大学院教授の野田稔さんをトランスレーター（リポーター）に加えて，年間10人の仕事の達人たちにその仕事の極意をうかがった。『極める！』は，前年までの路線を継承し，タレントや俳優，歌手などが，ネコ，米，遊園地など一つのテーマにこだわって，毎回，取材を重ねた。

一方，『100分de名著』『さかのぼり日本史』は，11年度からの新番組。

『100分de名著』は，古今東西の「名著」のエッセンスを，25分×４回，合計100分で分かりやすく読み解き，そのなかから今を生きる人たちへの示唆となるような番組を目指した。ニーチェの「ツァラトゥストラ」，福沢諭吉「学問のすすめ」，ドラッガー「マネジメント」などに加え，論語やブッダまで，古今東西を問わず幅広く名著を解説

した。比較的，幅広い層の視聴者から好意的に受け止められ，テキストの売れ行きも好調だった。

『さかのぼり日本史』は，NHKの歴史番組としては初めての通史を取り上げるという試みであり，また現代から過去へ日本の歴史を遡るという，演出に挑んだ。ひと月４回のシリーズで，おおむね一つの時代を紹介。歴史的な出来事や流れに対して，「なぜ，そうなったのか」と，原因を探りながら，視聴者を過去へ過去へと誘うという手法を試みた。時代と時代の因果関係が明確になり，日本史の大きな流れがよく分かると，歴史ファンの視聴者からも好評であった。

福祉ジャンルの定時番組として，長年，視聴者からの支持を得てきた『福祉ネットワーク』も，東日本大震災の直後から，災害の報道と復興に向けた情報提供に努めた。

11年３月の震災直後には，連日，スタジオからの生放送でよりビビッドな情報発信を続けたが，新年度になった４月以降も，災害弱者である障害者や高齢者にとって，どのようなサポートが必要なのか，定時の枠の中で問い続けた。特に，震災からの節目となる各月の11日には，生放送でその時その時の情報を伝えるとともに，大きな節目となる９月11日の震災半年，３月11日の震災１年の時期には，震災関連のテーマを手厚く放送した。また，定時の「介護百人一首」から発展させた「震災短歌」では，被災地での公開イベントを開催し，大きな反響を呼んだ。

震災関連の番組を集約的に放送する一方で，10年以上にわたって，障害や心の悩み，介護など，さまざまな困難を抱えながら懸命に生きる人々の“しあわせ（福祉）”の実現を目指す総合情報番組として，震災以前と変わらぬテーマにも取り組んだ。11年度は，大きな社会問題となっている認知症とガンについて，複数回のシリーズを組み，真っ向から向き合った。また，里親による里子の虐待を取り上げたシリーズなどでは，視聴者からさまざまな反響が寄せられた。この『福祉ネットワーク』の枠内で，若者の悩みにスポットを当てたシリーズとして放送した「オトナへのトビラ」は，若い世代に好評で，12年度には定時番組として放送されることとなった。

また，毎月第４週に放送してきた，『ハートをつなごう』では，司会の桜井洋子アナウンサー，出演者の石田衣良さん，ソニンさんが，困難や悩みを抱える障害者を招いてスタジオで語り合った。特に，性暴力被害などいままで表面化してこなかった問題を取り上げた回では，たくさんの声が寄せられ，顕在化していない問題の大きさを感じさせられた。

一方，これまで継続的に行ってきているホームページ「NHK福祉ポータル　ハートネット」でも，掲示板を通じての視聴者どうしの議論が活発に行われている。

ほかに，『みんなの手話』『ろうを生きる　難聴を生きる』『ワンポイント介護』『ワンポイント手話』，またラジオでは『聞いて聞かせて』『社会福祉セミナー』などの番組で，さまざまな障害のある人に対しての情報提供を行った。

（２）特集番組

特集番組でも，『NHKスペシャル』の「飯舘村～人間と放射能の記録」（７月放送），「助かった命がなぜ」（11月放送），「原発事故　謎は解明されたのか」（12月放送），「シリーズ原発危機　知られざる放射能汚染～海からの報告」（１月放送）は，東日本大震災と原発事故に焦点をあて，被災地で何が起こっているのか，復興に向けて何が求められているのかなど，被災地に寄り添った目線で番組を制作した。

また，『NHKスペシャル』以外でも，『医療崩壊の町を津波が襲った～岩手県宮古市　被災地再起への記録』『ヒューマンドキュメンタリー　がれきを踏みしめて～気仙沼　港町の絆』『東日本大震災６か月～取り残される障害者』『震災の歌～鎮魂と希望と・三十一文字の記録』『東日本大震災１年　この町で暮らしたい～障害者・地域福祉の復興へ』など，定期的に震災関連の特集番組を制作し，いずれも視聴者から高い評価を受けた。

震災以外をテーマとする番組では，10年を迎える9.11テロにスポットを当てた番組を制作した。『渡辺謙　アメリカを行く～9.11テロに立ち向かった日系人』では，俳優・渡辺謙さんの目線を借りて9.11テロと太平洋戦争の知られざる物語をドキュメントした。

また，開発番組としては，『大発見史～疾走する進化論』『ココロ見』『ラスト・ニンジャ～古文書発掘ミステリー』など，多彩なジャンルにわたって新しい試みに挑んだ。

芸能番組

Ⅰ．ドラマ番組

11年度のドラマ番組は，地上波デジタル放送の本格化と衛星放送のチャンネル改編に伴い，より多様なテレビドラマの制作に取り組んだ。連続ド

ラマ，単発・シリーズドラマそれぞれにターゲットを明確にし，おのおのの特長を生かしてクオリティーの高いドラマ番組の制作を目指した。連続ドラマでは『大河ドラマ』「江～姫たちの戦国」，『連続テレビ小説』「おひさま」「カーネーション」がいずれも好評を博した他，『ドラマ10』では「胡桃の部屋」などが女性層を中心に話題を呼び，『土曜ドラマスペシャル』「神様の女房」「蝶々さん～最後の武士の娘」が，視聴者層の拡大に尽力した。

（１）連続ドラマ

①『大河ドラマ』

63年「花の生涯」から始まった『大河ドラマ』も，11年の「江～姫たちの戦国」で第50作目となり，日曜夜８時の時代劇として視聴者に定着している。

「江」は，作・田渕久美子，主演・上野樹里。浅井長政と織田信長の妹･市の三女として生まれ，後に徳川家康の嫡男・秀忠の妻となり，数奇な運命に翻弄されながらも強く生き，徳川の礎となった江と，二人の姉・淀，初の波乱に満ちた人生を描いた。全46回。

②『連続テレビ小説』

こちらも「朝ドラ」として定着し，11年度前期の「おひさま」で84作目となる。作・岡田惠和，出演・井上真央，高良健吾。長野・安曇野と松本を舞台に，戦争をはさんで，日本人が生き抜いてきた昭和という激動の時代の中で，人々をおひさまのような明るい希望で照らす，ひとりの女性のさわやかな一代記を描いた。全156回。

11年度後期は大阪局制作「カーネーション」。作･渡辺あや。主演･尾野真千子。舞台は，大阪･岸和田市。大正時代に生まれ，日本のファッションデザイナーの草分けとして活躍したヒロインが，女手ひとつで３人の娘を世界的ファッションデザイナーに育てる波乱万丈の物語。パワフルで笑いに満ちた女性の一代記を愛情たっぷりに描いた。全151回。

（２）単発・シリーズドラマ・オーディオドラマ

『土曜ドラマスペシャル』は，経営の神様と呼ばれた松下幸之助の妻の人生を描いた「神様の女房」（３回），大病院を襲う前代未聞の危機を描いた東野圭吾原作の「使命と魂のリミット」（２回），昭和11年のオペラ「蝶々夫人」舞台の再現や維新の長崎の色鮮やかな風情などを取り入れた「蝶々さん～最後の武士の娘」（２回），真珠湾攻撃で捕虜第１号となった男の実話を描いた「真珠湾からの帰還～軍神と捕虜第一号」，昭和37年の広島県備後市を舞台にした重松清原作のシングルファーザー物語「とんび」（２回），山田太一のオリジナルドラマ「キルトの家」（２回），岐阜県白川村を舞台に地域医療を描いた「家で死ぬということ」，東日本大震災の被災地である岩手県田野畑村で撮影され，地元の方の証言をもとに制作した「それからの海」など社会派ドラマを放送し，男性層を中心とした視聴者から好評を得た。

また，10年度から火曜午後10時に新設した『ドラマ10』では，「マドンナ･ヴェルデ」（６回），「下流の宴」（８回），「胡桃の部屋」（６回），「ラストマネー～愛の値段」（７回），「カレ、夫、男友達」（８回），「タイトロープの女」（６回）などの話題作を放送，40～50代女性に視聴者層を広げた。

また，時代劇のシリーズを11年度から衛星放送の新チャンネル，BSプレミアムで『BS時代劇』としてリニューアル。「新選組血風録」（全12回），「テンペスト」（全10回），「塚原ト伝」（全７回）の３シリーズを放送し，時代劇ファンの期待に応えた。

特集ドラマでは，『どんど晴れスペシャル』（２回），『生むと生まれるそれからのこと』，日韓共同制作ドラマ『赤と黒』（17回），創作テレビドラマ大賞の大賞受賞作『夜明けのララバイ』，初のマルチチャンネルドラマ『朝ドラ殺人事件』（２回），ケータイ発ドラマ『金魚倶楽部』（10回）などの意欲的なドラマを制作。

司馬遼太郎原作の『スペシャルドラマ～坂の上の雲』（全13回）は，09年の第１部（５回），10年の第２部（４回）に続いて11年には第３部（４回）が放送され，３年にわたる全13回の放送が完結し，大きな反響を得た。

オーディオドラマも定時番組『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』の他，『特集オーディオドラマ』を放送した。

Ⅱ．エンターテインメント番組

11年度は，総合・Eテレ・BSP・ラジオ第１・FMで新たに立ち上げた番組の定着を図るとともに，12年度以降を見据えた新番組開発にも積極的に取り組んだ。

また，東日本大震災を受けて，『鶴瓶の家族に乾杯』がかつて訪れたことのある被災地を再訪し出会った家族を見舞う「再会編」を制作したのをはじめ，『SONGS』『MUSIC JAPAN』などの定時番組や，『歌でつなごう』『NHKのど自慢拡大版～岩手県久慈市』『震災から１年“明日へ”コンサート』などのさまざまな特集番組，さらに

『第62回NHK紅白歌合戦』を通じて，復興支援のメッセージを発信し続けた。

（１）公開・派遣番組

視聴者とNHKを結びつける役割を担う公開・派遣番組の制作は，当部の業務の中核をなしている。

11年度は，『NHKのど自慢』，『NHK歌謡コンサート』（２本を地方派遣），『ごきげん歌謡笑劇団』『オンバト＋』『BS日本のうた』『ザ少年倶楽部』『真打ち競演』『キャンパス寄席』のほか，有料のチャリティーイベント『歌謡チャリティーコンサート』（２回）など，数多くの番組を通して視聴者と向き合った番組制作を行ってきた。

一方で，東日本大震災の影響から，東北で開催予定だった公開・派遣番組で制作を中止せざるを得ないものもあった。また，震災から半年の９月11日に生放送した『NHKのど自慢』岩手県久慈市の回は，特別に仙台市・福島市でも予選会を開催し，通常20組の本選出場者を30組に拡大して実施した。『歌謡チャリティーコンサート』では，岩手県盛岡市実施分を急きょ兵庫県神戸市での実施に振り替え。『第43回思い出のメロディー』は，当初の予定を変更し，NHK大阪ホールから公開生放送を行った。

（２）定時番組

11年度は，新たに『○○○○の演芸図鑑』『松本人志のコントMHK』『ミュージック・ポートレイト』『アンジェラ・アキのSONG BOOK in English』『たけしアート☆ビート』『宮川彬良のショータイム』『キャンパス寄席』『岡田惠和　今宵、ロックバーで～ドラマな人々の音楽談義』『AKB48の“私たちの物語”』『上地雄輔のラジ音！』『石丸幹二のシアターへようこそ』の11番組を立ち上げ，幅広い視聴者に向けた多様なジャンルの番組ソフトを提供した。

（３）特集番組

総合テレビでは，大型歌謡イベントや定時番組を発展させた特集番組を制作し，視聴者の期待に応えた。

『第62回NHK紅白歌合戦』は，“あしたを歌おう。”というテーマのもと，東北を応援する企画を随所に盛り込みながら，東日本大震災からの復興への願いを込めた熱唱とメッセージを届け，多くの視聴者から支持された。視聴者投票も初めて100万票を超えたほか，NHKオンデマンド視聴者数も過去最高となるなど視聴者からの共感を得たことがさまざまな角度で現れた。このほか，大型歌謡イベントとしては，『第43回思い出のメロディー』，６年ぶりの海外開催となる『NHKのど自慢イン台湾』を制作した。

衛星放送では，千葉・幕張と福島・須賀川の２会場に郡山中継を加えて６時間の生放送となった『震災から１年“明日へ”コンサート』などの大型イベントや，『ザ・ヒットメーカー』『昭和の歌人たち』といったシリーズもの，定時番組を発展させた『たけしアート☆ビート大博覧会』，井上陽水・沢田研二・AKB48といった話題のアーティストのライブ中継など，数多くの衛星放送ならではのソフト制作を行ってきた。

また，開発番組として，制作局のクイズ・バラエティー番組開発プロジェクトから生まれた『スゴロQジャパン』や『日村・土田・塚地の爆笑TEPPANストリート』などを制作・放送した。

11年度は，総合・Eテレ・BSP・ラジオ第１・FMで160本あまりの特集番組を制作・放送した。

Ⅲ．音楽・伝統芸能番組

クラシック音楽から日本の伝統芸能，民謡，演劇，ダンスなど幅広いジャンルで，視聴者の期待に応える良質な番組コンテンツを制作し，公共放送として日本の放送文化における重要な役割を担った。

（１）テレビ定時番組

Eテレで，金曜夜間に『にっぽんの芸能』という伝統芸能番組を新たに設置し，愛好家の視聴習慣に配慮した編成をとった。

『にっぽんの芸能』は，初心者向けの「花鳥風月堂」と愛好家向けの「芸能百花繚乱（りょう）」という２階建ての構成で，古典芸能の愛好家を広げ，その魅力をより広く伝えることを狙った。歌舞伎の話題公演やロケも取り入れたほか，和太鼓の演奏など郷土芸能にも目を向けた。

『N響アワー』では，司会３年目を迎えた作曲家の西村朗さん，黒崎めぐみアナウンサーがクラシック音楽のすばらしさを楽しく，分かりやすくというこれまでの番組コンセプトを継承し，新しい音楽ファンの獲得を目指した。第５日曜は，『オーケストラの森』として，N響以外の日本全国のプロ・オーケストラを紹介し，そのコンサートのもようを放送した。

（２）公開派遣番組

総合テレビでは，『それいけ！民謡うた祭り』を，全国８か所で公開録画。地元の民謡や郷土芸能を紹介するとともに，地域に根ざした歌である民謡が，被災地の人々の心の支えになることを期

待して，極力東北・関東の民謡を取り上げた。ラジオの『民謡をたずねて』『ベストオブクラシック』『名曲リサイタル』も，引き続き実施した。

またEテレの新番組『スクールLive Show for TEENS』を全国９か所で公開録画。特集を含め，年間20本の放送を行った。合唱やオーケストラ，ダンスなど，エンタメ系部活動に励む中高生のパフォーマンスや，一流プロの演奏・演技を紹介した。

（３）ミニ番組

長寿番組『名曲アルバム』は，放送開始35周年を記念した特集番組の制作を機に視聴者からリクエストを募り，その要望にも応えるという視点から新作・リメイクを行い，そのブランド力を示した。また，音源をマルチユースして音声波で『名曲の小箱』『名曲スケッチ』も多数新作した。新作ブルーレイディスク，CDの二次展開も行っている。『みんなの童謡』は「雪」を新作。

（４）テレビ特集番組

東日本大震災関連として，『特集・それいけ！民謡うた祭り』を茨城県小美玉市で公開収録（放送：２月25日）。小美玉市は，東日本大震災当日，天井崩落の衝撃映像が世界中に発信された茨城空港の所在地。震災からほぼ１年。東北や関東の被災地の人々に地元の民謡でくつろいでもらうことを目的に放送した。

元日恒例の『ウィーン･フィル　ニューイヤー･コンサート2012』には，指揮者はマリス・ヤンソンスが登場。ハイビジョン5.1サラウンドの高画質・高音質で，オーストリア・ウィーンからの生中継を行った。スタジオゲストには素人のクラシック愛好家たちを招き，かつてない視点でニューイヤー・コンサートの魅力を紹介した。

正月２日に恒例となった『こいつぁ春から～初芝居生中継』は東京・新橋演舞場と大阪松竹座を生中継で結んで初日の様子を紹介した。演目は正月にふさわしい派手な演目「め組の喧嘩」「積恋雪関扉」など。あわせて浅草公会堂やル・テアトル銀座など各座の正月芝居のもようをダイジェストで紹介した。

正月３日恒例の『NHKニューイヤーオペラコンサート2012』は，第55回を迎えた。また，東日本大震災後初の開催となった12年は，「愛に満ちて人は歌う　愛を力に人は歌いつづける」をテーマに，バイロイト音楽祭で主役を歌う藤村実穂子ほか国内外で大活躍する日本人歌手が集結し，歌の力，結束する力で困難を乗り越えようというメッセージをオペラ・アリアに託した。幕間では東京バレエ団が生誕150年を迎えたドビュッシーの「牧神の午後」を披露し，見どころ聴きどころ満載の２時間生放送となった。

『NHK古典芸能鑑賞会』は，NHKならではの豪華な顔合わせと，類を見ないバリエーション豊かな演目が見どころ。一夜でさまざまなジャンルの芸能の至芸を紹介する，充実した内容が売り物である。38回目となる11年は，箏曲生田流の演奏，ホールの空間を最大限に生かした舞踊，新人間国宝に認定された中村吉右衛門ほかによる歌舞伎など，話題性も有り豪華な内容を放送した。なお，音声は歌舞伎特有の花道など劇場の機構にふさわしく，効果的な，臨場感あふれる5.1サラウンドを用いた。

『プレミアムシアター』の枠内特集では，指揮者・佐渡裕のベルリン・フィル定期デビュー公演を国際共同制作で収録し，６月に放送した。また世界で最もチケット入手が困難と言われるバイロイト音楽祭を10年に引き続きTV生放送を８月14日に実現。現地からのリポートと共に，幕間にはアーティストへのインタビューなどを紹介し，歌劇「ローエングリン」全幕を６時間50分に及ぶ生放送として成功させた。さらに，年末には『華麗なるオペラの世界　ミラノ･スカラ座』と題して，世界屈指の人気を誇る歌劇場，ミラノ・スカラ座の名演奏から６演目を，５夜にわたって放送した。

（５）FM特集番組

『今日は一日“○○”三昧』は，テーマをひとつのジャンルに絞って一日中たっぷり堪能してもらう番組で，音楽波NHK-FMの特性を生かしたオール・ジャンルの超長時間特集企画。11年度のテーマは，「ラ・フォル・ジュルネ」「名曲アルバム」「ヘビメタ」「浜松アーカイブス」「名曲アルバム」（放送開始35周年）など。

ほかに，夏の『ベストオブクラシック～特集ヨーロッパ音楽祭』や，年末の『バイロイト音楽祭』なども例年どおり放送し，クラシックファンの期待に応えた。

毎年秋の恒例となった『NHK音楽祭』は９回目を迎え，“華麗なるピアニストたちの競演”をテーマに開催された。NHKホールで行われたこのイベントに今回は，ボリス・ベレゾフスキーのピアノ，アントニオ・パッパーノ指揮，ローマ聖チェチーリア国立アカデミー交響楽団／シプリアン・カツァリスのピアノ，ネヴィル・マリナー指揮，NHK交響楽団／河村尚子のピアノ，マレク・ヤノフスキ指揮，ベルリン放送交響楽団／エフゲーニ・キーシンのピアノ，ウラデーミル・アシュ

ケナージ指揮，シドニー交響楽団／ダン・タイ・ソンのピアノ，パーヴォ・ヤルヴィ指揮，パリ管弦楽団が参加。ピアノ協奏曲の名曲を中心に個性豊かに演奏した。それぞれのプログラムはFMで生放送したほか，『プレミアムシアター』で全曲放送した。

（６）国際共同制作の推進

世界各地の音楽祭やオペラハウスでの公演を，各国の放送局・プロダクションとの共同制作により水準の高いソフトを低コストで効率的に収録し放送した。11年度はミラノ・スカラ座やボリショイ劇場など世界の一流歌劇場でのオペラ・バレエ公演，バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭，ルツェルン音楽祭などのフェスティバルほか，合計16本の国際共同制作を行った。また，国際共同制作のほか，スティーヴ･ライヒの最新作「WTC 9.11」世界初演をアメリカのノースカロライナ州で独占収録した。海外からの番組購入も積極的に行い，マルチユースすることで大型のクラシックソフトを安価で安定的に入手し，効果的に編成・放送した。

購入番組

１．Eテレ

（１）ドラマ

定時ドラマでは，『iCarly（アイ・カーリー）』（火，19:25），『新ビバリーヒルズ青春白書２＆３』（土，22:00）の米国ドラマを放送した。

（２）ドキュメンタリー

ドキュメンタリーでは，定時番組『地球ドラマチック』（土，19:00）の中の「月と太陽の神秘～地球が月と離れる日」は好評で，NODでもEテレ年間３位に位置した。また，「野生ヒョウのマナナ～絆を深めた17年間」「古代エジプト　巨大墳墓の謎」「恐竜たちの大移動～スカーとパッチの物語」なども好評だった。

（３）その他

アニメでは，シリーズアニメとして『おさるのジョージ』（土，8:35），『ひつじのショーン』（土，9:00），『スター・ウォーズ／クローン・ウォーズ２』（土，18:25），『日常』（土，17:55）を放送。また，日曜の朝7:00に『ザ・ペンギンズ』を放送した。また，年末年始の特集として『劇場版アニメ「忍たま乱太郎」忍術学園全員出動！の段』『チェブラーシカ』『きかんしゃトーマス　ミスティアイランド レスキュー大作戦！！』を放送。

２．BS1

『BS世界のドキュメンタリー』は海外のプロダクションが制作したドキュメンタリーを放送。毎週一つのテーマを設定している。「チェルノブイリ事故25年」（５月），「ウィリアム王子結婚」（５月），「放射性廃棄物はどこへ」（５月），「ケネディの残光」（６月），「同時多発テロから10年」（９月），「女たちの戦争と平和」（１月）など。５月に放送したチェルノブイリ関連のドキュメンタリーは，東日本大震災への教訓として多くの反響が寄せられた。10月には２週間にわたって同時多発テロから10年がたったアメリカの現状を取り上げた。番組ウェブサイト上で視聴者に投票を呼びかけて「もう一度見たい番組」をラインナップする試みも継続している。また，国際共同制作の番組（20本程度）も好評で，「ナノ・レボリューション」は本格的な科学番組として評価された。NOD（NHKオンデマンド）の見逃しサービスでも，BS1の番組の中では常に上位を占めている。

３．BSプレミアム

映画枠は『BSシネマ』と改題した。日曜夜10時は，「山田洋次監督が選んだ日本の名作100本～家族編」を編成。「東京物語　デジタル・リマスター版」（4.4），「鉄道員（ぽっぽや）」（4.10），「恍惚の人」（5.29），「裸の島」（6.5），「人間の條件第１～６部」（8.15～20），「Shall we ダンス？」（11.20），「お葬式」（12.4），「紀ノ川」（1.10），「家族」（3.20）などを解説をつけて放送した。

月～水曜の夜10時には，「ブラッド・ダイヤモンド」（4.13），「地獄門　デジタル･リマスター版」（5.2），「レインマン」（6.6），「ブルース・リー死亡遊戯」（8.3），「ハイ･クライムズ」（9.21），「HACHI約束の犬」（10.31），「二百三高地」（12.12），「かもめ食堂」（1.23），「黒部の太陽　特別編」（3.17）などを放送した。

６月には『バットマンシリーズ一挙放送』（6.19～28）として「ダークナイト」（6.28）など，10月は『赤毛のアン　ハイビジョン　デジタル・リマスター完全版　初公開一挙放送』（10.10～19），12月は『インディアナ・ジョーンズの大冒険』（12.10，17，24）として「インディ・ジョーンズ最後の聖戦」（12.24）などを放送した。また２月から３月にかけて『アカデミー受賞作品特集』として「ドライビングMISSデイジー」（2.20），「タイタニック」（3.3），「ティファニーで朝食を」（3.5）などを編成，「第84回アカデミー賞授賞式

のすべて」(3.14) を放送した。

午後の『BSシネマ』では,「大殺陣」(5.10),「ハスラー２」(6.10),「シマロン」(9.19),「夕陽のギャングたち」(1.16) などを放送,『アカデミー受賞作品特集』では「アラビアのロレンス　完全版」(3.1),「クレオパトラ」(3.5) などを編成した。週末午後には「午後の遺言状」(8.13),「スライディング・ドア」(11.3) などを放送した。

また，亡くなったエリザベス・テイラーをしのび「花嫁の父」(12.19) など，森田芳光監督をしのび「家族ゲーム」(12.25)，淡島千景さんをしのび「真実一路」(2.26) を放送した。

「アクターズ・スタジオ・インタビュー」では，ジェームズ・キャメロン (6.21)，ジム・キャリー (11.2)，ブラッドリー・クーパー (1.31) などを紹介した。

海外ドラマでは，定時番組として米国ドラマ『glee（グリー)』(年度前期　金，22:00),『デスパレートな妻たち６』(年度前期　金，23:00),『グッド・ワイフ２』(年度後期　金，23:00)，韓国ドラマ『トンイ』(日，21:00) を放送した。

また，韓国ドラマ関連特番として「もっと楽しむ！『トンイ』」(11.11，21:00～),「『トンイ』最終章スペシャル」(2.19，21:00～),『放送直前スペシャル“シークレット・ガーデン”秘密の扉』(3.29，23:00～) などを放送した。

特集編成としては,『刑事コロンボ　追悼放送』(7.4～6),『ケネディ家の人びと』(7.3，7.5～８),『SHERLOCK』(8.22～24),『名探偵ポワロ』(2.6～９),『glee（グリー）２』(3.18～24),『アガサ・クリスティー　ミス・マープル４＆５』(3.19～22，26～29) などを放送した。

アニメでは，夏休みに『スター・ウォーズ／クローン・ウォーズ』シーズン３，冬休みに『MARCO　母をたずねて三千里』『ハローキティのおやゆびひめ』『ニルスのふしぎな旅　劇場版』「劇場版　フランダースの犬」『ムーミン谷の彗星』『マイメロディの赤ずきん』『劇場版　きかんしゃトーマス　伝説の英雄』『トムとジェリーのくるみ割り人形』『ファーザー・クリスマス』『スノーマン』などを放送した。また春休みに，『映画おじゃる丸 約束の夏 おじゃるとせみら』『アンデルセン物語』『劇場版ジャングル大帝』『劇場版ペリーヌ物語』『ヒピラくん』『ムーミン・パペットアニメーション』『スポンジ・ボブとアトランティス、行きたいんデス』などを編成。

国際共同制作

NHKは80年から，継続的に海外の放送局や制作会社，配給会社と国際共同制作を行っている。事務局は編成局ソフト開発センターに置いている。

国際共同制作は大型番組を制作するうえで今や世界的に常識となっている。この背景には，テレビ番組市場を巡る環境が厳しさを増していることが要因として挙げられる。インターネットとの競合や多チャンネル化で良質なソフトへの需要が高まる中，国際間で制作費を分担して高品質の番組を確保する動きが活発化しているといえる。

11年度に放送した国際共同制作番組は52タイトル，139本であった。

12年３月に放送された『NHKスペシャル』「原発事故　100時間の記録」には，フランステレビジョンが共同制作参加し，フランス５のプライムタイムで放送，福島第一原発の事故から１年の特別番組として反響を呼んだ。

BSプレミアムで正月特番として放送された『ナノ・レボリューション』はカナダCBS，フランスDOCSIDE／アルテとの共同制作で，最先端の科学とシミュレーションドラマを組み合わせた最新の演出でナノテクノロジーと人間の将来を描き，斬新な手法が国際マーケットでも話題となった。『カティアとモーリス～雲仙・普賢岳　火砕流に挑んだ夫婦』は，20年前の雲仙・普賢岳の爆発を振り返り，フランス人火山学者夫妻と地元専門家，住民，メディア関係者との交流を含め，最後の数日に何が起こったのかを最新の取材で明かすドキュメンタリー・ドラマで，日本とフランスのジョイントチームによる撮影･制作が実現した。

11年度に放送された主な国際共同制作番組

○ドキュメンタリー

『NHKスペシャル』「原発事故　100時間の記録」：フランステレビジョン。『ナノ・レボリューション』：加CBC，仏DOCSIDE／アルテ。ドキュメンタリー・ドラマ『カティアとモーリス～雲仙・普賢岳　火砕流に挑んだ夫婦』：仏ボレアル／フランステレビジョン。

○音楽ほか

『日韓共同制作　赤と黒』：GOOD STORY，アジアコンテンツセンター。『ベルリン・フィル・イン・シンガポール』：独ユーロ・アーツ，NHKメディアテクノロジー。

放送番組の国際交流

１．番組交換

NHKは，海外の放送事業者との番組交換を，文化交流の促進や放送を充実させる目的で，協力協定や覚書に基づいて積極的に行っている。11年度も，ラジオ番組の提供と受け入れが行われた。

（１）ラジオ番組の提供

11年度は，楽壇への登竜門として開催された「第80回日本音楽コンクール」（全６部門）をはじめ，バッハ・コレギウム・ジャパンのコンサートを含むクラシック系番組，計15番組をEBU正会員および準会員に提供した。11年度は，前年度を上回る20か国20放送機関に対し32件，計57時間44分の音源を提供した。

（２）ラジオ番組の受け入れ

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団，ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会，米国，ドイツ，スイスを本拠地とする主要オーケストラの演奏会を受け入れただけでなく，東日本大震災直後に各局から提供された被災者支援チャリティーコンサートを積極的に受け入れ，放送した。また，例年通り，メトロポリタン歌劇場，ウィーン国立歌劇場による話題のオペラも数多く放送。11年度は，23か国40放送機関から186件，計307時間41分を受け入れた。

２．外国放送事業者への取材協力

NHKは，外国放送機関との相互協力の一環として，取材制作協力を積極的に行っている。

協力協定，ニュース取材への協力，海外総支局との関係等を考慮し，依頼に応じて編集・方式変換・衛星伝送や，カメラ，スタジオ，中継車など設備・機材の貸し出し，要員の協力・あっせんを行っている。

11年度の取材協力は，13か国・19放送機関，約50件であった。この他，中国CCTVが11年８月末より東京の伝送スタジオを通じて自国向け定時ニュースを開始，北京のキャスターとの掛け合い形式で週５日生放送を行っている。

（１）時事リポート

11年３月の東日本大震災と福島第一原発事故については，中国CCTVのほか，ロシアRTRやニュージーランドTVNZ，EBUシンガポール，アメリカFOXTV等各国から生中継や素材伝送，問い合わせがあり，中継や収録，施設提供などに協力した。

また，日中関係正常化40年にあたっての相互協力で，中国CCTVには，11年８月の民主党代表選，12月31日から１月１日の『ゆく年くる年』も放送センターの施設を使って伝送，12年３月には震災１年関連の特設ニュース中継の設営，映像素材も提供した。

（２）スポーツ

スポーツ関係では，11年11月に札幌で開催された「NHK杯国際フィギュアスケート競技大会」に際し，国際制作信号の配信，およびユニ取材伝送を準備段階からサポートし，カナダCBCやアメリカNBCにハイビジョン競技映像の伝送などで協力した。

「日本賞」教育コンテンツ国際コンクール

「日本賞」は1965年の創設から2007年まで，教育番組の国際コンクールとして，世界の教育番組の向上および国際理解と協力の増進に貢献してきた。各国の制作者が交流し議論する場や，教育番組に関する最新情報を交換する機会として大きな役割を果たし，その結果，先進国ばかりでなく，発展途上国・地域からも多くの参加を得ている。08年の第35回からは名称を「日本賞」教育コンテンツ国際コンクールと改め，募集の対象を「音と映像を用いた教育コンテンツ」に拡大した。

これは，インターネットをはじめとする情報通信技術の急速な進展やデジタル放送の開始など，著しい変化を遂げる教育メディアのデジタル化に対応し，コンクールの質を高めることが狙いである。

11年の第38回からは，コンテンツ部門に「イノベイティブ・メディア カテゴリー」を新設。既存のカテゴリーの枠にはまらない革新的なメディア活用に挑む作品を顕彰することとした。特別賞は「国際交流基金理事長賞」「ユニセフ賞」に加えて，テレビを通じてその国・地域の教育に継続的に貢献する作品に対する「前田賞」を贈ることとした。コンクールへの応募は，61の国と地域の200機関から，コンテンツ部門に278本，企画部門に35本，合計で313本となった。

11年のコンクールは，「NHK文化祭」の一環として10月20日から27日の８日間，東京・渋谷のNHK放送センターで行われた。

審査は，日本賞事務局が委嘱した世界14の国と地域の16人の審査委員によって厳正かつ公平に行われた。また，会期中は「クロスメディア・フォ

ーラム」と題して，一次審査を通過した作品のプレゼンテーションや上映会，世界の第一線で活躍するクリエイターや研究者が登壇するトーク・セッションを開催した。これらの催しに，37の国と地域から延べ688人が参加した。

最終日を飾る「授賞式」は101スタジオで行われた。会場には，審査委員，受賞者，大使館関係者など235人が出席。NHKの礒野佑子アナとミュージカル俳優井上芳雄さんの司会で，ソプラノ歌手森麻季さん，NHK東京児童合唱団による演奏を交えながら，活気あふれる雰囲気の中で各賞が授与された。

「グランプリ日本賞」は，アメリカWGBH教育財団制作のテレビ番組『アメリカを振り返る人種隔離バスへの抵抗』が受賞した。（⇒p.715）

関連番組として，『第38回日本賞授賞式～輝け！教育コンテンツ世界一』（Eテレ，10.30），『2011日本賞presents　世界のとっておきテレビ』（Eテレ，12.24），『アフリカ・人権を守る放送をめざして～“日本賞”企画部門の制作者たち』（BS1，2.26／NHKワールドTV，3.17）などを放送した。

詳細は，http://www.nhk.or.jp/jp-prize/

NHK文化祭

00年より「教育番組の祭典」として親しまれた「教育フェア」は，10年度から，若者も大人も対象にした教育文化的サービスを多様に体験できるイベント「NHK文化祭」にリニューアルした。同時に制作者にとっては，コンテンツの新規開発に資する複合イベントを目指した。

中核となる会館公開イベント「NHK文化祭たいけん広場2011」は11月１日から４日間行われた。10年度同様，「体験」をキーワードに制作現場からイベント企画を募集して実施。屋内･屋外･ふれあいホール･スタジオパークが一体となって，いらしたお客様が「歌い」「踊り」「さわり」「作る」イベントとした。小雨の日もあったが，４日間の総入場者数は７万689人と，10年を大きく上回った。内容としては，震災後のイベントということで，「あつまれ！みんなの元気」をテーマに会場でフォトメッセージを募集。被災地に向けたものを含め，818組の家族のメッセージが集まり，会場に掲出するとともに「震災プロ」のホームページとも連動した。また，同時開催イベントとして，「ふるさとの食にっぽんの食」東京フェスティバル，「おかあさんといっしょファミリーコンサート」（有料チャリティー・イベント），スタジオパーク無料公開デー，どーもくん食堂（５階食堂の一般開放）を展開した。

「アジア教育プロデューサー会議」は10月22～27日，NHKほかトルコ・イラン・タイ・マレーシア・ベトナム・ブルネイの放送局のプロデューサー計11人が集い，第１回「ABUデジスタ・ティーンズ」に向けて，各国で開催された作品制作ワークショップの報告や番組制作，次回のテーマなどについて議論。アジアの映像教育やメディア教育などについても語り合った。関連番組としては，第１回『ABUデジスタ･ティーンズ』（Eテレ，2.11）を放送した。

第12回NHKアジア・フィルム・フェスティバルは，10月15日からの５日間，「ふれあいホール」においてアジア映画新作４作品を上映した。入場者数は1,440人。前年比51％の大幅増だった。監督からのビデオメッセージに加え，上映後には各国事情に詳しいNHK解説委員によるトークを行い来場者へのサービスとした。来場者からは「非商業的な良質のアジア映画が見られる貴重な機会」などの意見が寄せられた。

関連番組は，Eテレのみならず，各波とも連動して多彩なラインナップの番組編成を行った。「日本賞」関連では，授賞式のもように加え，世界の教育コンテンツの魅力を紹介する作品を，Eテレ年末年始特集の中で集中的に編成した。「たいけん広場」の会場からは，『きょうの料理』のスペシャルイベント「クッキングコンテスト」を開催して総合テレビで生放送したほか，『科学で遊ぼう！マリー＆ガリー2011』や『ざわざわ森のがんこちゃんスペシャルショー』など，総合･Eテレ･ラジオ第１・FM・国際放送の計７番組の公開収録・放送が行われた。

放送番組コンクール

Ⅰ．国際コンクール

11年度は，27のコンクールで延べ60の番組等が受賞した。（⇒p.709）

国際エミー賞では，『NHKスペシャル』「奇跡の生還～スクープ　チリ鉱山事故の真実」が，時事問題部門で部門最優秀賞にあたる国際エミー賞を受賞した。この部門の最優秀賞をNHKの番組が受賞するのは史上初めてである。

モンテカルロテレビ祭では，『ドラマスペシャル』「心の糸」がAMADE／ユネスコ賞を受賞した。この番組はABU賞でもテレビドラマ部門の

最優秀賞にあたるABU賞を受賞している。

ABU賞では『FMシアター』「鳥を放つ日」もラジオドラマ部門のABU賞を受賞した。

日本賞では『みいつけた！』が幼児向けカテゴリーの最優秀賞を受賞した。

このほかアジアテレビ賞で，『NHKスペシャル』「ホットスポット　最後の楽園　第１回　マダガスカル　太古の生命が宿る島」が自然・野生生物番組部門の，そして『ドラマスペシャル』「心の糸」が単発ドラマ・テレビ映画番組部門の，それぞれ最優秀賞を受賞。『NHKスペシャル』「ホットスポット　最後の楽園　第１回　マダガスカル　太古の生命が宿る島」は国際野生生物フィルムフェスティバルでも最優秀科学賞を受賞した。

Ⅱ．国内コンクール

11年度は，20のコンクールで延べ80の番組等が受賞した。（⇒p.712）

放送文化基金賞では，テレビドキュメンタリー番組部門で，『NHKスペシャル』「封印された原爆報告書」が最優秀賞にあたる本賞を受賞した。同じくテレビドキュメンタリー番組部門で『ハイビジョン特集』「引き裂かれた歳月～証言記録・シベリア抑留」が優秀賞を受賞した。

文化庁芸術祭では『ETV特集』「ネットワークでつくる放射能汚染地図～福島原発事故から２か月」が，テレビ・ドキュメンタリー部門の大賞を受賞した。また，テレビ・ドキュメンタリー部門では『NHKスペシャル』「原爆投下　活（い）かされなかった極秘情報」が，テレビドラマ部門で『特集ドラマ』「風をあつめて」が，そしてラジオ部門ドラマの部で『特集オーディオドラマ』「空の防人」がそれぞれ優秀賞を受賞した。

「地方の時代」映像祭では，『NHKスペシャル』「果てなき苦闘　巨大津波　医師たちの記録」が全部門を通じての最優秀賞にあたるグランプリを受賞した。また，『ハイビジョン特集』「三代友達～大地の祈り　黒川能の絆（きずな）」が放送局部門の優秀賞を受賞した。

科学技術映像祭では『NHKスペシャル』「シリーズ原発危機　知られざる放射能汚染～海からの緊急報告」が内閣総理大臣賞を受賞した。また『コズミック フロント』「ダークエネルギー　発見！～加速する宇宙」が科学技術教養部門の優秀賞を受賞した。

全日本テレビ番組製作社連盟によるATP賞では，外部制作会社とともに制作された番組の中で，『ハイビジョン特集』「若き宗家と至高の三味線～清元二派　88年ぶりの共演」が総務大臣賞を受賞した。

アナウンス

１．震災報道と復興に向けて総力を結集

11年度，アナウンサーは「東日本大震災」「台風12号災害」「野田内閣発足」など自然災害や国政に全国のアナウンサーの総力をあげて取り組み，視聴者の期待と信頼に応えた。特に東日本大震災については，３月11日の発生以降継続的にニュース，中継，生活情報，節目の特別編成番組，『NHKスペシャル』関連番組などに全国体制で対応した。東北各局と水戸局への全国からの応援は，発生から３か月の時点で，延べ262人，2,783人日に達した。その後，異動で東北の被災地域局に三人を増員して配置し放送態勢を強化した。放送以外でもアナウンサーが現地の小学校に赴き，子どもたちに絵本の読み聞かせを行う「お話の会」を行い被災地支援に取り組んだ。

また，今後の地震への備えとして東日本大震災の教訓から，津波の際に強い口調で避難を促す呼び掛け文の考案や初動のキャスターワークの手引書の改訂を行うなど「命を守る放送」に強い決意を持って取り組んだ。

番組では，若手・中堅アナウンサーが，視聴者層の拡大に貢献した。昼の新しい中継番組「ひるブラ」は，アナウンサーとタレントが自由に歩き回るライブ感あふれるスタイルが視聴者の支持を広げた。また深夜帯の番組に若手アナウンサーを積極的に登用し，ネットと連動させる取り組みに尽力した。

７月，女子サッカーのW杯で「なでしこジャパン」が初優勝し震災後の日本を勇気づけた。NHKでは，日本女子代表の優勝まで全試合を中継し，国内外14人のアナウンサーがその興奮と感動を伝えた。

アナウンス室制作番組では『100年インタビュー』をBSプレミアムで７本制作し「聴き応え」のある番組として再放送希望が寄せられた。

12年３月末でアナウンサーは総勢514人，内訳はアナウンス室135人，ラジオセンター・日本語センター・グローバルメディア・地域放送局379人。女性アナウンサーは全国で81人。

（１）報　道

〔事件事故・災害・緊急報道〕

11年３月11日の東日本大震災発生後からアナウンス室では，全国のアナウンサーを動員して関係各所に要員を配置。テレビ，ラジオを通じ，連日24時間体制で，被災状況や生活情報を伝え続けた。４月以降，毎月11日には，被災地からの多元中継やキャスターの現地リポートで現状の課題を報告。『おはよう日本』の阿部渉キャスターは，毎月故郷岩手から現地リポートを行った。

東日本大震災での初動対応を踏まえ，アナウンス室では，今後の減災報道の在り方を考える報道局のプロジェクト「地震津波緊急報道検討会」に参画。津波からの避難を呼びかける文案については，武田真一アナや横尾泰輔アナらが中心に報道グループを軸に全国のアナウンサーにも意見を求めながら検討を進め，命令口調や断定表現を取り入れた新しい呼びかけ文を考案した。

また，今後想定される首都直下型地震や東海，東南海，南海地震に備えて初動対応の手引書「地震津波のキャスターワーク」の改訂作業にも着手。最新の被害想定を基に，正常化の偏見を招かない伝え方を半年余りにわたって議論し，震災から１年経った３月に改訂を終え全国のアナウンサーに配信した。

９月，紀伊半島に上陸した台風12号は，記録的な豪雨をもたらし，死者・行方不明者100人を超える大災害となった。半月後，静岡県に上陸した台風15号は，首都圏の帰宅ラッシュの時間帯の鉄道や道路を麻痺（まひ）させた。大勢の帰宅困難者であふれる渋谷駅に，簡易中継システムを携えたアナウンサーが急行し『ニュース７』の冒頭で臨場感あふれるリポートを行うなど，機動力を発揮した。両台風で計84人のアナウンサーが関わり，台風の進路や今後の風雨の見通し，交通情報，生活情報を伝える減災報道に24時間体制で取り組んだ。

〔政治・経済・国際〕

６月，菅総理大臣が条件付きで退陣の意向を表明。アナウンス室では，国会中継や政局報道に延べ22人のアナウンサーを投入し，９月に野田内閣が発足するまでの経緯を詳細に伝えた。首班指名の中継を，高瀬耕造アナと糸井羊司アナが，ラジオの組閣特番を佐藤龍文アナがそれぞれ担当し，国会中継を担当してきたアナウンサーが力を発揮した。

（２）一般番組

11年度は，東日本大震災や原発事故を検証する番組を中心に，さまざまな特集にアナウンサーが対応した他，BS２波化や地デジ移行を周知する特集番組などに尽力した。

震災関連では，特別編成『明日へ～震災から半年』（9.10～11）と『明日へ　支え合おう～震災から１年』（3.10～11）で三宅民夫アナと滝島雅子アナが司会を務めた他，津田喜章アナ（仙台局）と岩野吉樹アナ（水戸局）が被災地リポート，有働由美子アナと小田切千アナが復興支援ステージ司会を務めるなど，合わせて50人以上のアナウンサーが関わった。また「巨大津波　“いのち”をどう守るのか」（5.7），「“世界最大”の液状化」（7.10），「“帰宅困難1,400万人”の警告」（10.9），「映像記録　3.11　あの日を忘れない」（3.4）等の『NHKスペシャル』や，「ネットワークでつくる放射能汚染マップ」（5.15），「検証海の放射能汚染」（11.27）等の『ETV特集』など，合わせて50本以上のドキュメンタリー番組でナレーターを務めた。

４月のBS２波化のスタートに際しては，永井伸一アナが『BSプレミアムキックオフ特番』（4.1～３）の司会を担当するなど，12人のアナウンサーが開局特番に関わり，新しいBS放送の魅力を伝えた。また地デジ移行関連特番『そのときみんなテレビをみていた』（7.24）では，地デジ大使の鈴木奈穂子アナが司会を務めた。

夏の特集編成では，36の番組に27人のキャスターと16人のナレーターを配置。有働由美子アナが『第43回思い出のメロディー』（8.13）で司会を担った他，首藤奈知子アナが『検索deゴー！とっておき世界遺産』（8.6），久保田祐佳アナが『ブラタモリスペシャル渋谷』（8.11）の司会を務めた。また９月には『NHKスペシャル～世界初中継　宇宙の渚』（9.18）で，司会の有働由美子アナの他，稲塚貴一アナや中村慶子アナが中継やリポートを担い，宇宙ステーションからの世界初の生中継を成功させた。

年末年始の特集編成では，『NHKスペシャル～目指せ！日本復活』（1.1）で伊東敏恵アナが司会，徳永圭一アナがリポートを担当した他，第62回の『NHK紅白歌合戦』（12.31）では総合司会の阿部渉アナの他，３か所に中継アナを配置し，被災地に励ましの歌とメッセージを送った。

視聴者層拡大のため深夜帯の番組にも若手中堅アナの積極的な登用を進めた。橋本奈穂子アナの『Shibuya Deep A』の他，堀潤アナの『日本のジレンマ』（1.1）や杉浦友紀アナの『双方向クイズ天下統一』（8.5と8.12）など，ネットと連動させ若い視聴者層に支持を広げる取り組みを行っ

た。

お昼の新しい中継番組『ひるブラ』がスタート。スタジオゲストが視聴者感覚で中継現場に疑問や感想を投げかけ，現場のアナウンサーがゲストと共にライブ感あふれる中継を見せた。東京は，伊藤雄彦アナと田代杏子アナという地方局の経験豊富なアナウンサーが担当し，視聴率は最高で９％台を記録し，視聴者からの支持が広がった。

（３）スポーツ中継

11年７月，女子サッカーのW杯で日本が初優勝した。東日本大震災後の明るい話題になり「なでしこ」の愛称とともに社会現象にもなった。日本女子代表の優勝までの軌跡を全試合中継でふんだんに伝えた。ドイツからの現地実況は，野地俊二アナ，中村泰人アナ，鳥海貴樹アナ，杉澤僚アナの４人が担当，国内キャスターを10人が担い，日本代表初優勝までの感動的な戦いぶりを質の高い実況・スタジオワークで伝えた。

サッカー中継ではこの他，ロンドン五輪出場をかけた男女の予選の戦いを伝えた。女子では『ニュースウオッチ９』の廣瀬智美キャスターが中国からリポート，男子も９月から12年３月までの最終予選を放送した。

BS放送の２波化にともなってスポーツの放送量が急増した。特にMLBは，総放送数が前年の約240試合から1.3倍に増加したが，これまで蓄積してきた高い専門性と人材の全国運用で期待に応えた。またダルビッシュ投手のMLB移籍が決まり，現地キャンプ中継や特番，オープン戦中継など多角的に伝えた。

世界の舞台での日本人選手の活躍についても素早く的確に対応した。女子ジャンプの第１回ワールドカップでは山形・蔵王で開催された大会を連日中継し，高梨選手の初優勝を伝えたほか，テニス全豪オープンで錦織選手が日本勢80年ぶりにベスト８に進出し急きょGTVでの生放送となったが，中村泰人アナがこれまで蓄積してきた高い専門性で伝えた。このほか，マルチ放送の増加によるスポーツ放送拡大に全国のスポーツアナが総力で当たった。

２．アナウンス室番組制作

５年目を迎えた『100年インタビュー』は，BSプレミアムに移行，より「聴き応え」を追求しつつ７本を制作した。黒柳徹子，立花隆，新藤兼人，むのたけじ，塩野七生，内橋克人，王貞治の各氏をゲストに迎え，三宅民夫，石澤典夫，渡邊あゆみ，有働由美子の４人のアナウンサーが聞いた。日本人の「誇り」とも言える「大物」の出演者を迎え「言葉の遺産」を記録するとともに，東日本大震災や原発事故を受けてのメッセージを届けた。ローマの歴史から見える日本の姿を浮き彫りにした作家の塩野七生さんには，再放送希望が53件寄せられた。王貞治さんは，選手・監督として多くの苦難を乗り越えてきた「人生哲学」と野球への愛を率直に語った。年間を通しての反響493件のうち好評が400件以上を占めた。

総合テレビの『お元気ですか　日本列島』の「気になることば」は，９年目を迎え，“ことばおじさん”の梅津正樹アナが，視聴者からのことばの疑問に答える形で，ことばが変化していく背景や各地域のことばの魅力を届けた（同内容でR1『つながるラジオ』でも放送）。11年度は視聴者から876通の質問が寄せられた。

また，韓国ソウルにて「ことばのトークイベント」を開催。梅津アナ，山田敦子アナと韓国KBSアナが参加して両国の言葉の現状と未来について語り合った。このイベントについては，『BSフォーラム～日韓　言葉から未来を探る』『BS特集～韓国の“ことば”最前線～日本語はどう使われているのか』『ラジオ特集～日韓交わることば　ひらける未来～放送の舞台裏からK-POPまで』などを制作し放送した。

東日本大震災から１年を機に３月，被災地を音楽で応援しようという『FMココロウタ』を４時間の生放送で届けた。被災地へのメッセージを視聴者から募集しながら歌を作り上げ，若者を中心にメール・ツイッターで1,200件の反応があった。

著名人の原点となった場所でふるさとへの思いを聞く総合テレビ『ホリデーインタビュー』は，11年度，被災地に向き合う千昌夫さんなどをゲストに迎え，アナウンス室主管で12本を制作。

『ラジオ深夜便』の「戦争インタビュー」「人権インタビュー」は，各５本を制作。全国の若手アナウンサーが，東日本大震災における被災者支援の在り方や性同一性障害，化学物質過敏症，摂食障害など当事者の赤裸々な声に耳を傾けた。

このほか，アナウンサーの朗読で幅広く文学作品の魅力を届けるR1『ラジオ文芸館』を26本，朗読，スピーチ，敬語などのノウハウを分かりやすく紹介するR2『ことば力アップ』を51本制作した。

３．社会貢献への取り組み～お話の会・朗読ひろば

東日本大震災の被災地支援として，アナウンサ

ーが単身現地の小学校に赴き，子どもたちに絵本の読み聞かせや紙芝居などを行う「お話の会」をスタート。被災地の子どもたちの心のケアに取り組んだ。９月から11月にかけて岩手，宮城，福島の５つの自治体の８校（岩手県釜石市立甲子小学校・鵜住居小学校・白山小学校，福島県福島市立清明小学校，福島県新地町立福田小学校・新地小学校，宮城県東松島市立浜市小学校･小野小学校，岩手県大槌町立吉里吉里小学校）で実施し，参加した児童の数は延べ800人にのぼった。岩手県釜石市の回は総合テレビの『ゆうどきネットワーク』（９月26日）で，福島県新地町の回はラジオ第１の『ラジオあさいちばん』（11月19日）で，全国に向け紹介した。

教育貢献活動「NHK朗読ひろば～アナウンサーが広げることばの世界」は５年目に入った。原発事故の影響で福島県南相馬市と浪江町から小学生が避難していた群馬県片品村の学校など12の小学校にアナウンサーが出向いて絵本などを朗読し，子どもたちに「ことば」の魅力を伝えた。参加した児童は延べおよそ2,000人。

・５月31日　群馬県片品村立片品北小学校
・６月１日　群馬県片品村立片品南小学校
　　群馬県片品村立片品小学校
・６月17日　香川県高松市立新番丁小学校
・７月11日　北海道小清水町立小清水小学校
・７月12日　北海道旭川市立神居小学校
・９月27日　広島県広島市立亀山小学校
・10月13日　大阪府豊中市立新田小学校
・10月25日　石川県小松市立符津小学校
・11月22日　福島県福島市立三河台小学校
・12月９日　鹿児島県鹿児島市立山下小学校
・１月31日　東京都青梅市立霞台小学校

映像デザイン

映像デザイン部は，報道・情報・教育・音芸などとドラマ，そしてデザイン計画という３つのグループでほぼ全ての番組美術を担当し，専門性を高めながらデザイン力を結集して番組の質の向上に取り組んできた。

また，10年から引き続き，チャンネルロゴ，ホームページ等や視聴者サービスといった従来の業務の枠を超えた取り組みに挑戦してきた。11年の後半には，12～14年のNHK経営計画の策定に沿ったデザインセンターの３か年計画を基に，映像デザイン部として，新しい時代のデザインサービスの開拓を始めた。

１．重点事項

（１）東日本大震災プロジェクト

震災から１年のタイミングで，NHK東日本大震災プロジェクト「明日へ」を新たにブランディングした。若葉とサークルをモチーフとするキー・ビジュアルを幅広く展開し，放送から広報・事業まで，キャンペーンの浸透に努めるとともに，「震災から１年」の特別編成では，関連番組の全てを高品質にトータル・デザインした。とりわけ，幕張・福島での『明日へコンサート』では，「みんながひとつになる」ステージデザインで，番組を視覚演出した。コンセプト構築からグラフィック／クラッチ等のCG／セット／イベントと，映像デザイン部が持つあらゆるノウハウを結集した取り組みとなった。

（２）地域支援・スタジオ環境グレードアップ

全国の拠点局，放送局のスタジオセット等の基礎調査を行った。調査結果を基に全局的な展開を視野に入れ，モデルケースとして，山形，盛岡を選択，東北２局のセットを更新し，スタジオ映像のグレードアップを図った。これは，地域支援の一環として，各地域放送局の個性や特性を生かしながら，より広く，機能的にスタジオを使うプランを提供するとともに，東京のニューススタジオや各拠点局のスタジオとのトータル感をもったデザインを提案し，視聴者にNHKブランドをより強く意識してもらうことを目的とした。

（３）コーポレートデザイン

未来のNHKをイメージし，それに伴う課題（コンテンツ・ブランディング／メディア横断／顧客サービスなど）の全てに，視覚的回答を出してゆく，ブランド管理の取り組み「コーポレートデザイン・プロジェクト」を部内に発足。「スーパーハイビジョン」，新BS「BS1」「BSプレミアム」，東日本大震災プロジェクト「明日へ」のブランディング，そしてスタジオパーク・リニューアルのアート・ディレクション，および『大河ドラマ～平清盛』や『第62回紅白歌合戦』等キラー・コンテンツにおける番組本編デザインとPRデザインを連動させるコンセプトワーク等は，新たなデザイン業務展開の実績となった。

（４）共同研究

映像デザイン部と昭和女子大学および平井聖特任教授の３者で08年より推進している，共同研究「江戸城の復元」の図面複元作業は，江戸城本丸・大奥・上御鈴廊下・御小座敷等の建造物まで終えた。また，コンピューターグラフィックスによる

３次元映像化に向けた作業も，江戸城本丸・大広間・松之廊下・黒書院・白書院などの主要建造物の３次元化が順調に進んだ。東京都立中央図書館，川越市喜多院などの協力もあり，貴重な資料を基に復元作業が順調に進行した。研究成果については，今後の番組で使用可能な高精細CG映像として，放送に還元していくことを検討した。

（５）デザインCGコーディネート窓口

年々増加し，表現手法が高精度化しているCG業務の情報集積と分析，そして，局内リソースの効率的運用のために，10年度にデザインCGコーディネート窓口を設置した。11年度は，大型企画番組の『NHKスペシャル』「ヒューマン」「コズミックフロント」等のCG制作に加えて，東日本大震災関連の地震，津波のメカニズム，原発などのCGが多数制作され，総合的にCG制作が増加したが，局内リソースの一つであるペイントシステムの稼働率が窓口開設前の09年度と比較して10％以上アップし経費効果を得た。

（６）CS向上活動

11年５月の「渋谷DEどーも2011」では，『大河ドラマ』「江」で使用された大阪城の「茶々の部屋」を展示した。秋の「NHK文化祭2011」では体験型のイベントとして，眼の錯覚を利用し，背丈が伸びたり縮んだりするような体験ができる「のびちぢみの部屋」の展示を行った。いずれも列の途絶えることのない人気を博した。

NHKネットクラブとの共同企画として，大道具の作業現場の実演を含めた「バックステージツアー」を２回開催した。それぞれ午前午後の２部制をとって，参加者の増加を図った。

芸術系の大学生を対象とした「NHKデザイン講座」は，５回目となり，共同ビルの会議室での開催に加えて，11年度は，大学に出向いて開催する「出前講座」を２度開催した。

２．番組制作における映像デザイン

（１）報道・情報番組

ニュースセンターのスタジオセットの全面更新を行った。11年度の初めから運用開始の予定をしていたが，震災の影響により，更新工事を延期し５月23日より新セットでの運用を開始した。セットとしては，フロアーの間仕切りを撤去し広がりのある空間に仕上げた。また，センサーを内蔵した大型スクリーンモニターを３台導入して，多様な映像表現を用いた視聴者に分かりやすい新しいスタジオ演出を提案した。

２波化によって生まれ変わったBSについては，『地球テレビ エル・ムンド』『BS歴史館』といった番組で，新たなチャンネルイメージを創造する質の高い空間演出を実現した。

（２）教育・文化福祉番組

さまざまな番組を通じて，新たな視聴者層の獲得に取り組んだ。「愛されて50年♪みんなのうたフェスティバル！」では，古い劇場をイメージしたバーチャルセットのステージに，当時のアニメーションを利用した斬新でかつ懐かしい映像を展開した。番組ゆかりのアーティストが熱演し，大人から子供まで楽しめる番組となった。

洋楽の名曲から生きた英語を学ぶ『アンジェラ・アキのSONG BOOK in English』では，自然と人が集うような大きな木をモチーフとした柔らかな風合いのビジュアルで，若年層にアピールした。

（３）ドラマ番組

10年という歳月をかけて制作し，３年間の放送の最終章を迎えた『スペシャルドラマ～坂の上の雲』は，二百三高地，日本海海戦という日露戦争のクライマックスを壮大なスケールで描いて，司馬作品の世界観再現を追求し，視聴者を満足させる高いクオリティーと魅力的なエンターテインメント性を両立させた。

『大河ドラマ』「平清盛」では，綿密な時代考証に基づいたセットで，時代に生きた人々の息吹やエネルギーを感じさせる世界観の構築に取り組んだ。岩手県，広島県などで大規模なロケを計画し，現地でのセット製作を行うことで，インパクトのある高品質な美術を目指すとともに，コスト削減に努めた。

『連続テレビ小説』「おひさま」では，戦中戦後の時代をリアルに再現し，質の高いデザイン力で番組を盛り上げた。

『BS時代劇』「テンペスト」，『土曜ドラマ』「神様の女房」「蝶々さん」等では，メインセットの共有化を図り，クオリティーアップと予算の効率運用に貢献した。

『ドラマ10』「セカンドバージン」については，その映画化に際し，外部制作会社へデザイナーの国内派遣を行い，その美術手法を学んだ。

（４）音楽・芸能番組

毎年恒例の『紅白歌合戦』『思い出のメロディー』『ニューイヤーオペラコンサート』，そして大型特番『明日へコンサート』等はいずれも，震災を経て，エンターテインメントの力と意義をいま一度再認識させる，高品質なステージ・デザインとなった。

会場をBKホールに移した『思い出のメロディー』は「救い」の象徴としての「オーロラ」をモチーフとした舞台美術で多くの感動を導き出し，『第62回紅白歌合戦』では，「はじまりのかたち・あしたのはじまり」というデザインコンセプトから，トライアングルをモチーフとした大規模な映像ステージを構築し，一曲ごとの緻密な視覚演出により，希望を与える番組づくりに貢献した。

これら恒例の番組で築かれた音楽・芸能デザインの高度な専門性と豊かなノウハウ・表現力は，『歌謡コンサート』『MUSIC JAPAN』『ごきげん歌謡笑劇団』『SONGS』『にっぽんの芸能』等の定時番組でも継続的に発揮された。

また『第62回紅白歌合戦』においては，企画への早期参画により，PRから本編まで，コンセプトを統括的に視覚化してゆくブランド管理の役割へ進出した。

３．デザイン計画

デザイン計画班は，番組の総合窓口機能と部の企画総務機能の両方を持ち合わせ，NHKアートとの契約窓口，CGコーディネート窓口，システム管理，予算管理など，部の重要な位置を占めている。総合デスクを配して，質の高い番組制作に資するため業務割当を計画する一方で，美術規模の策定検討や美術業務契約の仕様検討などを行い，映像デザイン部の業務全体に責任を持つ。

美術用品の保管・管理や美術セットの倉庫保管と運搬・排出，そして，環境経営については，データの蓄積・分析などを実施し，それを基に業務の見直しを図り，業務に伴う経営資源の効率的な運用に努めた。特に11年度はセンター内の保管場所確保のため，一部の倉庫を２階建にして，収納スペースの拡充を行った。

また，経費の効率化と番組の質の向上に貢献するため，10年度より展開している「障壁画のデジタルデータ化」（これまでに描かれた，時代劇に使用する，貴重な床絵や襖絵をデジタルデータとして残して簡便に使用する。）を11年度も推進し，『大河ドラマ～平清盛』において実践的にデジタルデータからプリントアウトした絵襖を使用した。

音響デザイン

音響デザイン部は，放送を音で支える専門家集団として，品質を追求した番組制作，公共放送としての信頼，国民の安全安心を守る発信力の強化などNHKが約束する経営目標に対して，高い専門知識とスキルで，放送サービスの充実に取り組んでいる。11年度は完全地上波デジタルとBS二波化による新しいコンテンツ制作と東日本大震災の緊急報道，関連番組制作に全力で対応した。

完結した『坂の上の雲』，視聴者層を意識した「江」，震災からの復興と重なり合った「おひさま」，そして震災報道，『NHKスペシャル』『クローズアップ現代』など，さまざまな番組の楽曲制作を含めてトータルな設計で音響監督として番組演出の一翼を担ってきた。また，音響デザイナーならではの切り口で，放送と通信との融合に挑戦する番組も制作することができた。

今後も「頼りにされる専門職集団」として地方局の番組制作も含め，熟練の専門性で力強く支え，NHK番組全体の質的向上を目標に掲げていく。

１．番組制作関連

（１）東日本大震災対応および震災関連番組

発災直後から情報構成グループを流動的な編成に即応できる体制に強化し，災害報道に備えた。『NHKスペシャル』『ETV特集』『クローズアップ現代』や東北管内制作番組の支援に全力で対応した。被災地の現状，被災者の心情，進まない復興，原発事故と放射能，政局と財政など，災害規模の大きさと長期化にともない取材内容も多岐にわたり，デザイナーの番組理解力と音響構成力が試された。震災報道の音楽使用について音響デザイン部で意思統一を図り，デザイン方針の徹底と指導を行った。

（２）『NHKスペシャル』

「ホットスポット　最後の楽園」「ヒューマン なぜ人間になれたのか」「未解決事件」など良質で個性的な大型企画に対して，緻密な音楽構成と丁寧な音響効果で番組の世界観を明確にし，声価を高めた。「国境の海・日中知られざる攻防」「ユーロ危機　そのとき日本は」「世界を変えた男 スティーブジョブズ」「緊急報告　北朝鮮はどこへ向かうのか」など緊急性と注目度が高い内容にも，事態の深層を浮き彫りにする冷静かつ大胆な音響アプローチで訴求力のある番組を支えた。

（３）報道・スポーツ番組

厳しい寒波と自然災害，円高と欧州経済危機，基地問題，社会保障と税制改革など多くの政治・経済・国際の課題に対して，真正面から取り組むNHK報道への視聴者の期待に応えるため，音響デザイン部も全力で臨んだ。『おはよう日本』『ニュース７』をはじめニュースセンターで送出され

るほとんどの番組テーマ曲をコーディネートした。

（４）情報・教養・開発番組

『地球イチバン』『ワンダー×ワンダー』では世界の秘境を冒険するワクワク感，知らない暮らしや人々と出会う感動をバラエティーに富んだ音響表現で描き，「家族揃って楽しめる」番組コンセプトを支えた。『ドラクロワ』『サラリーマンNEO』では視聴者層を意識したテンポ良い斬新な音響デザインで番組の個性を明確にした。

（５）ドラマ

『大河ドラマ～江～姫たちの戦国』は戦国時代の混沌とした世に翻弄された女性たちの人間模様を描き，美しくも躍動感ある音楽で番組に親しみをもたらした。『連続テレビ小説～おひさま』は，朝ドラ放送開始50周年の節目のドラマとして，戦中戦後の昭和の時代を仔細に描き，音楽は安曇野の大自然と家族愛の両面を美しい旋律で綴った。

『スペシャルドラマ～坂の上の雲』（第３部）は，３年間におよぶ大型ドラマの完結編として，明治の混迷期の中にある壮大な人間ドラマを，時代の息吹と共にしっかりと描ききった。単発・シリーズドラマは『土曜ドラマスペシャル』『ドラマ10』『BS時代劇』『よる☆ドラ』『ケータイ発ドラマ』『創作ドラマ大賞ドラマ』などで，番組のカテゴリーと視聴者層を意識した音響デザインを心掛けた。

地上デジタル放送の可能性に挑戦したマルチチャンネルドラマ『朝ドラ殺人事件』では主・副チャンネルを同時に使って２場面を同じ時間軸で進行させる初めての演出に音響設計から携わった。

地域ドラマは本部デザイナーの役割を継続して投入，北海道発ドラマ『大地のファンファーレ』（5.1chサラウンド），大分局ドラマ『無垢の島』，佐賀局ドラマ『あのひとあの日』で，作曲コーディネートから現地局での仕上げ作業まで一貫した制作応援を行った。

オーディオドラマは『FMシアター』『青春アドベンチャー』『新日曜名作座』『特集オーディオドラマ』のすべてにおいて，ラジオならではのイメージの世界を追求する音響デザインを行った。

（６）BS1・BSプレミアム

BS２波化で新設された『ワールドWave』は朝・昼・夜の時間帯ごとの個性を出したビビッドなテーマ音楽で世界の今をスピーディーに伝えている。『新日本風土記』は丁寧なSEと情感豊かな音楽で，日本各地のふるさとの風景と人々の生活を生き生きと描きだした。

（７）ミュージックライブラリー

今まで番組が委嘱してきたオリジナル音楽や試作品音源を再発掘し新たな楽曲も加え，質が高く使い勝手のよいライブラリーとして整備した。２月には新年度の地方局夕方のニュースをターゲットに運用を開始し，各放送局で高品質の楽曲が手軽に使用できるようになった。今後もライブラリーの充実を継続し，地域支援と放送資産の有効活用に取り組んでいく。

（８）スーパーハイビジョンソフト開発

11年度，音響デザイン部は多種多様なスーパーハイビジョンのコンテンツ制作に参加した。東日本大震災にみまわれた町並みを記録したコンテンツ『東日本大震災被災地の記録』をはじめ，スーパーハイビジョンコンテンツの共通ロゴの制作や12年ロンドン五輪を視野に入れたスポーツ中継コンテンツ『コパ・アメリカ』，秋にリニューアルされたスタジオパーク用コンテンツや最後のスペースシャトル打ち上げのもようを記録した『ラストシャトル』。それに美術コンテンツ『若冲』など多彩な作品群の制作に関わり，豊かな22.2chの音場を構築。次世代メディアの成熟に寄与した。

２．番組企画

1985年４月に始まった「音の風景」は27年目に入り，11年度は新作40本を制作した。地域と季節にこだわり，さまざまな視点から題材を取り上げ，音の魅力を伝える番組とした。ナレーターは北郷三穂子アナウンサー。09年度から行っている『ラジオ深夜便』内の放送は３年目となり，過去の放送から365本毎日違う内容を提供した。

特集番組としては『SLのある風景』『みんなでつくる音の風景』『奥会津、からむし織の響き』を制作した。『SLのある風景』は，今では数少なくなったSLを徹底取材する番組として，10年度に引続いて２本を制作。シゴロク（C-56）と森林鉄道雨宮21号を取り上げ，10年度の３本と合わせて五夜連続で年末年始に放送した。『みんなでつくる“音の風景”』はラジオ第２の放送開始80周年の番組として１月２日に放送した。まず『音の風景』の音源を特設ホームページで公開し，その音からイメージする写真を投稿募集。写真一枚一枚を音に組み合わせてスライドショーを作成し，放送に同期させインターネットで公開するという視聴者参加型の新しい試みに挑戦した。出演は渡辺徹さん，市橋織江さん（写真家），北郷三穂子アナウンサー。『奥会津、からむし織の響き』は福島県昭和村で古くから栽培されてきたからむ

しを題材にした番組。日本の伝統美と故郷の大切さを描くラジオドキュメンタリーとして，伝統の技，人々の営み，豊かな自然を紹介した。ナレーターは俳優の大地康雄さん。

「音の風景ホームページ」を５年ぶりに大規模リニューアルし，音にこだわった番組としてサンプル視聴を可能とした。また地図情報サービスを使って場所を表示できるようにしたほか，番組内容や取材風景を写真で詳しく紹介し，視聴者サービスの充実につなげた。

３．設備関連業務

建設計画で採択された音響デザイン準備室SE-6をリニューアルし，効果音ライブラリーサウンドステーションにサラウンド対応効果音検収設備（SE-9）を新規に整備した。いずれの設備も３年前から続けている一貫した整備方針にのっとって操作性の統一を図り，使いやすさを追求。サラウンドの番組など多チャンネルを必要とするコンテンツにも対応でき，モニター環境などもスタジオに準拠したものに整備することで，より完成度の高い番組準備作業などが行えるようになった。また，年間を通じて小規模準備室SE-7とSE-8の整備計画を推進実行。空調工事や床面壁面を張り替えて作業環境の不具合を無くすとともに，準備室内マシンコーナーを整備し直すことにより打ち合わせ空間を確保するなど，準備室としての機能改善を行った。

４．サウンドステーション・ライブラリー

11年度，サウンドステーションおよびライブラリーは，複数年継続計画実行中の「季節の地域シリーズ」を11年度も実施。セレクトした地域の特色ある情景を季節ごとに定点で収録し，不足気味の地域の音の収集に努めた。11年度セレクトした地域は３か所。世界自然遺産に登録された小笠原ではホエールウォッチングやドルフィンスイム，フェリーの発着，波音など。鳥取県では境港の繁華街や競り市，大山や鳥取砂丘のベースノイズを収録。島根県は出雲大社や琴ヶ浜，宍道湖などの諸々の音を収録。地域色豊かな効果音の拡充に努めた。他に，部内でリクエストの多かった「自転車走行音」の重点収録を行った。さまざまな自転車の通過音や走行音をスピードも変化させて収録するなど，使い勝手のいい効果音の収録を目指した。効果音の相談窓口であるサウンドステーションでは，11年度建設計画で採択された「サラウンド対応効果音検収設備（SE-9）」の整備のため，大規模なレイアウト変更を行った。テープ系効果音の整理や効果用具収納の棚を可動にするなど，スペースの有効活用に努めた。